

破界せよ、総てを

アゴン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、第二次スーパーロボット大戦Zにブロリーをぶち込んだだけの物語。

以前にじふあんでも投稿していた作品です。所々修正したりするので、またよろしく願います。

# 目次

prologue with……	1
第一話 野菜、おいしい……です。	8
第二話 降臨、魔を討つ悪魔	18
第三話 契約	35
第四話 世界を動かす者達の衝撃	46
第五話 エリア11	61
第六話 動き始める世界。	75
第七話 そうだ。熱海行こう。	86
第八話 神と悪魔。	96
第九話 それぞれの考察1	111
第十話 無理とゲッターと金色と	124
第十一話	134
第十二話 純血派	142
番外編 集え、はじまりのもとに	152

prologue with……

「カカロット……カカロ……ッ」

無限に広がる大宇宙、廣大過ぎるこの世界に一隻の小さい宇宙船が漂流していた。

小型の宇宙船に乗っている男の胸元には貫かれたかの様な深い疵痕が刻まれており、そこから夥しい量の血が流れている。

常人ならショック死、または出血多量でいずれにしても死に至る。

しかし、それでも男の命には届かずじいた。

「カカロ……ッ」

男は怨念にも似た感情で名前と思われる言葉を何度も口にする。

まるで、そんな言葉しか話せないかの様——いや、実際に男に

はそれしかなかった。

傷口から流れる血と共に男からあらゆるモノが消えていった。

記憶に名前、自分が何者だったのか、そして何故これほどまでにカカロットという名に反応するのか……それすら判らなくなっていく。

否、それは駄目だ。それだけは許さない。

記憶なんていらぬ、名前なんていらぬ。

記憶なんてものは自分には些細なものだし、名前だって不要だ。

だが、これだけは駄目だ。これだけは手放す訳にはいかない。

コレは自分の存在意義であり、根幹。

コレが無くなれば自分は自分ですらなくなる。

「■■■■■■■■■■ッ!!」

男は吼えた。痛み、そして自分の中から消えていくモノに抗いながら、男は小さな宇宙船の中で叫び続ける。

それは、慟哭にも似た魂の叫びだった。

口から放たれる叫びに意味はなく、ただありつただけの感情を乗せて、男は吼え続けた。

響き渡る男の叫びは、宇宙にまで轟いていく。

その最中、自分以外いる筈のない宇宙船で声が聞こえてきた。



◇

様々な世界、様々な宇宙……。

別の時空に存在するそれらは並行世界と呼ばれ、互いに交わる筈のないものであった。

そう……あの日がくるまでは。

大時空震動……。

とある世界で発生した巨大な時空震動により、それぞれの世界を隔てる次元の壁が破壊され、数多の世界は混じり合い、多くの新たな世界が生まれた。

それが多元世界の誕生である。

新たな世界の誕生は新たな出会いを生み、新たな出会いは新たな戦いを生み、多くの多元世界が誕生から長い間混沌の中にあった。

しかし、その中のいくつかには次第に新たな秩序が生まれていった。

宇宙へは軌道エレベーターが伸び、地球外部にはそれを支えるオービタルリングが関西し、ラグランジュポイントではスペースコロニーが次々に建造されていた。

しかし、どんなに技術が発展しても、世界に平穏は訪れなかった。

大時空震動により北米大陸に同時に存在する事となった連合国家ユニオンと、神聖ブリタニア帝国の合併によって誕生した《ブリタニア・ユニオン》

ヨーロッパ各国の連合である《AEU》

中華連邦を中心にアジア各国とロシアが連合を結んだ人類革新連盟、通称《人革連》

この巨大な三国は三大国家と呼ばれ、世界の覇を握るべく睨み合いを続けていた。

国際的な意思決定機関として国際連合が存在するものの、事実上、世界は三大国家に統治されており、スペースコロニーも三大国家によ

るコロニー宗主国連合（CMC）に管理という名の下に支配されていた。

三大国家の冷戦状態が続く中、各地では小競り合いが続いていた。小国間の争い、政府軍とレジスタンスの対立、テロの横行……。

二年前に新たにこの世界な一員となったアストラギウス銀河の間たちは軍組織をそのまま傭兵組織として戦火拡大に一役買った。

また、人類には共通の敵が存在していた。

別の次元から散発的に現れる謎の生命体、《次元獣》である。

大時空震動の直後に発生したイマージュの襲撃が減少する一方で、次元獣の出現は年々増加する傾向にあった。

不安と怒りの火種を多くの人間が抱えたまま、今日も世界は回る。そして、その先には変革という名の戦いの嵐が待ち受けていた――



「はあ……これで漸く今日の公務は終了か」

夜の海に月が照らす海岸通り、専属の運転手に車を走らせ、後部座席に座る女性は苦々しく呟いた。

年齢25歳で外務大臣の席へ着くことになった女性、彼女の顔は連日の激務により疲弊の色は強く、銀色に輝く髪はゴワゴワと痛んでいる。

今日の公務は現時点を以て終了、しかし、あと数時間もすれば次の仕事が始まっている。

自ら進んでこの道を進んだとは言え、流石にキツイ。

「だけど、リモネシアの繁栄の為にも、私が頑張らないと……」

自分に言い聞かせる様に呟き、車窓から見える景色を眺める。

美しい景色、黒に染まる海に星々が海面に反射し、大海に散らばった寶石箱の様に映るこの光景は、正に幻想的なモノだった。

この景色を守る為にも、自分が頑張らなければ――。

女性は胸の中で意を決してきた……その時だった。

「ッ!?!」

耳をつんざく様な鋭い音と共に大地が――空間が揺れる。

突然の事態にドライバーは急ブレーキを掛け、車を停止させる。

「まさか……時空震動!?!」

時空震動、土地や人物ごと別世界から転移してくる……所謂次元の地震。

大時空震動以来、時折起こる自然災害である。

やがて揺れは収まり、夜の静寂が辺りを包みこむ。

波の小波が細かくを揺らし、暫くして漸く彼女は時空震動が収まったのだと気付いた。

「お、収まった?」

辺りを見渡し、何もない事を確認すると、女性は恐る恐る車から降り、海に向かって歩き出した。

その時だった。

「ひ、人……?」

波打ち際で倒れてる人影、女性は警戒しながら近付くと。

「ひっ!?!」

女性はその光景に言葉を失った。

全身から流れる血、端からみれば明らかな死体が波打ち際に転がっていたのだ。

腰を抜かし、砂場に座り込んでしまう状態。

すると。

「あ……ぐっ」

「っ!?!」

死んでいたと思われていた男から掠れた声が聞こえ、女性は恐る恐る近付き、胸元に耳を添えると。

――ドクン。



「！ まだ、生きてる」

心臓から聞こえてきた小さいが確かな鼓動。

「ちよつと！ 早く来て！ この人はまだ生きてるわ！」

気が付けば、いつの間にか女性は男の命を救う事に夢中になっていた。

ドライバーを呼びつけ、男を車に乗せ、病院へと走らせる。

此処からならば近い所に病院があるし、救急車を待つよりも早く男を助けられる。

正直、どうして自分がここまで必死になるのか、女性自身判らなかつた。

女性はどちらかと言えば慎重で、悪く言えば臆病な人間に分類される。

本来ならこんないきなり現れた人間に構う事などそれこそ有り得ないのに、だ。

なのに、今こうして男を死なせまいと傷口を手で抑えている。

(一体、貴方は何者なのです?)

女性の質問に、男は答える筈もなく、ただ苦しげに呻くだけ。

苦しそうに、何より泣いている男に女性はその額に手を乗せ。

「大丈夫、きつと助けるから」

幼い子供をあやす様に語り掛けると、男は僅かだが表情を和らげるのだった。

混沌とする世界、其処に平和がないのなら――。  
破界せよ、この世の総てを。

## 第一話 野菜、おいしい……です。

「ぐっ……あが」

痛い、苦しい。

全身に掛かる激しい痛みに悶え、四肢が斬り刻まれる様な熱さに耐えきれず。思わず目を開けると。

「……は？」

視界に広がっているのは真っ白な天井と、鼻腔を擦る薬品の臭い。

「普通なら」ここで戸惑いながらも、自分が病院の一室である事に気付くのだが、男は全く状況が理解出来ずキョロキョロと辺りを見渡すだけ。

「どこだ……」

白い壁に囲まれ、開いた窓からは海が見え入り込んだ海風がカーテンを揺らしている。

「……綺麗だ」

窓から見える景色を見て、ありのままに感じていた感情を口にする。不思議と、全身に感じる痛みは和らいだ気がした。

「漸く目を覚ましましたか」

「！」

引き戸の扉が開かれ、部屋へと入ってきたのは黒スーツを身に纏う二人のSPを引き連れた女性。

癖っ毛なのか、至る所に跳ねっ毛があり、目の下には隈が出来ている。

「お前は……誰だ？」

「随分なご挨拶ですね。一応、私は命の恩人なのですが？」

「おん……じん？」

「覚えていませんか……ま、あれだけの出血にあれだけの傷を受けていたら、当然と言えば当然か」

「きずう？」

言われてみれば腕や体には幾重にも重なった包帯が所狭しと巻かれていた。

道理で全身が痛かった訳だ。男は自分の体を見つめていると。

「それでは、お互い自己紹介をしましょうか。私はシオニー＝レジス、このリモネシアの外務大臣を勤めています」

「はあ……」

「それで、貴方のお名前は？」

促す様に聞いてくるシオニーと名乗る女性は、男の名乗りを待つが……。

「お、俺は……」

「？」

「俺は……誰だ？」



「はあ、まさか完全記憶喪失だとは……」

仕事場へ向かうリムジンの中、その中ではリモネシアの外務大臣、シオニー＝レジスが深い溜め息を零していた。

完全記憶喪失。その名の通り完全に脳の記憶、知識、経験が失われている人間の状態を差す言葉であり、下手をすれば服を着る等と言った最低限の知識すら失っている場合もある。

だが、幸いあの男は服を着るといふ最低限の常識程度は失っていないようで、その辺りはホツとしている。

しかし、厄介な人間を拾ってしまったと言う事実は変わらない。しかもただの記憶喪失者ではなく、時空震動で現れた人間だ。

既に国連に「先日、我が国で時空震動が起こったが、被害もなく特

に変化らしい変化はなかった」と、報告してしまっている。

ここで厄介払いで国連に男の保護を求めても、どうして報告を怠った等、根掘り葉掘り聴かれ、最悪の場合三大国家の何れかに介入されてしまう可能性だってある。

リモネシアの繁栄と平和を願う彼女にとって、それは非常に宜しくない事態だ。

大国が世界を支配するこの時代、僅かな弱みを見せる事は許されない。

小国でありながらそんな時代に真つ向から挑むシオニーの姿は、このリモネシアでは大勢の……更に言えば若者に絶大な支持を得ていた。

(それに、“あの”計画を成功させる為にも、下手を打つわけにはいかない。ここは様子見が妥当か……)

あの男の事はこちらで監視するとして、問題は大国がどう反応するかだ。

冷戦状態となっている現世界情勢、僅かでも他の国と差を付けたいと狙っているのが三大国家の本音。

そんな飢えた猛獣に対し、シオニーはどう出し抜くか頭の中で考えていると。

『ちよつと、ちよつとシオニーちゃん!』

「なんですか、五月蠅いですよ静かにして下さいボンボン」

『酷っ!? そりゃ確かに僕は金持ちだから否定はしないけどさ、それは流石に傷付くよシオニーちゃん』

目の前の電子画面(ディスプレイ)に映し出されているのは、羽織の良さそうな人物、如何にもお坊ちゃんな風貌の男性。

こちらの皮肉にもヘラヘラとした態度で受け流し、その態度が真面目な彼女の神経逆撫でする。

「それで、一体私に何の用ですか?」

『いやだってさ、先日君の所で時空震動があったじゃない? 協力者としては心配だしや』

「本音は?」

『そつちに何が出て来たのか気になって気になって!!』  
「……………」

『わー！…ごめん！ 嘘！ 冗談だから切らないで!』  
清々しいまでのドヤ顔に通信を切りそうなる。

「それで？ 実際何の用で連絡してきたのです？ これから私はA E Uの重役と会談があるのだけれど」

『いやあ、ただの暇潰——』

ブツリ。奴が言い切る前に通信を切った自分はきつと悪くない。  
そもそもマトモに奴と会話など出来る筈もなかった。

奴は金で全て解決出来ると思ひ込んでいる。いや、実際そう出来るから余計に質が悪い。

今回の通信も恐らくは必死になっている此方をからかひに来たのが本音だろう。

(もうよそう、これ以上奴で悩んではそれこそ時間の無駄だ)

頭を振り、気持ちを切り替える。奴の様な人格破綻者より、例の男はについて考えた方がまだ有意義な時間の潰し方と言えるだろう。

(そう言えば、確かあの男の担当医が言っていたな)

三日前、担当医だった者が酷く興奮気味に話していたのを覚えてい  
る。

当時、血塗れだったあの男を助けた時、正直助かる見込みはほぼな  
かったらしい。

傷付いた体から流れる血はどう見ても出血死、或いはショック死、  
胸の抉られた傷は即死する程だと担当医は語る。

目の前に担ぎ込まれ、呼吸しているのを確認するまでは死体を連れ  
てきてどうすると、呆れられていたらしい。

担当医は言った。有り得ないと。

タフとか、強運だとか、そんな偶然で済ませられるレベルではない。  
生命の活動限界を、明らかに超えているのだ。

しかも、術式後は二時間後に早くも回復の兆しを見せ始め、峠もど  
こぞの走り屋の如く瞬く間に乗り越え、  
“順調”に男は回復し、あれ  
だけの傷を三日で完治させたのだ。

人間ではない。担当医は男の事をそう評価した。

「人間ではない……か」

顎に手を添え、シオニー・レジスは考える。

記憶が戻らなくても、もし利用出来る相手ならば、こちら側に引き込めないだろうか？

幸いあの男の存在を世間には公表していない、だったらその並外れた生命力を利用して自分の専属ボディガードに仕立て上げるのもありかもしれない。

一瞬だけそんな事を考えるシオニーだが、すぐ様その考えを改める。

「……無理ね、あんな優男ではボディガードはおろかマトモに警備だつて出来やしない」

優男、シオニーは男をそう評価する。

だが、それも無理もない事かも知れない。体付きは引き締まっているが、顔付きは全然でハッキリ言つて弱そうなのだ。

虫も殺せなような弱々しいと目、何よりも男にはそう言つた覇気が全くない。そもそも記憶喪失の人間に一体何を頼むつもりでいるのだ。

「どうやらよっぽど疲れているみたいね」

アホな事を考えている自分に活を入れ、シオニーはA E Uの重役の待つ会談場へと車を急がせるのだった。

頑張れ私、家に帰れば温かいご飯が待っているから。



何て考えていた時期が彼女にもありました。

「なによ……これ」

会談も終え、仕事も終わり、漸く自宅に帰ってこれたと思えば、出迎えたのは食い散らかされた食べカスの山。

何事かと思い、リビングへと駆けつけてみれば、其処には地獄が待っていた。

床一面には玄関先以上に散乱している食べ屑の山、飲み物の入ったペットボトルは一滴も残らず飲み干され、買い置きの子キンは目の前の男に骨ごと食い潰されていた。

一心不乱に食べ続ける男、すると漸く此方に気付いたのか、男は骨付き肉をかぶりつきながら振り返り。

「おかえりなさい……です」

「あ、た、ただいま」

いきなりの挨拶に戸惑うも、シオニーは咄嗟に返す。そう言えば、こうして誰かに「おかえり」なんて言われるのはいつ以来だろう。

外務大臣と言う役職に付いてから、日々公務の仕事に追われ、家にはあまり帰れず、帰ってもただ眠りに来るだけ。

だからだろうか、目の前の彼におかえりと言われ、懐かしく思うのは……。

「……ん？」

ふと足下に何かが当たり、反射的に下を向くと、シオニーの目は大きく見開いた。

それは先日、自分の行きつけの喫茶店で販売されている一日10個限定の激レアプリンの残骸だった。

プリンの上に盛られた果物は世界各国から取り寄せたどれも極上の品々。

中央のホイップクリームは甘過ぎず、果物の味をより引き立たせる役割を担っている。

更に、下に敷かれた本命のプリンは企業秘密な特殊な製法で造られる至高の一品。

とある喫茶店のシュークリームに並ぶ人気商品。リモネシアのスイーツ部門第1位名物、通称「グレート・リモネシアプリン」。

それが、剩りにも無惨に食い散らかされていた。



「ふ、ふふ……」

思い返せばこの男を拾ってからと言うもの、碌な事がなかった。

大国に対する政府の対策、国連への報告に公務の増加、A E Uや各国の大臣及び重役との会談、付け加えて嫌みったらしいアクション財団のボンボンとの会話。

極めつけは目の前の男による我が家の食材への蹂躪、挙げ句の果てには1ヶ月に一度しか食べられない貴重なスイーツまで……。

今日の私は頑張った。凄く頑張った。——— だから。

「今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ!!」

——— もう、ゴールしてもいいよね？



「全く、今回は初犯だったから大目にみたけど、次はないからそのつもりで」

「ごめんなさい……です」

あれから一時間、目の前の男対し鉄拳制裁を下した後、シオニーは男と共に家の片付けを同時にどうしてあんな行動を取ったのか問い詰めた。

何でも黒服の男にここへ連れてこられてはみたものの、何をどうすればいいのやら、それすらも分からずに時間だけが過ぎて行き、だんだん腹が減って来て、遂には我慢出来ずに家の中を勝手に物色したのだという。

……確かに、何も知らず、何も覚えていない人間を放っていた自分にも責はある。

仕事にばかり気を向け、記憶喪失である彼に対し満足な配慮がな

かったのが今回の原因。

(高い授業料を払ったと思えば、少しは気が楽か)

少しばかり高く付いた気がするが……。

「それで、何か思い出した？」

「きおく……ですか？」

「そう——って、その様子だと全然みたいね」

「……ごめんなさい」

全く自分の事は思い出せていないのだろう。申し訳なさそうに俯く男に、シオニーは何だか自分が悪者みたいだと思い、咳払いして話を変える。

「ま、まあ記憶の方は焦らずゆっくり思い出せば良い、見つけてしまった以上保護責任者としての責務があるから……記憶が戻るまでは面倒は見るわ」

「ありがとうございます」

「それよりもまずはアナタの服ね、かなり大きいサイズを探さないといけないし、それに戸籍も……」

言いかけてシオニーは気付く。コイツ、名前ないじゃん。

今まで「貴方」とか「お前」とか言ってきたが、そんな事外に出た後にまで続けたら間違いなく不審に思われる。

どうしようと、悩んでいる彼女の視界にある物体が入った。

今晚の前菜として買ってきた野菜の盛り合わせ、すっかりメインディッシュに格上げされた一品だが、その中に気になるモノがあった。

緑黄色野菜でビタミンB、C、Dや他にも多くの栄養素が含まれている野菜。その野菜を見て、シオニーはパツとある一つの名前を思い浮かべる。

「……ブローリー」

「？」

「どうかしら？　いまパツと貴方の名前を思い浮かべただけけれど」  
「……………」

沈黙。

「流石に野菜から名前を付けると言うのは些か不謹慎過ぎたか、真剣な顔で俯いているブロリー（仮）に居たたまれない気持ちでいると。」

「いい……です」

「へ？」

「俺の、名前、それで……いいです」

顔を上げ、見つめてくる瞳の色は相変わらず感情など入ってはいなかった。しかし、それでも名前を手に入れた事でどこか人間らしさを取り戻した。ブロリーに、シオニーは自然と笑みが零れた。

（なんだか、久し振りに笑った気がする）

「さて、明日は私も仕事はお休みだし、ブロリーの服や日用品も買わなきゃいけないから、早く寝るわよ」

「はい……」

「……一応言っておくけど、襲わないでよね？」

「？ おそうってなんですかあ？」

「……」

なんだか、出来の悪い弟が出来た気分だ。

ブロリーの分の寝床を準備し、シオニーはブロリーの教育方針に悩みながら一日を終えるのだった。



「それで、準備の方はどうなっている？」

「ハッ、既に兵力の方は万全。財団からの支援もあり準備は万端です」

「しかし、宜しいのですか？ 財団からは手を出さない事を条件に支援されるのに……これは、明らかな契約違反では？」

「構わん、この国を我等のモノにしたら速やかに財団本部も制圧すればいい。さすれば他の同志達も協力してくれるだろう」

「ではっ。」

「うむ、明日、我等は決起する。目標はこの国——リモネシアだ  
！」

「全ては、大国が支配するこの時代から世界を解放する為に!!」

混沌するこの時代、蹂躪されるのは人の心か魂か？

## 第二話 降臨、魔を討つ悪魔

『それにしても——の息子、生まれたばかりで戦闘力1万とはな』

『まさにエリートの中でも超エリートって奴だな』

『ハハツ、——の倅が——を泣かしたぞ』

『——と名付けられたガキ、戦闘力はたったの5の癖に根性だけは大した奴だ』



瞼を開けると、広がっていたのは白い天井ではなく、茶色の天井だった。

「どうやら木材で出来た天井らしく、この家の主が言うには“につぼん”の家をモチーフに造られているらしい。

家の主、シオニー・レジスは海岸の波打ち際に打ち上げられていた俺を助け、“ほごせきにんしゃ”になってくれたらしい。

「らしいというのは、それは俺が完全記憶喪失者だから——。  
コレまで自分が“たいけん”、或いは“けいけん”、“おもいで”、それら全てが頭の中から消し飛んでいると、いしゃから言われた。しかも、名前込みで、だ。

自分が何者でどの誰なのか、拾ってくれたおんなは記憶が戻るまで面倒をみると言ってくれた。

「それどころか、おんなは名前も失くした俺に新しい名前もくれた。

“ブロリー”、それがここで住む俺の名前。

「なんだか、懐かしい響きの名前である。」

「そう言えば、さつきみた夢も……」

そう言い掛けた時、頭がズキリと痛み、胸の中心がズグンと疼いた。いしやが言うには俺はびょういんに送られた際、それはそれは酷い怪我をしていたんだとか。

特に、胸の中心には傷痕が残り、背中にも似た傷痕があったという。胸に突き刺さった何かが、そのまま背中にまで貫通されていたのだとか……。

そんなじょうたいで、よく生きていられたものだといしやは言う。「そうだ。シオニーを探さないと……」

シオニー＝レジス。俺を助けてくれたおんなでこの家の主。ほごせきにんしやで俺の面倒を見てくれるという大変有り難いおんなである。

確か、今日は俺のかいものどやらに出掛けるのではないだろうか？  
びょういんから出て行く際、唯一貰った服を着て、扉を開ける。

この引き戸はにっぽんの「ふすま」と呼ばれる代物らしい。  
俺はシオニーを探す為に部屋をあとにする。

——頭の痛みは、いつの間にか消えていた。



「……か？」

幾つものふすまを開けるも、どこにもシオニーの姿はなかった。  
リビング、キッチン、ダイニング、トイレに浴室等々、一通り家の中をさがしてみたがおんじんであるシオニーの姿はどこにもなかった。

残されたのはこの《シオニーの部屋》と表札の掛かった一室のみ。

……ん？ どうして最初に此処を調べなかったって？ それは……何となく？

兎も角、此処にもいなければ本当にどうしようもない。僅かな望みに賭け、ふすまの窪みに手を掛けると。

「ん、んう……」

「？」

「やだ。また大きくなったの？ このブラお気に入りだったのに……」

「どうやら正解だったらしい。ふすま越しから聞こえて声を察するにどうやら着替えに手間取っている様だ。」

「丁度良い、コレから世話になるのだ。ささやかではあるが恩返しと言う事も含めて、一肌脱ごうではないか。」

「そうすれば、これからの生活でお互いの気持ちも少しは和らげるだろう。」

「そうと決まれば善は急げ、俺はふすまを開いた。」

「其処には……」

「……………へ？」

「スパアアんと、景氣の良い音と共に目に入って来たのは、裸のおんなだった。」

「手にしているのは変わった形の布切れ一枚だけ……成る程、あれが先程言っていたブラと言う奴か。」

「そうと決まれば話は早い。俺は呆然としているシオニーに近付き……」

「おはようございます」

「え？ あ、おはよう」

「どうやらまだ夢見心地の様子。ならばと、俺は思わせぶりに咳払いをして。」

「着替え、手伝おうか？」

「すると、シオニーは目を大きく見開かせて、パチパチと二回瞬きし、次いで顔は瞬く間に赤く染め上げ。」

「この、馬鹿やろおおおおおっ!!」

「まそっぷ!!」

「涙混じりに放たれたアツパーは、昨夜の一撃よりも遥かに強烈だっ

た。

……一体、何がいけなかったのだろうか？

窓を突き破り、地面に突き刺さるまでの間、俺はその事で頭が一杯だった。

◇

「ごめんなさい……です」

「……………」

あのシオニーにとって衝撃的過ぎた出来事から一時間が経過し、二人は商店街の大通りを歩いていった。

商店街はシオニーの家から徒歩で30分程掛かる距離にある、小さな商店街だ。

無言で歩くシオニーを後ろから付いていくブロリー、体格に差の有りすぎる二人は端から見れば童話の美女と野獣そのものに見える。

ただ、野獣の方はしょんぼりとうなだれてまるで叱られた子供の様だ。

「……次はないから、そのつもりで」

シオニーの言葉にブンブンと首を縦に振り、反省を露わにするブロリー。そんな彼にヤレヤレと呆れながらも許すことにすると。

「おや、シオニーちゃんじゃないかい」

「っ！」

背後から聞こえてきた声、何だと振り返るブロリーに対し、シオニーはビクリと肩を震わせる。

「こつちに来たのは久し振りだね〜！ 今日はお仕事お休みかい？」

「え、ええまあ……そんな所です」

ニコニコと笑顔を浮かべて近付いて来るのは割烹着を身に付けた







「ガツガツガツガツガツガツムシヤムシヤングングングガツガツガツガツガツガツガツガツ……」

「……………」

「……………」

お昼時の定食屋。普段は昼食に来るお客に賑わう場所だが、今は嘘の様に静まり返っている。

テーブルに所狭しと並べ立てられた白い巨塔は全てブロリーが平らげた料理のあつた皿の数々。

20……いや、50人前はあるだろうか。高く積み上げられた巨塔は今尚高くなっていく。

質量保存の法則を完璧に無視しているブロリーに、シオニーと定食屋の女店長であるおばちゃんはアングリと口を開いている。

そしてその光景を外から見た人々は、ブロリーの有り得ない食事風景に驚き、定食屋の暖簾を潜れずにいた。

（そうだ。コイツ、かなりの大食漢だった……）

頭を抱え、悶えているシオニーを余所に未だ食べ料理を続けるブロリー。

幾ら朝御飯を食べて来なかったとはいえ、これは明らかに食べすぎだ。

「おかわり」

（まだ食う気か!?!）

そんな彼女の気も知らず、皿を掲げてお代わりを求めるブロリーにシオニーはいよいよキレそうになるが。

「ごめんねえ、材料が無くなっちゃって……もう料理作れないのよ」

（とうとうコイツ、店の材料全て平らげやがった）

呆れてもう言葉が出ない。店の中にある食材を食らい尽くしたブロリーにシオニーは昔流行ったレトロゲームに出てくるピンクの悪

魔なるキャラクターを思い出した。

「いやあそれにしてもお兄さん、良い食べっぷりだねえ、作ってるコツチまで嬉しくなっちゃまうよ」

ブロリーの異常な食欲も、この人にすればその程度の感想絶賛しかいだかない。大物に思わせる女店長を余所にシオニーは席から立ち上がる。

「今は持ち合わせがないので、後日此方に請求して下さい」

「あ、シオニーちゃん！」

レジに一枚の紙切れを置くと、シオニーはそそくさと店を後にし、商店街の奥へと消えていく。

ブロリーも急いで追いかけようと、立ち上がるが、待つてくれと女将に呼べ止められる。

「ねえ、ブロリーちゃん。あなた、シオニーちゃんどれ位の付き合いなの？」

どれ位の付き合いと言われても、ブロリーは答えようがなかった。自分は人との付き合いどころか記憶ごと全てを失っているのだ。

故に、ブロリーは女店長の質問に答えられる術はなかった。

「シオニーちゃん、昔は良く学校帰りにウチに寄っていたの。お腹すいたって、当時のこの国はあまりお金がなくなつてね。店も大したモノが出せずにいたんだよ、それでもシオニーちゃんは毎日ウチに遊びに来てくれて、出された料理に文句一つ言わないで美味しい、美味しいって言ってくれたのよ」

懐かしく、だけど悲しそうに語る店長に次第にブロリーは聞き入っていた。

「だけどあの子が今の仕事に付いてからここに来る事は一度もなかったの。何でも地域開発に忙しいみたいだね」

「……………」

「確かに昔と比べればこの国は豊かになったわ。欲しいモノも手に入り易くなったし、交通も便利になったけど……代わりに心が廃れて行った。最近じゃ銃を携帯する物騒な連中だつて増えてきたし、テロリストが潜伏しているなんて噂も耳にするんだよ」

昔の方が良かった。喩え貧しく、餓えていても其処には当時のシオニーの様な希望に満ちた子供達も、また大勢いた。

確かに、今は昔と違いこの国は豊かになった。様々な国々と合流する事で物も増えたし、交通も便利になった。

だが、急激に変わったその一方で人々の心も変わっていった。今ではテロリストが潜伏しているという物騒な噂まででている。

「でも、それでも、シオニーちゃんはこの国を良くしようと、あの子なりに頑張った結果だから……」

だから、自分達は何も言わない。そう言って笑う店長の顔は、何だか泣いている様に見えた。

「こんな事、あんたに頼むのは筋違いだけど、お願いだよ。あの子を守ってやっておくれ」

「？」

「あの子は無理をしている。あたし達の為に骨身を削って………だから、近くにいるあんたにシオニーちゃんが壊れないよう、道を外さないよう、守ってあげて欲しいのよ」

どうか、どうか、手を握る力を少しだけ強める店長にブロリーは静かに頷き。

「ありがとう」

店長のその言葉は、ブロリーの中へ静かに溶けていった。



その後、意外にも早く合流した二人は本来の目的であるブロリーの服の買い物へ向かい、それも無事に終わり。現在はシオニーの自宅へ向かっていた。

海沿いの街道は夕焼色に染まり、夕日に照らされた海も暁に輝いて

いる。

だが、そんな明るい光景に対し、二人を包んでいる空気は重苦しかった。

会話が無いわけではない。しかし、あの商店街での定食屋の一軒以来、シオニーの様子はどことなく変だった。

「一応サイズは合ったけど、帰ったら確認しておきなさい」

「はい……」

それだけ言うと再び沈黙に包まれ、アスファルトを踏み締める音だけが響き渡る。

「……シオニー」

「……………」

「さっきの事なんだが……」

ブロリーからの一言にシオニーは肩を震わせる。

「あの人、心配……してた。シオニーの事」

あの人、それは十中八九あの定食屋の女将の事だろう。

彼女からシオニーの事を守って欲しいと頼まれたのはいいが、記憶のないブロリーは守るといふ言葉の意味すら分からなかった。

ただ、余りにも必死だった。必死に訴えてきたのだ。目の前で立ち止まる小さな女を。

今の自分には過去も記憶もなく、満足に言葉の意味すら理解出来ない。だが、それでも命の恩人であるシオニーには何らかの役に立ちたいとは思っている。

だから……。

「俺は、難しい事は分からない。何かが出来るとも思えない。けど、あまり無理は……」

「知った事言わないで!!」

「っー」

叫びにも似たシオニーの一言にブロリーは押し黙る。彼女が見せた明らかな拒絶の色、振り返りに見せた瞳は刃の様に鋭くなっている。ただどその奥にはやりきれない悲しみが滲んでいた。

「……………」

嫌な沈黙が二人を包み込む。波の流れる音が耳元に木霊する。

すると、シオニーの懐から着信が鳴り響き、電話に出ると二、三程相槌を繰り返し、それが終わると此方に向き直った。

「今、政府から緊急の仕事が入ったのでこれから私は其方に向かいます」

「あ、あの……………」

「帰りは遅くなるので、先に休んでいて下さい」

ブロリーの言葉にも耳を貸さず、その場を去っていく。その際、シオニーの顔は既にあの激情に歪めたものではなく。何時もの凜とした顔付きになっていた。

残されたブロリーは、暫くはそこで立ち尽くすが、日が完全に落ちると同時に、シオニーの自宅へと向かうのだった。



その後、シオニーの自宅へ戻ってきたブロリーは、特に何もする事はなく、買ってきた荷物を部屋の隅に置き、布団の上でボンヤリと天井を眺めていた。

外は既に暗く、街の灯りが夜空を照らしている。

ブロリーが考えていたのは、やはりシオニーの事だった。守って欲しいと言われても空っぽの自分ではどんなに頭を絞っても答えなど出ては来なかった。

「俺は……………一体」

何故、何の為に此処にいるのか？

ふと、頭の隅にそんな疑問が浮かび上がった……………その時だった。

ズドオオオオ……………ン。

「っ!？」

突如として聞こえてきた外からの轟音と、次いで響き渡る衝撃。何事かと思いい外に出ると、先程まで夜空を照らしていた街が、紅い炎に包まれ燃えていた。

「これは……一体……」

訳が分からず、呆然とすると、空から数多のミサイルが街に直撃。炎は更に燃え広がりその激しさを増していく。

「っ！ あそこには商店街が！」

我に返ったブローリーは昼間に行った商店街とそこに住む人々の事を思い出し、気が付けば街に向かって走り出していた。



「なんだ……これは？」

一面に染まるのは紅、赤、朱。燃え盛る炎は家屋を呑み込み、辺りには血と硝煙と焼けた人の臭いで充満している。

丸焦げとなった死体、瓦礫に押し潰された死体、庇う様に覆い被さった母と子の死体。

死体、死体、先程までの賑わっていた商店街が地獄と化した。

まるで人々の悪意が集約された場所、怨念に満ちた声さえ聞こえてきそうなのに。何故か落ち着いている自分がイル。

吐き気がする。反吐が出る。軽蔑する。差別する。憎悪する。

——なのに、今はそれが心地良い。

(俺は……これを知っている?)

不思議と感じた懐かしさ、この地獄に自分は嘗て其処にいたのか？ それとも、地獄そのものを生み出していた存在なのか？

視界映った一枚のガラスの破片。そこをのぞき込むと……。

「これが……俺？」

其処に映るのは口を三日月に歪めた自分だった。辺りは地獄に包

まれているのに、何故自分は嗤っている？

愉悦に浸り、快楽に身を染めるその姿はまるで――。

「う、うう……」

「っ！」

聞こえてきた呻き声が、思考の海に浸っているブロリーを引き上げる。

生きている人がいる。ブロリーは辺りを見渡し、かすかな声に耳を澄ませると……。

「あ、うう……」

「！」

見つけた。

声のする方へ走り、着いた先には――。

「あんたは……！」

ほんの数時間前に自分にシオニーを守って欲しいと頼んできた定食屋の女店長が、瓦礫の下敷きとなっていた。

「待ってろ！ 今助ける！」

すぐさま彼女の下へと駆け付け、瓦礫に手を添えると。

「ふんっ！」

自身の倍以上ある巨大な瓦礫の塊を何の苦もなく払いのけた。

一瞬、何故自分にこれほどの力があるのか躊躇するも、それ処ではないと頭を振り、ブロリーは女店長を助け起こした。

しかし。

「っ!?!」

彼女の体を見て、ブロリーは目を見開いた。頭から流れる血、左腕は痛々しく変形し、何より――下半身がなかった。

「ん、んう……」

「おい、しつかりしろ！ おい！」

「その……声、ブロリー……ちゃん？」

「待ってろ。すぐびよういんに連れ行くから！」

無理だ。

出血の量が多すぎるし、既に彼女は人体の七割以上がその機能を



失っている。

だが、それでもブロリーは助けたかった。  
彼女を抱え、病院に向けて走り出すブロリーだが。

「っ！」

瓦礫を押し潰しながら現れた鉄の巨人に行く手を遮られてしまう。

「なんだ……コイツ？」

突然現れた巨人、その名は「アクシオ」。とある財団が開発し、販売している機動兵器である。

『貴様、こんな所で何をしている？』

「喋っただと!？」

だが、記憶喪失であるブロリーにはそんな知識などなく、目の前の機動兵器は彼にとつて鉄の巨人が言葉を話している様に思えた。

『答えろ！　こんな所で何をしていた!』

「そうだ、コイツに構ってる場合じゃなかった」

こんな奴を構う暇など今はない。ブロリーは急いで元来た道を引き返すが……。

『逃がすか!』

「ぬぐっ!？」

アクシオから放たれたロケットランチャーがブロリーの前に着弾。爆風に煽られ、ブロリーは地面に叩きつけられてしまう。

痛みはない。常人ならば痛み悶えて身動きが出来ないだろう衝撃を、ブロリーは女店長を抱えたまま平然としていた。

「今の爆発は……」

被さってきた瓦礫を押し分け、爆発があった場所を見ると。地面は抉れ、定食屋があった場所は跡形もなく消し飛んでいた。

ブロリーは今の爆発に見覚えがあった。此処に来る途中に何度も目にしたモノと同じだったのだ。

(じゃあ、ここをこんなにしたのは……コイツなのか?)

ドクン。

「ブロリー……ちゃん」

「済まん。邪魔が入った。すぐ終わらせるからもう少しだけ持つてく

れ」

「シオニーちゃんの……事、お願い……ね」

「ああ、任せろ。よく分からないがなんとかする。だから……」

死ぬな。そう口にしよとした時、腕の中にいた女店長はニコリと微笑み。

「ありが……どう」

それだけ言い残すと、力無くうなだれた。

——ドクン。

「……おい？」

揺さぶる。目を瞑り、眠っている彼女を起こそうとブロリーは何度も彼女の体を揺さぶる。

だが、それでも彼女の目は開く事なく、ブロリーは彼女が死んだ事、そしてその意味を漸く理解した。

——ドクン。

『おい、そっちにはいたか？』

『いや、まだ見つかっていない』

『ん？ 何だソイツは？』

いつの間にか、ブロリーの周囲は多くの機械兵器に囲まれていた。アクシオと色違いのモノ、更には戦車型ジエノサイドロンと呼ばれる巨大な兵器。

様々な機械兵器がブロリーを囲み、逃げ場を無くしていた。

『あ！ 俺コイツ見たぞ！ 確かシオニーレジスと一緒にいた奴だ』

『何？ 本当か？』

『間違いない。俺も商店街で一緒にいるところを見た』

『よし、おい、そこのお前！ 我々と一緒に来て貰おうか？』

……どうして、あの女将は最期まで笑っていたのだろうか？

痛くはなかったのか？ 怖くはなかったのか？ 何故自分に、ありがどうなんて言ったのか？

分からない。分からない分からない分からない分からない





『』  
『』

「まずお前達から血祭りに上げてやる」  
その碧に輝く双眸で射抜くのだった。

怒れる悪魔よ、総てを破壊せよ。

生きているのなら、神をも殺せるその力で——。

### 第三話 契約

暗黒大陸。それは次元の壁に隔たれ、三大国家にも手出しされていない地球唯一の未開の大陸。

そこにあるのはなんて事ない荒野。何処までも続く荒れた荒野だけが広がっていた。

果てしなく続くかと思われた荒野の大地だったが、一つだけ人工的に造られたと思われる建造物があった。

巨大。それはあまりにも巨大な建造物だった。

遠近感が狂いそうな程の巨大な建物、雲よりも高く造られた場所にその男はいた。

玉座に跨がり、頬杖しながら何も無い空間をただ眺め続けている男。

男に身に纏っているのはただの布切れ一枚のみ。風貌はお世辞にも高貴な人間とは思えない出で立ちだ。

だが、そんな些細な事など補って余りある力が、男にはあった。屈強な肉体と強靱な精神を併せ持つこの男の名は「螺旋王」

暗黒大陸を統べ、頂点に位置している男。力の象徴、故に王。その身に宿すのは絶大な力、力は不変。或いは絶対。それは下手を

すれば三大国家に匹敵する力。  
そんな絶対的に不動とされてきた男は今……。

「っ!?!」

今まで感じた事のない《何か》に初めて狼狽していた。

「ぐっ!?! むう………」

「螺旋王!?!」

顔を抑え、うづくまる螺旋の王に一匹の……いや、一人のゴリラが駆け寄っていく。

他にもアルマジロや鳥の格好をした男、蠍の尾を生やした女が生まれて初めて目にする螺旋王の姿に驚愕し、目を見開かせていた。

「螺旋王!?! 如何なされましたか!?!」

「……騒ぐな」

「しかし螺旋王、お顔色が優れませんが……」

片手で顔を抑え、呼吸を荒くし、滝の如く汗を流し、顔面蒼白となっている王。

騒ぐなど言うが、初めて見せる王の様子にゴリラ男は安易に引き下がる事も出来なかった。

しかし。

「……二度も同じ事を言わせるなよ？」

「っ!？」

指の隙間から見せる螺旋渦巻く瞳の眼光と口から発せられる殺意に満ちた声。

明らかに激昂している王の姿にゴリラ男は震え上がり。言葉を失ったまま三人のいる場所へ引き下がっていく。

「貴様等も下がれ」

「「ハッ!」」

理由もなく、ただ下がれと告げる。その横暴な命令にも決して口は出さず、四人は言われるがままに玉座から姿を消した。

静まり返る玉座。螺旋王は流れる汗を拭い、保たれる様にして玉座の椅子に座り直した。

「次元の壁を超え、それでも感じた恐ろしく巨大で禍々しい力……そんな奴が存在するとはな」

感じた力の方角に視線を向ける螺旋王。だが、そんな馬鹿げた存在を前に、螺旋王は戦士の顔で不敵に笑い。

「これも、螺旋の運命か……」

次いで、自嘲気味に笑うのだった。



大地が震えた。大気が震えた。

空が、海が、世界が、恐怖に怯える様に震えた。

『なんだ……お前は？』

W L F。世界解放戦線と呼ばれる彼等は目の前の存在に問い掛けた。

黄金に輝く逆立った髪と碧色の瞳。全身に纏う金色の炎は灯りを失い暗闇に包まれる商店街を照らしている。

変身。

W L Fの面々は先程までの優男が何らかの拍子で根本から変わった事に本能的に気付く。

圧倒的。目の前にいる男に彼等は唯々圧倒され続けていた。

「……………」

『「!?」』

徐に掲げた手。たったそれだけの行動にテロリスト達は一斉にブローリーに向け銃口を突き付ける。

巨大な機動兵器とたった一人の……何の武装もしていない人間。戦力差は歴然。……いや、そもそも戦いという言葉すら当てはまらない状況。

——その筈なのに。

『……………はっ』

いつの間にか、隣にいたはずのアクシオ一機が、遙か後方で倒れ伏していた。

何が起こった？

アクシオは全長20m近くあり、その重量は80tを超える機体。機動兵器の中では比較的普通の重さだが、それでも人の手ではどうしようも出来ない代物。

ましてや“吹き飛ばした”等と、有り得る訳がない。

だが、火花を散らして爆散するアクシオわ目の当たりにして、彼等は一気に理解してしまう。

『う、うわああああっ!!』



恐怖に駆り立てられたWLFのメンバーは、次々と目の前の存在に向けて一斉砲撃を加える。

砲撃、ミサイル。人に対して撃つべき代物ではない兵器が弾幕となり、たった一人の男を殺す為だけに放たれる。

連鎖する爆発、爆風に煽られ吹き飛んでいく瓦礫。

地面は抉れ、黒い煙が辺りに充満した所で、漸くミサイルの雨は止んだ。

間違いなく死んでいる。それも跡形もなく。

コックピット内でそれを確信したテロリストは、緊迫した空気から解放され、ニヤリと口を歪める。

そう、生きている筈がないのだ。

生きている筈が……。

そう自分に言い聞かせ、モニターの映像を凝視すると、

「何なんだあ……今のはあ？」

煙の中から現れる無傷のブロリーに、テロリスト達は恐怖で目を見開かせる。

バカな。有り得ない。整備不良か？ 照準が合っていないのか？

頭に浮かぶのは全て目の前の現実から逃避する為の思考の渦。

だが、どんなに否定的な言葉を並べても、目の前の怪物は消えなかった。

『あ、あああああっ!!?』

再び向けられる銃口。今度は通信で仲間を呼び寄せてより強力な火力で撃とうとしたその時。

『へ?』

既に目の前には金色に輝くブロリーが迫り。

「死ね」

たったそれだけを告げると、ブロリーはアクシオの胴体に拳を突き刺し。

「デヤアッー」

腕を引き離すと、内側から激しい火花が散り、アクシオは内部爆発により跡形もなく消し飛んだ。

『あ、ああ……………』

理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない理解出来ない!!

人間は理解出来ない場面に陥った時、およそ二通りの行動をする。一つは得体の知れない存在の排除、そして得体の知れない存在からの逃走。そして、この時彼等が取る行動は一つ。

『う、うわあああつ!!』

『化け物だあああつ!!』

ブロリーという未知の存在から逃げ出す為、彼等は逃走を図る。

無論ブロリーも奴らを逃がすつもりは毛頭なく、足に力を込めて追撃を図ろうとするが。

『この、化け物があつ!!』

頭上から押し寄せてきた巨大な機動兵器、戦車型ジェノサイドロンに踏み潰されてしまう。

『や、やってやった!・ざまあみやがれ!』

ジェノサイドロンはアクシオとは全く別の会社が作り上げた兵器で、その大きさや重さ、共にアクシオの比ではなく、踏み潰されたら最期、潰れたプチトマトの出来上がりである。

『お、おおつ!!』

……もう一度説明しよう。この戦車型ジェノサイドロンはアクシオやモビルスーツに比べ非常に大きく、より重さも増しているのだ。間違っても、片手で持ち上がれる代物ではない。

しかしブロリーはおよそ100tはゆうに超える鉄の塊を、あろう事か頭上に投げ飛ばし。

「これ以上、ここを荒らすな」

左手の掌に碧色の光を収束させ、次の瞬間にはジェノサイドロンを呑み込む程の巨大な閃光を放ち、彼方へと消し飛ばすのだった。

リモネシアという小さな島国から、巨大な閃光が空に向かって放たれる。

その事実は後ほどシオニーをあらゆる意味で苦しませる要因とな

るのは……今は伏せておく。

一通り片付け、再び戻ってきた静寂。

未だ光を纏い続けているブロリーは今までの自分の行動を思い出  
し、自身の両手に視線を落とす。

(これが……俺の力、なのか?)

体の奥底から感じる溢れ出る奔流。それが自分の力だとブロリー  
はまだ自覚していない。

女店長が殺され、それを当然としている奴らに無性に腹が立ち、湧  
き出てきたモノを吐き出した途端、自分の姿は変わっていた。

「ああそうか、これが……『怒り』なのか」

あの時感じたモノ、それは何一つ混じっていない純粹な怒りだった  
のだ。

欠けていたパズルのピースが一つ嵌まった様な気がした。……ひ  
とまず、この場はどうしようか?

ブロリーは自分なりの解決方法を頭の中で模索し、検討している  
と。

「ん?」

バタバタと音を立てて近付いてくるヘリの大群と、埃を巻き上げな  
がら近付いてくる機動兵器の群れ。

恐らくは、逃げ出した奴が仲間を呼び寄せたのだろう。

やれやれと思いつつも、ブロリーは全身に力を込め、金色の炎を燃  
え上がらせる。

すると、視界の端に横たわる女店長の亡骸が入ってきた。

死んでいる。なのに安心してしまった顔で笑っている彼女の死に顔に  
ブロリーは見つめ……。

「……俺は、まだ『守る』というのがどういう意味なのかは分からな  
い」

一体、『守る』というのはどういう意味なのか? どんなに考えて  
も答えは出ない。

だから、探してみることにした。守るという意味を、守るという意  
志を。

「だから、まずはこの場所を守ろうと思う」

「ここは自分が記憶を無くして初めて訪れた場所であり、思い出の場所。」

既に商店街は壊滅、守る事など最早叶わないが……。

「でないと、きつとシオニーも守れないと思うから」

それでも、ブローリーは守ると誓い。迫り来るテロリスト達の群へと掛けていくのだった。



「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ！」

鼓動が激しく脈打ち、額から大粒の汗が幾つも流れ、アスファルトの地面を濡らしていく。

暗い闇の中、シオニーは走り続けていた。

数時間前までユニオンの重役との会談の準備をしていたが、W L Fの襲撃という突然の報せにシオニーは会談のある会場から飛び出し、襲撃されたとされる商店街に向けて駆け出していた。

会談は当然中止。先方への謝罪もせず、シオニーはひたすら走り続けていた。……当然だ。あそこの商店街は昔、学生時代だった頃の彼女が学校帰りによく立ち寄っていた思い出の場所であり、原点。

外務大臣になり国を動かしている立場となっても、それだけは変わらない。

そして、今その場所がテロリスト達に蹂躪されているのだ。

本来なら、襲われる事は無いというのに”

我を忘れ、車やSPも使わず。自分の足で商店街に向かう最中疲弊した足がもつれ、何度も転び、その度に生傷が増えていく。

服は破れ、ヒールの踵はへし折れ、裸足になりながらも尚、彼女は走り続け、気が付けば夜明けとなっていた。

——そして。

「嘘……でしょ」

満身創痍の彼女に待っていたのは、瓦礫の山となった変わり果てた商店街の姿だった。

焼け落ちた家屋、水道管は破裂し、至る所から水が噴き出している。凄惨な光景にシオニーは力が抜け、愕然とした面持ちでその場にうずくまってしまう。

……壊れてしまった。自分が守りたかったモノが。

「どうして……こんな事が」

悔しさと怒りでどうにかなくなってしまいそうだ。

怒りに身を任せ、地面を殴ろうと拳を振り上げた時。

「シオニー？」

ふと、声が聞こえた。

つい最近まで聞き慣れた声のする方へと視線を向けると、記憶喪失の男、ブロリーが其処にいた。

黒髪で黒目、自分の知る男の変わりない姿にシオニーはどこか安堵した。

立ち上がろうとすると、今までの疲労が一気に襲い掛かり、シオニーは前のめりに倒れてしまう。

しかし、寸での所でブロリーの太い腕に支えられ、冷たい地面に倒れる事はなかった。

「あ、ありがとう」

「……………」

シオニーの体のあちこちに刻まれた幾つもの生傷。痛々しく、且つ細い体の彼女をブロリーは優しく抱き抱える。

「ちよっ!?! いきなり何を!?」

お姫様抱っこの体勢となってしまった自分の体。早く下ろせと訴える彼女だが、予想以上に疲弊している自分には丸太の様に太いブロリーの腕から逃れる術はなく、シオニーは大人しくされるがままに連

れて行かれる。

「……ねえ、皆は？」

「……………」

顔を伏せ、何も答えないブロリーにシオニーは悟ってしまう。

嗚呼、やつぱりと。

結局、どんなに権力を得ようと守れない自分に、シオニーはブロリーの腕の中で静かに涙を流し。

「ごめん……なさい」

その言葉は、誰から誰に対して言ったモノなのだろうか。



「い、はは？」

ブロリーに連れてこられて来たのは開けた場所だった。

辺りは瓦礫に囲まれているのに、不思議と目の前の場所には何もなく、広場の様になっている。

一体何なのだろうと、自分を近くの瓦礫に座らせ、一人広場に向かうブロリーに問いかけると。

「……………おはか、まだ途中」

言われて気付く。広場と思われ た地面が至る所に僅かに盛り上がっており、それぞれ石が積まれており、その側には一輪の花が添えられている。

何処にでも生えていそうな名もない花、体の大きなブロリーには似合わず、思わず笑ってしまいそうになる。

だけど。

(ありがとう)

一人せつせと泥だらけになりながらも墓の形を整えたり、花を添え

たりしているブロリーに、シオニーは心の内で呟いた。

……そう言えば、何でブロリーは無事なのだろうか？ 今更過ぎる疑問に首を傾げると……。

「っ!？」

視界に入ってきた物体に、シオニーは目を見開かせて驚愕を顕わにした。

壁かと思われた瓦礫が、実はヘリオンと言うAEUが開発したモビルスーツだった。

グシヤリと歪に変形し、俄にはそうは見えないが、残ったヘリオンの独特のフォルムが間違い無いと彼女に告げている。

それだけではない。目を凝らして良く見ると、其処には様々な機動兵器の成れの果てがあった。

ファイヤーパロット、アクシオ、戦車型ジェノサイドロンに地上空母型のジェノサイドロンまで。

テロリストが使用しているほぼ全ての機動兵器が、無惨な残骸となつて壁となつて積み上げられている。

一体……誰が。そう思うと同時にシオニーはハツとなり、目の前のブロリーに視線を向ける。

時空振動の際、記憶と共に全てを失つた男、ブロリー。  
有り得ないと思う。馬鹿げていると思う。

……だが、そう思わずにはいられない。

警察組織はあつても、三大国家の様な大規模な軍隊を所有していないリモネシアでは、WLFという国際テロ組織に対抗できない。

だから、と、そう考えるのはあまりにも不自然だろうか？

「ブロリー、貴方は……一体」

何者だと問い掛けようとするシオニーだが、いつの間にか立ち上がつて此方に振り返つていたブロリーの姿に息を呑み、言葉が続かなかった。

黒い瞳と髪、それは日本という国に於いて代表的な色なのだが、シオニーには全く別物に見えていた。

全てを呑み込む漆黒の色。闇色に染まり、奈落の底とも思える魔性

を秘めた色彩。

「シオニー……俺は」

朝日が昇り、太陽を背にするブロリーはより黒く染まっていく。それはまるで……。

「お前を、守る」

—— 悪魔の様に。

世界は廻る。

クルクル、クルクル。

今ここに、契約は成された。



## 第四話 世界を動かす者達の衝撃

世界的規模を誇るテロ組織、W L Fの襲撃から数日が経過。復興作業は順調に進み、同時に瓦礫の山となっていた商店街も少しずつその姿を消していた。

リモネシア政府は領地の国民、また世界に対してW L Fは現地の警察組織が対応、事態は終息に向かっていると発表。

……否、正確にはそうせざるをえないと言った方が正しいだろう。そもそも、一体誰が信じるのだろうか。時空振動で現れた記憶喪失の男が機動兵器を所有するテロリストに単身一人で、しかも生身で挑み、打ち勝った等と……。

公表したものは大分違うし、近い内に三大国家の何れから指摘を受けるのは間違いないだろう。

リモネシア政府……もとい、外務大臣であるシオニー・レジスは今日も今日とで頭を悩ませていた。

そして、その頭を悩ませている大半の原因となっている人物はとうとう……。

「ほら、動かないの。ネクタイ結べないでしょ」「うー?」

全身を黒のスーツで包み、ネクタイを結んで貰っていた。

テロリスト達がリモネシアを襲って数日が経過し今日、シオニーとブローリーの関係もごく僅かだが変化を見せ始めていた。

復興作業に予算を注ぎ込んでいる為、S Pを雇える余裕はなく、シオニーは不本意ながらブローリーを自分の専属の護衛に登用する事にし、経費削減を目論んだ。

……正直に言うと。それは剩りにも無茶が過ぎた。

護衛という言葉の意味を理解出来ないブローリーは取り敢えず四六時中付いて行けばいいのかと結論付け、そのまま実行に移すのだ。

食事にも、外交にも、会談にも、トイレや入浴中にも。

特に後半辺りはその都度シオニーは叫び、その度にブロリーは空を舞った。最初こそはブロリーの登用に激しく後悔するが、最近ではそんなに怒鳴る事はなくなってきた。

シオニーがいる部屋には必ずノックをしてから入り、自分と歩く時は三步後ろに立って付いて来てくれる。

これも自分の驕のお陰だとシオニーは自負するが、問題はまだあった。

それは肝心な護衛に関しての事。

最初に言っておくが、それは別にブロリーが全く弱く、使い物にならないという意味ではない。問題は寧ろその逆。

強すぎるのだ。このブロリーという男はほんの少し力を込めた程度で物を壊し、この間も絡んできたチンピラ相手にデコピンで対応したら数百メートル程吹き飛び、国民の一人を病院送りにした。

どうもあのテロ襲撃から力が溢れて止まらないらしい。

シオニーもこれは不味いと思い、ブロリーに力の出し方を見誤るなと言いつけるが、本人自身もよく分かっておらず、四苦八苦している様子。

今のこの時期、下手に目立てばそれだけで大国の連中に目を付けられるからだ。

「いい？ 今日ここに来る人は国連の大使だから、あまり変な事言わないでね？」

「こくれん？」

「前に教えたでしよう？ 国際連合組織。国際的な意志決定機関として機能している所よ」

「??？」

「つまり偉い人が来るから失礼のないようにつて意味よ」

「成る程」

そして、最近ではシオニーはブロリーにこの世界の情勢に付いて教えてはいるが、如何せんあまり物覚えは良くはなく、ブロリーは自身の力と同様の難題に悪戦苦闘していた。

だがそれでも、ブロリーはシオニーに言われた事は直ぐに貰ったメ

メモ帳に書き写し、過ちを繰り返さないよう気を付けている。

書かれている文字もお世辞にも上手いとは言えず、メモ帳は本人にしか分からないミミズが這った様な有り様。

それでも、シオニーがブロリーを解雇しないのは彼のその直向きさが気に入っているのだからだろう。

悪意もなく、ただシオニーの為に尽くそうとするブロリーに……。

『お前を……守る』

あんな事を言われたのは初めてだった。

リモネシアを、祖国を守ろうと決意した時から全てが敵だと思っていた彼女には、真っ直ぐに自分を見つめてくれたブロリーの一言は駆け引きなしに信じられると思えた。

多分、嬉しかったのだ。

あのボンボンや《彼》でもそんな言葉は言わなかったから……。

尤も、あのボンボンからそんな事を言われたら鼻で笑ってしまうが。

「……フフ」

「シオニー？」

そんな単純な自分に笑っていると、どうやら聞かれていたらしく、キョトンとしているブロリーがどうしたのかと尋ねてきた。

「な、何でもないわ！ ほら、行くわよ！」

「……はい」

少し態度の切り替えが無茶過ぎたか、ブロリーは頬を掻きながら首を傾げるも直ぐに此方に付いて来てくれる。

本当は色々言わないと気が済まないが……今は止めておく。

何故なら、今振り返ればまたこいつに変な心配をさせてしまうから。

会談時間までに頬の熱が冷めることを切に願いながら……。



「初めまして、国連大使館から派遣されましたアレハンドロ・コナーです」

「リモネシア外交政務大臣、シオニー・レジスです。この度は我が祖国の為にお越しいただき、誠にありがとうございます。本来ならお迎えに向かいたかったのですが……何分事情が事情ですので」

「お気になさらないで下さい。我々国連は世界の意志決定機関であると同時に所属している諸国への救済機能も備えていますから、我々にしては当然の事をしているまでです。後半についても同様、寧ろここまで会場を整えてくれた事に申し訳ないとすら思えますよ」

会談時間となり、会談の場所となる部屋で待ち構えていると、二人の男性が入室してきた。

一人は赤茶けた髪で整った顔付きの男性、アレハンドロ・コナー。その髪色にも合ったスーツを見事に着こなしている彼は柔らかい物腰でシオニーとの軽い挨拶を済ませると、今度はブローリーの方へ視線を投げ掛けてきた。

「レジス大臣、失礼だが彼は？」

「あ、はい。彼はブローリーといって訳あって今は私専属の護衛になっています」

「ブローリー……です」

「ふむ、そうですか」

一瞬、品定めするような目でブローリーを見るが、次の瞬間には笑みを浮かべ、アレハンドロは後ろに控える人物の紹介を始めた。

「なら、私も紹介するとしましょう。彼はリボンズ・アルマーク、そのブローリー君が貴方の護衛である様に、彼もまた私の従者を勤めている」

「初めまして、リボンズ・アルマークと申します。アレハンドロ様が仰られた通りですので省略させて頂きます」

「おいおいリボンズ、その言い方だとまるで私がレジス大臣に対抗しているみたいじゃないか」

「失礼しました。アレハンドロ様」

主人と従者、というより年の離れた兄弟の様な二人の遣り取りに一瞬呆けてしまうシオニーだが、咳払いをする事で場の空気を引き締めさせる。

「では、どうぞ此方に……」

「失礼する」

シオニーに促され、席へと座るアレハンドロ。ブロリーもシオニーの護衛の為に彼女の座る席の後ろへと立つ。

その際、感じる視線の先へと向くと、アレハンドロが紹介した従者、リボンズⅡアルマークが不敵な笑みを浮かべて此方に視線を向けていた。

挑発とも思える笑みを浮かべるリボンズに対してブロリーは……。

(何だか、キャベツみたいな頭だなあ)

……割と失礼な事を考えていた。

そして、会談は順調に進み話し合いは無事リモネシアへの支援援助という形で纏まりつつあった。

リモネシア共和国は国連に所属している小さな国の一つ。三大国家の何れかに介入される前に、国連から支援を受ける事でリモネシアという国を守るというのが、シオニーの今回の目論み。

ただ、今回の一件でリモネシアは国連の中での発言力は一つ失われる事になるが、そればかりは致し方なかった。

大国に好き勝手にこの国を蹂躪されるよりは万倍もマシだからだ。

「……では、国連からの支援援助は準備期間を踏まえて来月から、と言う事で宜しいですか？」

「はい。では宜しくお願い致します」

漸く会談が終わったのか、席を立ち互いに握手を交わす二人。ブロリーもこの窮屈な服から解放されると内心安堵するが。

「レジス大臣、少しお願いがあるのだが、宜しいだろうか？」

「お願い……ですか？」

アレハンドロ大使からの頼み。一体どんな無茶ぶりかとシオニーは内心で身構えていると。

「テロリストが襲ったとされる街へ言ってみたいのですが、案内を頼んでも宜しいか？」



「一体、どうしてこんな事に……」

無事、会談が終わって数十分後。話し合いも進んだ事で国連から支援援助を受ける事になり、シオニーは祖国を守れた事に満足していると、国連の大使であるアレハンドロ・コーナーから意外な頼み込みが舞い込んできた。

それはテロリストが襲ったとされる街への直接視察。

勿論、シオニーはそれを丁重に断った。漸く支援援助にまで漕ぎ着けたというのにそんな大使に万が一の事態に遭遇させたら、国連からの支援の話処ではなくなる。

いや、下手をすれば国連からの除籍すらも有り得てしまう。そうなれば、満足に後ろ盾もない小さな共和国など瞬く間に三大国家のいずれかに吸収されてしまうだろう。

まだテロリストの存在は満足に確認すらとれていないのに……。

何度も説明をして視察を諦めて貰おうと躍起になるシオニーだが、これも為政者の勤めだと押し切られてしまい、視察を許してしまう。

(どうか、なにも起きませんように!!)

瓦礫となった商店街を見て回るアレハンドロ大使に対し、地元警察

に警備網を敷かせながら、シオニーは何も起こらない事を切に願うのだった。

そんな頭を抱えて悩んでいる彼女を、ブロリーは遠巻きに眺めている。

ブロリーは先程もアレハンドロとシオニーの話には全くついて行けず、呆然と眺めているだけだった。

今も頭を抱え、悩んでいる彼女にブロリーは何も言えず、ただ見つめる事しか出来なかった。

シオニーは頭が良い、少なくとも自分よりよっぽと。

出来の悪い頭では幾ら頭を絞った所で満足な答えなど出る筈もない……が。

(いざとなったら俺が盾になればいい)

皮肉にもあのテロ襲撃の際に自分の頑強さは証明されている。大変な事態になれば自分が盾の代わりにシオニーを守る自信はあった。

ただ力を奮うしかないブロリーはシオニーの事を遠巻きにみつめていると。

「少し、いいかな?」

「?」

いつの間にかアレハンドロの隣にいた従者が自分の隣で並ぶように歩き、会談で見せた不敵な笑みを浮かべている。

「お前は……キャベツ倫太郎」

「誰だい!? ……僕の名前はリボンズⅡアルマーク。先程アレハンドロ様より紹介があったと思うけど……聞いてなかったのかな?」

「はい、聞いてませんでした」

「……………」

あんどりと口を開き、目の前の男に呆れ果てるリボンズ。全く掴めない目の前の男に主であるアレハンドロにも見せた事のない表情を晒している。

「ぶ、くく……面白い人だね君は。でも人の名前は覚えないと失礼だからキチンと覚えて方がいいよ」

「そうですかあ」

言われてブロリーはリボンズに言われた助言を覚える為、持参していたメモ帳にスラスラと書き写していく。

「書きました」

「そ、そうかい」

どうもこの男は色々遣りにくい。すっかりブロリーのペースに嵌まったりリボンズは話を変える為に咳払いをする。

「……所で、君に一つ聞きたい事があるんだけど、聞いていいかな?」  
「?」

「以前、この国では小規模な時空振動があつと報告されていてね。ちよつと気になっていたんだ」

「……………」

「リモネシア政府は何もなかったと公表されてるけど、果たしてそれは本当なのかな?」

「……………」

リボンズの口調は柔らかいが、問い詰める様な鋭さがあつた。

まるで此方の考えなど全てお見通しで、敢えてその上で聞いてくる尋問紛いの問い掛け。

「その後WLFからテロ攻撃を受けて、その時は警察が沈静化させたと聞いたけど正直信じられないよ。リモネシアは小さな国、警察組織を有しても機動兵器を所有する彼等に対抗出来る術はない」

「……………」

「そして何より気になったのが当時、テロが起こったその場所に君がいたと、非公式だけどデータに記されてあつた。……これは偶然なのかな?」

紫色の掛かった瞳からは氷の如き冷たさを持っていて見る者全ての心をへし折る歪んだ強さが潜んでいる。

しかし、そんな彼の問いにもブロリーは一切動揺せず。(と言うか話の半分程も理解していない)

その黒に染まった瞳で見下ろす様にリボンズを見つめる。

「……………」



闇色、全てを呑み込んでしまいそうな黒の瞳にリボンズはゾクリと得体の知れない悪寒に襲われる。

リボンズはそんなブロリーの態度に「余計な事を喋るな」という、脅しにも感じた。

ブロリーの無言の重圧。並の人間なら尻餅を付いて逃げるだろう、そんな圧力を宿したブロリーを前に引かないで相対しているリボンズは、正しく「人間を超越した存在」なのかもしれない。

暫く続いた視線の交差はブロリーの方から視線を外した事により終わりを迎える。

「……………分からない」

「何？」

「俺は気が付いたら此処にいた。ここで戦ってた。……………それだけだ」

それだけ告げると、ブロリーは歩く早さを速めて復興作業現場の視察に勤んでいる二人に歩み寄る。

その背中をリボンズの眼光が射抜いているとも知らずに。



「……………なるほど、おおよその事態は把握しました。人材派遣や支援物資の搬入期間を考えるに、やはり1ヶ月後が妥当でしょう」

「……………分かりました。では、1ヶ月後にまた」

「ええ、その時にでもまたお会い致しましょう」

漸く無事に視察も終わり、シオニーは思わず安堵の溜め息が零れそうになる。

気が付けば既に日は沈み掛けており、夕暮れの光が辺りを朱色に染め上げていた。

リボンズもあれからブロリーに何かと問い詰める事はせず、終始主

であるアレハンドロの後ろで佇んでいた。

が、それでもどこか思う所があるのか、時たまブロリーを見詰めるリボンスの目が、刃の如く鋭くなっていた。

しかし、ブロリーはそんなリボンスの視線に全く気付いた様子はなく、リボンス同様シオニーの後ろで待機していた。

「では、レジス大臣。また1ヶ月後に……」

「はい。では空港までお送りします」

「アレハンドロ様」

「何だリボンス。こんな時に」

別れの挨拶も済ませ、空港に向かおうとしたその時。従者のリボンスIIアルマークが二人の間に割って入ってきた。

これには流石のアレハンドロも看過できず、リボンスに強めの口調で接するが、耳元で話を聞く内に彼の態度はみるみる変わっていく。

そして、アレハンドロの視線が後ろのブロリーに視線を移した時、シオニーはいち早く感づいた。

「そう言えばブロリー君。君はテロがあつた当日この場所に来ていたそうだが……？」

「っー」

やはりそうだ。この男、国連の大使として此処に来たと言っていたがそれは口実でしかなかった。

彼の目的はこのリモネシアへの調査。時空振動による報告を提出していた時から既に疑問は持たれていたのだ。

もしブロリーが時空振動で現れた漂流者だとバレれば、報告の欺瞞容疑として本格的な調査、即ち大国からの介入が待っている。

そうなれば最悪の場合、“あの計画”までバレてしまう危険性が極めてたかくなる。

「え、えつとですね。彼はここに来てまだ日が浅く……」

ブロリーが下手な事を言い出す前に何とか話を終わらせようと奮闘したその時。

——リイイイイイン。

「「ツ!?!」」

「なんだあ?」

耳鳴りの様な音が辺りに響き渡り、瓦礫の大地と四人の鼓膜を震わせる。

音は意外と直ぐに止み、比例して辺りは静かになる。

風も、海も、時が止まったかの様に……。

「一体、何が……」

抑えていた耳から手を外して辺りを見渡すと、それはあった。

空にある黒く淀んだ歪み、その歪みが硝子の様に砕けると無数の怪物が姿を現した。

「あ、あれはっ!」

「次元獣!?!」

空から現れる異質な獣の群に、シオニー達は驚愕し、戦慄する。

《次元獣》 それはその呼び名の通り、次元を超えて現れる未知の生命体。

その目的、行動原理、一切が不明で何も解明されておらず。また時間が経過すれば消えてしまう事から人々は次元獣を最悪な災害として捉えている。

そして、その災害が十数以上の群を成してリモネシアの大地を踏み締める。

一体どうして……。シオニーは突如現れた形ある災害に身を震わせていると自然とある答えが導き出される。

それは数日前に起こった時空振動。即ちブロリーがこのリモネシアに現れた時。

まさか、ブロリーは次元獣と何か関係があるのか……。

(何よ。何だって言うのよ!?! 私が一体何をしたっていうの!?!)

また、この国が蹂躪されるのか? 度重なる不幸にシオニーは心が折れ掛けていた。

そこへ。

「レジス大臣、早く逃げろ!」

「……………え？」

気が付けば、目の前には巨大な壁がシオニーの目前にまで迫っていた。

それは蹂躪の体。その大きさをシオニーに向けて体当たりを仕掛けてきたのだ。

(あ、私……死んだ)

目の前の死を目前にシオニーはあっさりとそれを受け入れていた。全てを諦め、死を受け入れた彼女には最早何も見えず、何も聞こえなかった。

だから、だろうか。一向に衝撃は来ないし痛みも感じない。

もしかしたらもう自分は死んでいて、ここは既にあの世なのかと。

だとすれば、死というのは案外簡単なのだなど、シオニーはゆつくりと目を開けると。

「……………え？」

恐らく今の自分の顔は、きつと嘗てない間抜けた顔を晒している事だろう。

何故なら、自分を踏み潰そうとした災害(次元獣)はジタバタと無様にもがき。

「シオニー……無事か？」

記憶を失った男ブローリーが、金髪碧目へと姿を変えて次元獣を抑えていたのだ。

……というか、ちょっと待つて欲しい。次元獣の体の大きさは20mを超える巨大な体躯を持ち、その重さは現時点で分かっている中で一番小さい『ダモン級』ですら300tを超えている。

マトモにぶつかればMS(モビルスーツの略称)だって簡単に潰される。なのに目の前のブローリーはそんな次元獣の突進を片手のみで防いでおり、尚且つシオニーの無事を確かめている。

一体、何なんだコイツは？ それはこの場にいる全員が持つ当然の疑問だった。

しかも、なんか姿が変わってるし。

「シオニー……」

「は、はい!？」

何時もの情けない垂れ目とは違い、鋭くなった碧の瞳がシオニーへと突き刺す。

変わりすぎたブロリーにシオニーは思わず声を裏返すが、それに気に留めずブロリーは続ける。

「よく分からないが、コイツ等……潰していいのか?」

「っ!？」

今、この男は何と言った?

潰す? あの三大国家や国連、世界が手を焼いている次元獣を?

災害とは、文字通り害する災い。自然がその猛威を奮う事を意味する。

自然そのものと認定された化物を、コイツは潰すと言った。

有り得ない。しかし、同時にシオニーは先日のブロリーの姿を思い出す。

商店街の皆のお墓を造り、意味も分からず手を合わせ、誰かに構わず祈りを捧げ。

『お前を……守る』

ドクン。

気が付けば、自分の鼓動が速くなっていた事に今更気付く。

待っている。目の前にいるこの男は私の指示を待っている。

シオニーは鼓動を抑える事に必死で言葉が出なかった。

故に、ただ静かに頷く。

ブロリーはその仕草を了承と受け取り。

「了解した」

速やかに、行動を開始した。

手を軽く引き、押し出す。ただそれだけの動作なのに、抑えられていた次元獣はゴムボールの様に吹き飛び。

後ろにいる他の次元獣達の群にぶつかり、ボーリングのピンの如く

弾け飛ぶ。その光景に再び言葉を失う。

ギロリ、と、一齐に此方へと振り返る災害達にシオニーは悲鳴を上げそうになる。

だが、それは寸での所で止まった。何故なら目の前に巨大な壁があるからだ。

それは先程の様な次元獣ではなく、たった一人の男。苦しかったネクタイとスーツを脱ぎ捨て、露わになったシャツ越に見える背中は何よりも巨大で頑強で、逞しかった。

「下がってろ」

口調も普段より力強く、シオニーはその言葉に従いアレハンドロやリボンスのいる離れた場所へと避難していく。

それを確認すると、ブロリーは全身に力を込め、金色の炎をその身に宿らせる。

目前には次元獣の群れ、その数はおよそ15匹。煙を上げて此方に向かつて突き進んでくる。

普通ならここで逃げ出すのだろうが、ブロリーはそうしようとは思わない。

する必要がないのだ。

溢れ出る力は留まる事を知らず、これでも抑えている方なのだ。

言ってしまうえば、負ける気がしない、だ。

押し寄せる災害の群れにブロリーは更に力を込め、地面を抉り出す。

瞬間、ブロリーの姿は忽然と消え、気が付けば次元獣の群れは瞬間に吹き飛んで往くのだった。



「リボンス、私は……夢でも見ているのか？」

アレハンドロの眩きは、従者であり秘書であるリボンズの耳には届かず、虚しく空へと消えていった。

答えられないのも無理はない。ここにいる誰もが信じられない光景を現在進行形で目にしているのだから。

空へと力チ上げた次元獣達を直接殴り付け、他の次元獣の放った尾での一撃を難なく受け止めると、今度はそれを掴み取って振り回すのだ。

災害、或いは災厄の類である次元獣を一方的に蹂躪していく。

それが、最新技術で造られた機動兵器ではなく、たった一人の人間がだ。

いや、あれは本当に人間なのか？

空を飛び、自分よりも遥かに巨大な軀の次元獣を玩具の如く振り回し、破壊していくその光景に。

やがて、最後の一匹もブロリーの放った碧色の閃光に呑み込まれ消滅していく。

(あれ？ あの光、報告にあつた奴と一緒にじゃね？)

そんな理解を超えた光景を前に、アレハンドロの思考がおかしくなるのも仕方のない事である。

空中に佇みながら振り返るブロリーに、リボンズは幻視する。

その昔、気紛れで助けた一人のゲリラ兵の少年の瞳を。

今の自分は、きっとあの時の少年と同じ目をしているに違いない。対するシオニーもまた確信する。

この男の力は間違はなく世界と渡り合える力であると。

同時に恐怖する。自分は、とんでもない存在を見つけてしまったのではないかと。

後悔、懺悔、時既に遅し。

世界よ、刮目せよ。

## 第五話 エリアー1

「……………はあ」

航空機内。シオニーレジスは先日の次元獣襲来の日を思い出し、心底疲れ果てた様子で溜め息を吐いていた。

既にあの次元獣襲来から二日程経過し、リモネシアは被害らしい被害も受けず、今日もその姿を健在している。

全ては、記憶喪失者であるブロリーが次元獣を撃破したお陰……と  
言うが、その所為で新たな問題が浮上してきたとも言える。

唯でさえ時空振動で現れたというだけでも厄介だと言うのに、その上トンでもない力を持っているという規格外の存在。

金髪碧眼で、金色の炎を纏って、空を飛んだり、次元獣を投げ飛ばしたり、ビーム出したり、殲滅したり。

もう、お腹一杯で胸焼けを起こしそうです。

本来なら彼女は“世界を変えられる力”を手に入れたと歓喜するのだが、そんな気はとも起きなかった。

強すぎる。ブロリーの持つ力は自分の予想の遥か上を行っていた。シオニーはブロリーの強過ぎる力をとて御しきれぬ自信がなかったのだ。

……憶測だが、もしかしたらこの男は本当に三大国家と……世界と渡り合える力を持っているのではないだろうか？

確証はない。だが、何となくだが確信はあった。

世界と、たった一人で渡り合える存在。

何を馬鹿など、聞いた人は間違いなく鼻で笑う事だろう。

だが、実際そんな人間が存在していたら？

……間違いなく、世界のバランスは崩れるだろう。それも我が祖国、リモネシアを中心に。

リモネシアはマトモな軍隊組織などありはしない。警察組織がお情け程度である位の小さな国でしかないのだ。



そんな国が戦渦に巻き込まれでもしたら、確実にリモネシアは滅ぶ。

どんなにブロリーが強大な力を持っていようとも、国を守るだけの器用さは持ち合わせていない。

(まったく、問題が多過ぎよ！)

そんな最悪の事態を避けるべく、シオニーは帰国しようとした国連大使とその従者に、この件は内密にしておいて欲しいと言い含めた。

……その際、虚ろな顔で頷いていたアレハンドロ大使には少しばかりの同情心が芽生えたのはここだけの話。

無論、その際には彼等の求める要求にも答える必要があるのだが。未だにその要求の声は届いていない。

下される要求に内心で冷や汗を流しながら平静を装い、シオニーはその元凶たる人物へと視線を移すと。

「おお、高い……です」

相変わらずの無表情。しかしいつもよりはしゃいでいる様子のブロリーにシオニーは更に疲れを募らせるのだった。

そう、今二人はとある国に向かう為に飛行機の中にいるのだ。

……というか、本当にコイツはあの時次元獣を撃退した奴と同一人物なのだろうか？

髪は金髪に逆立っていないし、瞳だって黒いままで特に変わった様子はない。

何より、あの時感じた……近付いただけで蒸発してしまいそうな覇気が全くと断言していいほど感じられない。

本人曰く、あの時の力は使うには使えるが、使えば結構疲れるらしくその後多くのエネルギーを必要とするらしい。

エネルギー、即ち食料。力を使える代わりに求められる代償……とでも言えば聞こえは良いだろうが、実際は堪ったモノじゃない。

力と同様にブロリーの持つ胃袋や食欲は天井知らず。最低でも店一軒全ての料理を食べ尽くさないといけないらしい。

正直、自分の財布程度ではとても賄えず、かと言って国からその費用を出すわけにもいかない。



？」

「そう言うや否や、ブロリーは窓に向けて拳を振り上げようとするが。」

「止めなさい！ このおバカ！ そして私の話を聞きなさい！」  
何処からともなく取り出したハリセンで、ブロリーの頭を殴りつける。

機内に響いた音は、それはそれは良い音だったとか。



ブリタニア・ユニオン。それは神聖国ブリタニア帝国と連合国家ユニオンが大時空振動により北米大陸に同時に存在していた為合併する事になった超大国でAEU、人革連と並ぶ三大国家の一つ。

大時空振動により現れた二つの日本と二つの月。ブリタニア・ユニオンは中でも片方の日本への侵略行動を開始。

日本は敗れ、ブリタニア・ユニオンの属国となり、後の『極東事変』と呼ばれ片割れの日本はエリアーと名は変わり、日本人はイレヴンと呼称される事になった。

文化、歴史、そして名前を奪われた日本人は今日もブリタニアによる理不尽な差別を受けているのだった。

そして、そんな植民地となったエリアーに二人は降り立った。

空港に辿り着き、迎えの人間によって連れてこられたのは総督府。即ちこのエリアーに於ける政府機関である。

屈強な兵士達に囲まれ、通された部屋にはこのエリアーを束ねる者。 神聖ブリタニア帝国の第三皇子であるクロヴィスⅡラⅡブリタニア総督その人である——が、いた。

「ようこそレジス外務大臣。遠い所からのご足労、お疲れ様です」

「此方こそ、今回の会談に応じて下さり。本当にありがとうございます」

「さて、挨拶の方はこの辺りにして、早速ですが本題に移るとしましよ

う」

どうぞと用意されていた席に座るよう促され、着席するシオニー。ブロリーは会談の邪魔にならないようシオニーの背後の方へ移動する。

その際、クロヴィスとブロリーの視線は交わり。クロヴィスは少し驚いた様子で目を見開かせた。

「これは驚いた。仕事熱心と噂されていた貴女がまさか専任騎士を選んでいたとは……いやはや、人は見かけによりませんか」

「……は？ はあ!? ち、違いますクロヴィス総督！ 彼は単なる私の護衛に過ぎません！」

クロヴィスの一言に顔を真っ赤な染めるシオニーに、ブロリーはどうしたんだと目をパチクリさせる。

専任騎士とは、皇族だけが選ぶ事を許される騎士の事。あらゆる面に長け、皇族の支えとなり助けとなる……正に選ばれし者の事である。

近年では、その能力の高さ故に皇族と結ばれる騎士も見かけられ、専任騎士とはつまり恋人選びにも見られる事もしばしば……。

世界各国を渡り歩いているシオニーは当然、専任騎士という存在とその意味を知っている為、こうして慌てふためいているのだ。

……意外と、ウブである。

ただ、相変わらず話に全くついて来られないブロリーは、窓から見える街並みを呆然としながら眺めていた。

『やれやれ、いけないよクロヴィス。彼女が困っているじゃないか』  
「っ！」

「兄上、もうそちらの方はよろしいので？」

『ああ、ついさつきトレーズ閣下との会談も終わってね。こんにちはレジス大臣、こうして会うのは久し振りだね』

「シユナイゼル殿下……」

クロヴィスの背後のモニターから現れた人物に、シオニーの表情は一転して緊張感に満ちた表情となっている。

警戒とも呼べる彼女の姿に流石のブロリーも無関心ではいられず、

思わず身構えてしまう。

シユナイゼルⅡエルⅡブリタニア。神聖帝国の第二皇子でありながら皇帝に次ぐ権力を持ち、その能力の高さと人物像により、周囲からも絶大な人気を誇るブリタニア帝国の中でも政治、政略に於いて屈指の実力者。

つまりは、シオニーの天敵の一人でもある人物。そんな彼が通信越しとは言え突然現れては緊迫もするというもの。

だが、そんな二人を前にしても、モニターの男は笑みを絶やさず。柔らかな物腰で語り掛け。

『そう固くならないでくれ、本来なら其処の席には私もいるべきなのだけれど、急用の別件が入ってしまったてね。……もし気分を害してしまったのなら詫びよう。済まない』

と、この様に第二皇子でありながら素直に謝罪を述べる彼に、シオニーはウツと息を呑む。

「兄上、そう簡単に頭を下げないで下さい。寧ろ逆効果ですよ」

『いや、やはりここは礼儀で応えないとね。と言う事でレジス大臣。私の謝罪、どうか受け入れて貰えないだろうか？』

「は、はい。此方こそ失礼な態度をしてしまい。申し訳ありません」  
『では、これでお相子と言う事で……宜しいですね』

一瞬、シユナイゼルからの微笑みに鼓動が脈打つ。

彼は人望もそうだがその甘いマスクも人気の一つであり、本国ではファンクラブもあり、女性達からも絶大な人気を持っている。

そんな彼からの微笑みを受けて、僅かでも頬を染めている彼女を、一体誰が責められようか？

『では、これより会談を始めたいのだが……ブローリー君、だったかい？  
済まないが席を外してくれないかな？』

「なんでですかあ？」

『これから話すサクラダイトの話はちよつと人には話し辛くてね。君を疑うつもりはないけど……』

「大丈夫です。俺、話よく分かっているから」

普通、そこは口は固いではないのか？ 普通とは違う返しにクロ

ヴイスはポカンと口を開き、シオニーはアワアワと慌てふためく。  
しかし。

『ぷ、くく……いやはや、面白い人だね君は。こんな風に笑ったのはいつ以来だろうか』

第二皇子たるシユナイゼルだけは、そんなブロリーが可笑しく思えたのか、人目を気にせず笑い始めた。

「なら、俺はここにいても良いのか？」

「良い訳ないでしょうが！」

スパアン、と、シオニーは何処からとなく出したハリセンでブロリーの頭を頭を殴りつける。

「何で殴るんですかあ？」

「貴方がアホな事いうからでしょうが！ いいから黙ってここは大人しく下がらなさい！ ここはこのエリアで一番安全な場所だから余計な心配はいらないわ」

「だ、だけど……」

「い・い・か・ら!!」

有無を言わせないシオニーの迫力に吞まれ、スゴスゴと総督室を後にするブロリー。

寂しき漂うその後ろ姿は、まるで売られていく仔牛のよう。……その図体からして仔牛よりも鬪牛に近いが。

『済まないね』

「いえ、それよりもいい加減私も話を進めたいですから」

『それじゃ、始めるとしようか。議題は取り敢えずサクラライトの流通と、そして……』

「……………」

『先日のリモネシアで起きた時空振動……いや、ブロリー君についてね』

「っ!？」

シユナイゼルから告げられる開始の一言は、シオニーを一気に追い詰める。

あの時気付けば良かった。このモニターに映る男は一度たりとも

ブロリーの名前を聞いていなかったのだから。

重苦しくなった総督室で、シオニーはブリタニア随一の明晰である第二皇子と圧倒的に不利な状況下で、会談する事となった。



一方、総督室から追い出されたブロリーは当てもなく彷徨い、総督府から出て行き。

「ここは……何処だ？」

現在、絶賛迷子中だった。

総督室から出て、取り敢えず空腹を満たそうと近くのレストランでも探そうと街を探索するが、如何せん初めて訪れる他国の土地故に、土地感など分からず、ブラブラと放浪していると。

いつの間にか、ブロリーは廃墟の街へと足を進めていた。

流石に雰囲気が違うと気付いたブロリーは、辺りを見渡すと後ろに自分がさっきまで歩いてきた街並みが見える。

何で近くにこんな廃墟があるのかと、不思議に思うブロリーだが、今はそんな場合ではない。

（早く戻ろう）

総督府から出て行つたと知られば、またシオニーに怒られるだろうし、もしかしたら本当にご飯抜きにされる事もあり得る。

それに……。

（頭が……痛い）

ズキリと突き刺す様な頭痛に苛まされ、貯まらずブロリーはその場に膝を着く。瓦礫の山となったビル、荒廃した街並み、壁の至る所では銃痕らしき抉られた痕が見られる。

まるで過去に戦争があった場所をそのまま放置された様な風景だが、目の前に映る光景にブロリーの痛みは更に増していく。

「俺は、ここを……知って、いる?」

荒廃し、腐敗し、荒れ果てた世界。其処からは怨念に満ちた声はさながら地獄からの誘いの声である。

自分は知っている。この場所を、或いはこの地獄を。

眩暈が酷くなっていく。頭痛で意識が消えかけたその時。

「あ、あの、離して下さい!」

「?」

か弱そうな女性の声がブロリーの耳に入ってきた。みると、廃ビルの近くに屯っていたチンピラ達か、一人の女性に群がっているのを見た。

「いーじゃんちよつとくらい。こんな所にいると危ないからさ、俺達が守ってあげるよ」

「その制服、アッシュフォード学園のだよね? ブリタニアの学生がゲッターに何の用よ?」

「つてか、君かわういーね!」

群れているチンピラに脅えているのか、鞆を抱えて俯いてしまう赤毛の少女。

そんな彼女に益々つけあがったチンピラがここぞとばかりに近付いてくる。

その光景を前にブロリーは一瞬だけ迷うが即座に割って入る事に決めた。

自分が盾になればその間に彼女は逃げられるだろう。この軀はやたら頑丈に出来ているし、機動兵器や次元獣ですらも傷を付ける事も叶わない。

自信に裏打ちされた防御力。それは記憶のないブロリーの数少ない自慢出来るものである。

それはそうと、そろそろ彼女を助けに行かなければ。ブロリーは怯えているだろう少女の下へ歩み寄ろうとするが……。

「あゝあ、たく。面倒くさいなあ」



「はっ！」

「いつもと同じ道じゃいつかバレると思つて今日は別のルートを通つたつてのに……」

先程までのしおらしい態度から一変。髪を無造作に掻き乱し、眼光を鋭くさせる少女にチンピラ達は勿論、ブロリーも剰りの変貌ぶりに言葉を失っていた。

少女、というよりも戦士に近い雰囲気醸し出す彼女にチンピラ達は僅かに後退るが、すぐに表情を憤怒に染め上げ。

「てめえ、可愛い顔してるからつて調子くれてんじゃねえぞ！」

「生意気なその面、ボコボコにしてやんぜ！」

チンピラ達は少女一人に一斉に襲い掛かる。

数は圧倒的、しかも全員男。少女唯一人ではどうしても覆らない状況。

しかし。

「ふっ！」

「なっ!？」

「せい！」

「がっ、ああ……!？」

「たあ！」

「ぎゃぶるん!？」

少女は並み居るチンピラ達を卓越した体術で以て圧倒していった。投げつけた靴を目隠しにしている間、背後にいるチンピラ達に振り返りもせずに蹴りを鳩尾に叩き込み。

左右にいる二人には回し蹴りとハイキックをそれぞれの延髄に叩き込み、靴をぶつけられ、僅かに怯んだ真つ正面の男には渾身のアツパーをお見舞いする。

三秒にも満たない僅かな時間、ほぼ一瞬とも呼べる刹那の間、少女は四人のチンピラ達を瞬殺した。

「ふん、つまらない男だね」

少女の凄まじい体術に遠巻きで見ていたブロリーは助ける必要はなかったかと踵を返す。

ところが。

「こ、のお！ 舐めくさりやがってえ!!」

最初に打ちのめした筈の男が、近くにあった鉄パイプを拾い上げて少女の背後から襲い掛かる。

どうやら、最初の一撃は他の男の一撃と比べやや浅かった様子。

「死ねクソアマア!!」

「っ！ しまっ!？」

死角から狙われ、咄嗟の対応に反応が遅れ、次に来る痛みと衝撃に備えるが。

パシリ、と、突然現れた横からの手が男の手首を掴み取り、阻んでいた。

「え、え?」

「な、何だテメエは!？」

突然として現れた黒スーツの男。ブロリーの突然の登場に少女は目を丸くさせ、男もまたブロリーの手から逃れようと必死にもがくが。

「は、離せ、コイツ!」

「……………」

どんなに力を込めても、どれだけ蹴り付けようともまるでビクともせず、万力の如く締め上げるブロリーに男は徐々に痛みの声を上げていく。

……因みに、これでもブロリーは豆腐が崩れないよう優しく包み込んでいる程度の力しか出していないのであしからず。

「あ、があああ!! 離せ、離せよ畜生!!」

「ち、ちよつと、もうその辺にしておいたら……………」

紫色に変色し、ギシギシと骨が軋む音が聞こえ、痛みには耐えかね涙混じりに叫ぶ男に少女は流石にやりすぎだとブロリーを止める。

「分かり……………ました」

ブロリーは少女の言葉に従い、男の手を離す。持つ手に力が入らないのか、男は手にしていた鉄パイプを手放しブロリーに睨みつけるが

……。

「……………」

「ひっ！ ば、化け物！」

黒く澄んだ瞳に男はゾクリと肌寒いモノを感じ取り、仲間を放って一目散に逃げ出した。

特に追い掛ける必要も感じず、ブロリーは今度こそ踵を返すが。

「ちよつとアンタ」

「？」

「何で割り込んで来たのさ？ アンタには関係ない事なのに……私を女だからってバカにしてんのかい？」

鋭い剣幕でいきなりの喧嘩腰、何がなんだか分からないブロリーだがどうやら自分が怒らせているのだと思い、素直に謝ることにした。

「ごめんなさい……です」

「……いや、私こそその、ごめん。助けてくれたのに失礼な事言うて」

今度は怒りの顔から一変し、急にしおらしくなる少女。なんだか慌ただし女だなど思いつつも、ブロリーは地元住民らしいこの少女に対しちよつとしたお願いを試みることにした。

「あの、訊いても良いですか？」

「え？ ええ、構わないけど」

「総督府に行くにはどうすればいい？」

総督府。その単語を聞いた瞬間、少女の目は鋭くなり、ブロリーとの距離を開け始める。

「アンタ……ブリタニアの人間か？」

「ブルガリア？ 俺はリモネシアから来ました」

「いや、ブリタニアだから。三大国家の名前覚えなさいよ」

「ごめんなさい……です」

「……………」

やりにくい。少女は目の前の男は自分が殺気を出している事にも関わらず平然としていて、尚且つ隙だらけであるブロリーに対し警戒している自分がバカバカしくなってきた。

暫し考えに耽ると、少女は警戒を解き、髪の毛を無造作に掻き乱してブロリーに向き直り。

「其処を真つ直ぐ行くと通りに入るから、後は道なりに進むと総督府に着く筈よ」

「ありがとうございます」

「それじゃ、さようなら。誰かに聞かれても私の事は喋らないでよね」少女はボソリとブロリーに総督府への道を告げ、口止めらしき言葉を告げると、廃墟の奥へと姿を消した。

残されたブロリーは少女に礼を述べ、言われた方向へと足を進める。

後に戦場で再会する事など、この時二人は知る由もなかった。



「まさか、こんな事になるなんて……」

総督府に設けられている客室。会談を終えたシオニーは一人、思い詰めた表情でうなだれていた。

会談は無事終了。サクラダイトのリモネシアへの流通も何とかこぎつけた。

しかし、その見返りとしてシュナイゼルはシオニーに対しある条件を提示した。

それは次の会談は此方が用意した場所で招待する人物と共に行うと言う事。

ここまででは、さほど問題視するモノはないのだが、問題はその条件の内容だった。

「……トレーズ、クシユリナーダ」

敵意を剥き出しにした彼女の視線の先には一枚の手紙。

其処にはシュナイゼルが提示した条件の詳細が書かれており、その内容はというと……。

“ 場所はA E Uに所属する組織O Zを束ねる総帥の部屋。 ”  
そして、その会談に出席している名前の欄の最後には唯一言。

“ リモネシアの若き大臣、シオニーレジスト、遠き時空の旅人の到着を、心待ちにしています。

トレーズクシユリナーダ ”

どんなに欺いても、世界が放っておけないのなら……  
乗り込んでやろうではないか。

## 第六話 動き始める世界。

“AEU”。ヨーロッパ各国の連合であり、ブリタニア・ユニオンと人革連に並ぶ世界三大国家の一つ。

シオニー||レジスとブロリーはそんなAEUの領地であるフランスのパリへと赴いていた。

「……………はあ、鬱だ」

文化遺産の一つ、エッフェル塔を前にしてシオニーは盛大な溜め息洩らす

先日のエリア11での会談はシユナイゼルが持ち込んできた条件を呑む事です承し、無事に話は纏まった筈なのだが……………。

その条件の内容にシオニーは憂鬱な気分になれずにはいられなかった。

『次の日曜、フランスのパリでOZの総帥と会って欲しい』  
とだけ告げて来た。

AEUとは別の軍事組織“OZ”、しかもその相手はそのOZの総帥。

更に言えば、その会談には先日の会談でモニター越しの対面となったシユナイゼル本人までもが出席すると言う事。

世界を実質的支配している三大国家、そして相手はその中枢にいる者達。

(狙いは、間違いなくブロリーか)

ブロリーの持つ力は未だ未知数な部分が多い。その強力さ、圧倒的さは勿論の事。底知れない力を持つブロリーは下手をすれば世界に對する有効な手札となる。

無論、そうなればリスクも大きいし不安な部分も多い。だが、それを考慮してもリモネシアにとっては充分切り札となり得る存在である。

彼等がどこまで知っているかは知らないが、こうなった以上は仕方

ない。

残されたシオニーの手段はブロリーを手に入れようとする輩の魔の手を振り払うこと。

(奪われてたまるものか、これ以上、絶対に!!)

一層強く決意を固め、会談に望む意気込みを高めるシオニーだが……。

「あれ？ ブロリー？」

隣にいる筈のブロリーがいつの間にか消えていた事に気づき、辺りを見渡していると。

「アイス、取り敢えず全部くれ」

「ぜ、全部ですか？」

「お金、足りるか？」

「は、はい！ ありがとうございますー！」

「何やつとるかー!？」

アイスの屋台でアイス全乗せという挑戦に挑んでいるブロリーに溜まらずシオニーはハリセンを叩き込む。

「シオニー、痛い」

頭を抑え、それでもアイスを手放さない辺り、ブロリーの食に対する執念が伺える。

「これから往く会談はねえ、世界のトップが集まる重要な場所なの！ しかも奴らは間違いなくアンタを狙って来る！ その意味分かってる!？」

世界のトップが狙っている。それ即ち意味するのは、世界がブロリーを狙うという意味と同義。

まだリモネシアは国連の中でも弱小の国。発言力は高くなっても軍事力のない国は大国に淘汰される。

シオニーはブロリーの胸倉を掴み、揺さぶりながら言い含めようとするが。

「よく分からないが、俺はお前から離れるつもりはない」

「……え？」

「俺はお前を守る。誰が相手でもそれは変わらない……」

黒く、真つ直ぐに見つめてくるブロリーの瞳。そんな彼の瞳を見て鼓動が高く脈打つ自分は単純な女なのだろうか？

全てから守る。つまり、その言葉の意味をする事は……。

「全てって……じゃあ、世界が相手でも？」

ドクン。心臓の高鳴る音が耳元で木霊する。

口に出してしまった問い。そしてその問いにブロリーの唇が動き出し……。

「おほん。……そろそろ、宜しいか？」

「ひゃわああっ!？」

突然割って入って来た声に振り返ると、赤い軍服を纏い眼鏡を掛けた将校らしき女性がジト目でこちらに睨みつけてきた。

咄嗟に手を離し、慌てるシオニーを余所にブロリーは何事もなく立ち上がる。

「誰だ、お前は？」

「私はレディアン、トレーズ様の御命令により貴君らの迎えに上がった者だ」

「あ、ありがとうございます。貴女がトレーズ閣下の副官の……」

「はい。では、トレーズ様がお待ちになっていきますので……此方へ」

平静を装いながら、シオニーは用意されたリムジンへと乗り込む。

ブロリーもまたシオニーに習って乗り込もうとするが……。

「あの、アイスの持ち込みは……ちよつと」

「駄目ですかあ？」

「当たり前でしょうが！」

落胆した表情でブロリーはアイスをその場で飲み込み、今度こそシオニーの隣へと座るのだった。

……その際、数十段と積み上げられたアイスの山を丸呑みするブロリーに、レディアンが目が点となったのは割と関係のない話。



◇

車に乗り込み、一時間程移動した所。森に囲まれ自然豊かな土地にその屋敷はあった。

レイディアンに連れてこられて、案内されたのはOZの総帥の執務室。

とうとうこの時が来たと、シオニーは固唾を呑み込み、意を決して扉のドアノブを捻る。

そこに待ち受けていたのは……。

「やあ、待っていたよシオニー」レジス外務大臣」

「遙々ようこそいらしてくれた」

「トレーズ閣下。それにシュナイゼル殿下まで……」

テーブルを挟んでソファアに座る二人の男性。どちらも超の付く美男子で普通の女性ならばその姿を拝見しただけで昇天してしまうだろう。

だが、そんな彼等を前にシオニーは敢えて敵意を示す事に対応する。

しかし、決して表情には出さない。感情を表に出したら最後、この会談は二人の独壇場となってしまう。

強い意志で挑まねば。シオニーは目の前の会談という戦場に向けて足を進める。

「今回の会談は長くなりそうだからね。シェフに頼んで料理を用意したんだ」

「口に合えば良いのだが……」

「いえ、お気になさらず。……早いところ始めましょう」

料理？ ふざけているのかコイツらは？

今自分達のいる場所は戦場、言葉という武器で戦う場所だということにこの余裕……。これが世界の頂点に君臨する者達の姿勢なのだろうか？

それとも彼等にしてみれば自分など取るに足らない田舎の小娘に

しか見えないのだろうか？

(だったら好都合。そのまま油断しているがいい。そうしている内に私がお前達の喉笛に噛みついてやる！)

感情を抑えて心を静かに保ち、シオニーは二人の男性の下へと歩み寄る。

(待てよ……料理?)

そこでシオニーは思い出してハツとなるが……。

「シオニー、これ美味しいぞ」

「やつぱりかこんちくしょうー!!」

時既にお寿司、いや遅し。テーブルの上に並べられた料理の誘惑に頗る喜ぶ奴がすぐ近くにいた事を失念していた。

この男、リモネシアの切り札であると同時にとんでもない足手纏いである。

「やあ、久し振りだねブロリー君。私の事、覚えていてくれたかな？」

「ふふいへるふあつけ？」

せめてちゃんと噛んで、喰ってから喋れよ。なんてシオニーやレディーンの思いは届く筈もなく。

「今日は君に紹介したい人がいるんだ。こちらが私の友人でOZの総帥である」

「初めまして、私はトレース・クシユリナーダ。君の事はシユナイゼル殿下から聞き及んでいるよ」

「ふろふいーへふ」

「……ふふ、シユナイゼルの言うとおりに変わった人だね、君は」

「だろう？ ……ん？ どうしたんだいレジス大臣？」

「遠慮はいらないよ。レディ、シエフに追加の注文を頼む」

「はい。畏まりました」

残された自分、カオスになりつつある会談にシオニーは最早真面目にする気力もなくなり。

「レジス大臣、君はワインは飲めるかい？」

「……いただきます」

もう、どうにでもなれ。シオニーは色々と諦めるのだった。



「なる程。では君はどうして自分がここにいるのか、何故この世界に  
来たのかは全く覚えていないんだね？」

「ふおーなんれふ」

シュナイゼルの質問にブロリーはひたすら食べながら答える。

……正直、今自分達のいるこの空間に対し、突っ込みたい事は山ほど  
あるが、今は我慢しておこう。

洗いざらい喋っているんじゃないとか、食べながら話すとか、ど  
んどけ食ってるんだとか、少しは自重しろとか、そんな事は今はどう  
でもいい。

……レディ副官、お願いだからそんな諦めた様な遠くを見る目は止  
めて下さい。貴女だけが最後の良心なんだから。

あの後、ブロリーを囲んでの会談は一向に進まず、唯のお食事会な  
りつつあるこの会談にシオニーはトレーズとシュナイゼル、二人の真  
意が図れずにいた。

既にブロリーについてあれこれ聞いて来ているが、記憶喪失者であ  
り時空振動である事以外は話していない。

ブロリーにはその程度の事なら話していいと伝えてはいるし、多少  
の事実の漏洩は致し方ない。寧ろ下手に事は話せないのはシオニー  
の方だ。

都合の悪い話ならブロリーに記憶喪失者故に「分からない」また  
は「覚えていない」と言い張れば良いと伝えてはいるが、自分はそう  
はいかない。

記憶喪失者であるブロリーとは違い、自分は保護者の身。ブロリーの行動はある程度把握しなければならぬ立場の人間だ。

下手に誤魔化したりすれば矛盾点を突き付けられ、本当に洗いざらい吐かされてしまう。

目の前にいる二人は事前にブロリーの存在を知っていた。その情報網は侮りがたく、もしかしたらブロリーの例の姿も知られているかもしれない。

それが国連大使からの情報だとしたら、実に厄介な事。

約束を違える彼もそうだが、それを知りながら敢えて知らないフリをしている此奴等もなんと腹の立つ事か……。

ギリツと歯軋りの音が耳元で聞こえる。目の前の二人に気取られぬよう極力平静を保っているつもりだが、それでも思わずにはいられない。

「所でブロリー君、一つ君に聞きたい事があるのだが……聞いて良いかな？」

「さつきから何回も聞いて来たと思うんですが？」

シュナイゼルの度重なる質問に段々嫌気が差してきたブロリー。本来なら皇族相手にこの様な態度を取れば不敬罪で極刑も免れないのだが、そうしないのはこの男の懐の広さ故なのか、それともそれほど迄にブロリーの事を気に入っているからなのか。

……恐らくはその両方なのだろう。

「はは、これは手厳しい。だけど君の言う事も尤もだからね。だからこの質問で最後さ……」

「ブロリー君、君はこの世界の事をどう思う？」

今まで、あまり言葉を口に出さなかつたトレーズが、ブロリーに最後の質問をシュナイゼルの代わりに投げ掛ける。

その瞳は鷹の如く鋭く、人の嘘偽りを映し出す鏡の様に澄んでいた。

ブロリーは記憶喪失者、この世界の事は勿論、自分の事すら理解出来ていない不完全な存在。

そんな人間に対し、世界の事を聞いて一体何の意味があるというのだろうか？

「無論、君の事情は承知している。だから……いや、だからこそ答えて欲しい。何も知らない君だからこそその答えに意味がある」

無知は憐れではあるが罪ではない。寧ろ、下手な思い込みや考えが無い分新しい閃きが生まれる。

だがこの場合、世界という議題によりその答えでブロリーの本質を見抜こうというトレーズの見極めである。

ブロリーを射抜く鋭い眼光、その劍幕にシオニーは息を呑み、執務室は張り詰めた空気に包まれる。

先程とは打って変わって剣呑な空気、トレーズの隣にいるシュナイゼルも目を細めて二人を見つめている。

ブロリーの答えに全員が注目していると……。

「……別に」

返って来たのは、剩りにもあつさりしたものだだった。

ブロリーの答えに、場の空気が一気に凍り付いた気がした。

「別に……とは、それはこの世界に興味が無いという事かな？」

ブロリーの答えにトレーズは怒り、或いは悲しみの混じった目で見つめてくる。

シュナイゼルも落胆したのか、腕を組んで溜め息を零している。

「世界が何だろうと、俺のやる事は決まっている」

「やる事？」

「シオニーを守る。……それだけだ」

再び、訪れる沈黙。だがそれは先程とは違い殺伐したものではなかった。

トレーズとシュナイゼルはポカンとして目を丸くさせ、レディIIアンは眼鏡をズルリと落としていて、シオニーは顔を真っ赤に染め上げて口をパクパクとさせている。

「く、はは、フハハハハ!! なる程、それが君の答えか！」

「何がおかしいんだ？」

「ふふふ、いや済まない。気を悪くしないでくれ。ただ君が剩りに純粋なものでね」

「レジス大臣。君は本当に果報者だね。こんなに君を想ってくれているなんて……正直、羨ましくさえ思えるよ」

「い、いや、別にそんな訳では！」

執務室に木霊する笑い声は終始止むことはなく、シオニーはそんな二人にアタフタと弁明を述べていた。

そんな中、一人訳が分からないと首を傾げるブロリーにレディIIアンは……。

(コイツ、天然か！)

冷ややかにブロリーの事をそう評価した。



「……………鬱だ」

本日幾度目のシオニーのため息がリムジン内で空しく響く。

あれから会談らしい話題は出ず、世間話を何回か話しただけで終わり、結局なんの為に呼ばれたのか判らずじまいだった。

会談という名の井戸端会議は終わると、そそくさと帰ろうとするシオニーにシュナイゼルとトレーズはにこやかに微笑みながら見送ってくれたのは無性に腹が立ったが……。

まあ、こうして高そうなりムジンで手厚く送ってくれるのだ。貰えるモノは貰っておこう。

幼い頃から身にしみている貧乏根性が最近出始めているように感じるが……それはしようがないと言える。何故なら、一番金の掛かる

存在が一番近くにいるからだ。

そして、その金の掛かる厄介者はというと。

「おお、凄い。この車、テレビがあるです」

備え付けられた目の前のモニター型テレビに目をキラキラと輝かせてはしゃいでいた。チャンネルを弄りまわしているブロリーに呑気なものだと呆れつつ、シオニーは今回行われた会談の内容を思い出す。

ブロリーが時空振動で現れた稀有な存在だと言うことは間違いなく知っている。問題はブロリーの力を知っているか否か、だ。

知らないのであればそれに越したことはないのだが、如何せんどちらも独自の情報源を持っているだろうし、一を知れば十処か百を理解する超の付く切れ者だ。

しかもトレーズに至っては独断で軍を動かせる権限を持っているし、彼自身も武に秀でた人間だ。その気になれば自分達を分断させ、どうとでも出来た筈。

……まあ、そうなれば野性的本能でシオニーの危機を察知したブロリーが彼等を血祭りに上げるだろうが。

となると、やはり知らないという可能性が大きいか？

(いや、その考えは危険だ。知らないなら知らないでもっと深くブロリーに探りを入れただろうし、知っているフリをしてこちらの油断を誘っているのかもしれない)

シオニー＝レジスという人物は、基本的には慎重且つ臆病な人物である。不足な事態には慌てふためくだけだし、被害妄想が強い一面もある。

《ある人物》のお陰もあって今の地位へと登り詰めた姑息な所もある彼女だが、それだけでは外務大臣のポストは務まらない。

シユナイゼルやトレーズを前にしても内心は揺れまくりだがそれを表に出さないだけの仮面を持っているし、慎重で臆病な性格が外交に関しては防御の能力として役立っている。

最近は色々あって自分のキャラが崩れつつあるが(理由は……分かるな?)、それでもやはり外務大臣シオニー＝レジスの能力は健在

だった。

そんな彼女が先程の会談について、どこかミスはなかったか、何か此方に対して不利になる言質は取られていなかったか？ そんな事ばかり考えていると。

「シオニー、シオニー」

「何ですか？ 私は考え事で忙しいんですけど」

「テレビが壊れた。どれも同じになっている」

「はあ？」

おかしい事を言い始めたブロリーにシオニーは呆れ顔になる。この男、呑気にタダ飯を食らっただけでなく、向こうの備品まで壊したのか？

……流石にトレーズはこの程度で外交問題にするような人間じゃないと思うが、失態したのは此方だ。先んじて詫びる必要がある。

と、その前に一応どこが壊れたのか確かめるため、ブロリーからチャンネルを奪い取り、シオニーは適当に各番組を回してみた。

だが、その内容はどれも同じ。更に言えば一人の老人がテレビの真ん中に陣取り動かないでいる。

そこでシオニーも気付く。……壊れたんじゃない、どこも同じ内容の番組を——いや、映像を流しているのだ。

老人——イオリアーシユヘンベルグと名乗る人物は語る。

『全ての人類に、報告させて頂きます。我々は《ソレスタル・ビーイング》。機動兵器《ガンダム》を所有する私設武装組織です』

新たな時代の幕開けを、世界に向けて宣言したのだった。

「……カンタム？」

ブロリー、それはアカン。



## 第七話 そうだ。熱海行こう。

ソレスタルビーイングなる謎の組織からの犯行声明から数日後。相も変わらず世界は回り続けている今日、リモネシアは復興作業に勤しんでいた。

国連を最初に、OZや更にはブリタニアの一部までが太平洋上に浮かぶ小さな島国であるリモネシアの復興に支援すると言われ、これがニュースになった時は結構な話題になった。

OZはAEUの一部、ブリタニアは大国ユニオンの片割れ、更に国連迄もが支援に乗り出すと言うのだ。

話題になるというのも当然だろう。

何故そんなにまで小さな島国に其処まで関わろうとするのか？

世界各国の見えない真意にマスメディアは翻弄され、リモネシア大使館は連日マスコミの対応に追われていた。

そして今日も取材を申し込んできているメディアの対応に大使館スタッフが追われている中。

「……で？ 一体何をしに来たのです？ カルロスⅡアクションⅡ Jr」

「何ってシオニーちゃん、僕が遊びに来たのがそんなに嬉しいの？ やだなーもう」

目の前にいる羽織の良さそうな男性に、シオニーは既に疲れとストレス、そして怒りで爆発寸前となっていた。

「……私は今、世界中のマスメディアの対応に追われて忙しいのですか？」

「ん？ 知ってるよ。だから来たんじゃない」

何を言ってるんだと言いたげな目の前の男に、シオニーは軽く殺意を覚える。

最近の自分はブローリーのクソ硬い頭に日々ツツコミを入れているのでハリセンの扱いは一級のモノとなっている。

そこら辺の悪漢風情なら、圧倒出来る自信がある。そう思いシオニーは手元にある相棒（ハリセン）に手を伸ばす。

「だってシオニーちゃん最近じゃ国連の会議に出てないじゃない、僕達」としてはもつと世界中の紛争を煽って欲しいのにさ。ダメだよサボタージユは」

口調は相変わらずふざけた態度をとっているが、それでも目を細めた彼の瞳には一種の意志が宿っている。

それに気付いたのか、シオニーは執務室の窓を閉め、誰にも聞かれない様細工をすると、表情を険しくしてカルロスと向き直る。

「大丈夫だって、誰もここには通さないようにしてあるから」

「まさか、また使ったのですか？ 良くもまあ飽きないものですね」

「金つてのは万能だからね。ちよつと警備員に握らせると何でも言う事聞いちゃうんだもの」

カルロスの物言いにシオニーは頭が痛くなった。金に屈する警備員もだが、金に物を言わせてやりたい放題のコイツに一言言つてやりたくて仕方がなかった。

だが、それだけの財力があるのもまた事実。アクション財団と言う世界最大企業の総裁であるカルロスはまさに世界一の大富豪と言えるだろう。

「祖国の為に奔走するのもいいけど、本来の仕事もきつちりこなさなきゃ、折角《彼》が用意してくれたポストなんだから有効活用しないと……」

「そんな事は……っ！」

分かっている。そう言おうとする彼女だが、頭の中に残るモノが脳裏を過ぎり、口を閉じてしまう。

様子のおかしいシオニーにカルロスは首を傾けると。

「……カルロス、本当に私達の計画で世界は変わるのでしようか？」

「《彼》が言うにはね。にしてもどうしたの？ もしかして今更怖じ氣付いたのかい？」

「だって、次元震は最近ここばかり起きているみたいだし、WLFだって……」

「あー、その事については気の毒だとは思うよ？　だけど僕の会社にもWLFのテロ被害があったんだから、お互い様じゃない？」

「けどー」

「……あれ？　でも変だな？　そんな災害に見舞われているのにこの辺りは大した被害は出ていない……ここの貧弱な警察組織では太刀打ちできない筈なのに……」

しまった。シオニーは余計な口出しをしてしまった自分の口を両手で抑えるが、既に遅し。厭らしい笑みを浮かべて此方に滲み寄ってきた。

「シオニーちゃん、何か隠し事していない？」

「別に、何も？」

「ソレスタルビーイングとか謎のロボットの登場で有耶無耶になっっているけど、ここも相当な不思議があるんだよねー」

「……………」

「ねえ、WLFや次元獣をこの国はどうやって退けたの？」

「さあ、当時の私は会談でこの国を離れていたので詳細は分かりませんが、多分その謎のロボットやらが助けてくれたのでは？　あれは負けている側を助けるそうですから……………」

無論、彼女が言っているのは全て出鱈目である。その時は彼女も現場近くにいたし、誰がテロ組織を撃退したのもこの間の次元獣の出現によりそれは確実のモノとなっている。

睨み合う二人、張り詰めた空気が執務室に充満していくと。

「分かったよ。今回は聞かないでおくよ」

潔く引いたのはカルロスの方だった。帽子をかぶってソファーから立ち上がり、ドアの取っ手に触れる所で振り返り。

「シオニーちゃん、隠し事もいいけどお仕事の方も忘れずにね」

「分かっていますー！」

「おお怖、それじゃあねー」

いけ好かない笑顔を残して去っていくカルロス。苛立ちの種が漸くいなくなつた事に安堵するも、シオニーの顔は依然として暗かつた。

徐に立ち上がると、シオニーは自分の仕事場である机に向かい、引き出しを開けると。

其処には分厚く束ねられた書類が嚴重に保管されていた。

書類な表紙に書かれている文字は唯一言、プロジェクト・ウズメ”と記されている。

「教えてアイルム、私は本当に……貴方を信じていいの？」

シオニーの呟きは誰もいない執務室に広がり、当然ながら答えは返ってこず。

「ねえ、ブロリー、貴方は……どう思う？」

彼女の問い掛けは、やはり誰も答えはしなかった。

——そして、そのブロリーはと言うと。



「はあ、気持ちいい……です」

現在、この男はエリアーとは異なるもう一つの日本、その中でも温泉街として知られる熱海へと来ていた。しかも彼が今浸かっているのは老舗の温泉旅館で有名なくろがね屋の露天風呂。

外から一望できる熱海の街と海の眺めは晴れ渡った青空と相成つて正に絶景、贅沢にも二人で貸し切り状態の為に幸福感アップである。

「いやー、いつ来てもこここの露天風呂は最高だわい。雨の日も中々捨てがたいものもあるがやはり晴れが一番じゃて」

「そうなんですかあ？」

「そうなんじゃよ。……ところでブロちゃんは何しに此処へ？ 見かけん顔じゃが此処には観光かい？」

向かい側の湯で浸かっている老人、顔に付いた大きな傷が厳つい印象を受ける老人だが人当たりは良さそうな人物で、現に此処にくる途中一緒にあった時色々とお話をしている内に仲良くなり、今は上記のような愛称で呼び合う仲となっていた。

それは兎も角、老人の問い掛けにブロリーはフフンと胸を張ると。

「俺は、お使いに来たのです」

「ほう？・誰かの使いかい？」

「はい、光子力研究所へです」

光子力研究所。その言葉を聞いた瞬間、老人の目がスツと鋭くなる。にも気付かず、ブロリーは初めてシオニーから頼まれたお使いの内容についてベラベラと語り出す。

因みに、ブロリーのお使いに関するそれは全てシオニーの嘘である。

光子力エネルギーは実用化の一途を辿っているとはいえ未だ研究中の代物、流石の彼女もそれに手を出す考えはなく、今回ブロリーを単身日本に送ったのはひとえにカルロスが目から逃れる為である。

余計な真似をされる前にブロリーを海外に送り出す彼女の選択は正しく、そして間違っていないと言えよう。

そんな事とはつゆ知らず、初めて護衛以外に頼って貰った事に喜んだブロリーは意気揚々と光子力研究所のある熱海へと来ていた。

もし万が一、またリモネシアで次元震やWLFが騒ぎを起こせば例の金ピカ形態になって飛んで行けばいい。あの状態になれば一分も懸からず往復出来るだろう。

因みに、此処に来るときは黒髪状態で約三分程掛かった。

そして、ブロリーの今回のお使いに関する事を全て話す頃、老人は風呂から上がり。

「そんじゃあ儂はこの辺りで失礼するよ。ブロちゃんもお仕事頑張つてな」

「はい……十歳も元気で」

互いに簡単な挨拶を済ませ、兜十歳と呼ばれる老人は浴場を後にした。

「……俺も行きませんか」

そして、その数分後にブローリーも風呂から上がり、光子力研究所に向かうのだったが……一部始終を見ていた湯殿係の安は思う。

(ありや無理だ)

実際、それは事実となり、ブローリーは光子力研究所に入る事は叶わず、門前払いを受ける事となった。



「はあい、お疲れ様でーっすー!」

「お疲れ様でしたー」

時刻は既に5時を過ぎ去り、夕日の赤い光が熱海を照らし、撮影終了の合図が人気のない海岸に木霊する。

トップモデルの仕事を終えたF01レーサー、飛鷹葵は一度伸びをすると、何気なく空を見上げる。

朱色の染まる空、解散していく撮影スタッフの片付け音をBGMに葵は一人呟く。

「今日も、終わりがあ……」

飛鷹葵は生まれこそ普通の人とは違うものの、それ以外は全て良好だった。トップモデルとして、更には過激なスポーツとして知られるF01のレーサーとして名を連ね、近い内に大きな大会を控え優勝確実とまで言われている。

順調に進んでいる人生、不自由などあり得はしない暮らしたが、何故だか彼女の心は空虚だった。

満たされない。どんなに刺激的な体験をしても、どんな危険な局面でも限界を超えての熱さを体験する事が出来ないでいた。

自分の中にある穴、それを埋めてくれる何かに出逢えぬまま、彼女の1日は終わりを迎えていた。

「……………帰ろ」

そう言っただけで着替えを終えた彼女は愛車のバイクの下へと向かい、鍵を差し込もうとするが……………。

「……………ん？」

ふと、視界の隅に入ってきた一人の男性、トボトボと情けなく海岸沿いを歩くその姿は情けないの一言に尽きる。

だが、何故だか葵はその男が気になった。男にしては肩にまで掛かった長い黒髪、弱々しい横顔、葵の好みの男性とは少しかけ離れている。

なのに、その男が気になって仕方がなかった。……………理由は自分でも分からない。だが、気が付けば自分の足は男に向かって歩き始めている。

「……………偶には、いつか」

他人に対してはトコトン無頓着な葵。そんな自分自身に戸惑いつつも、葵は男の下に向かうのだった。



「……………はあ」

深い溜め息と共にやるせなさを吐き出すブロリー。既に日は傾け始め夜の帳が幕を下ろし始めた頃。

事前に光子力研究所へアポを取っていないブロリーが研究所に入る筈もなく、受付の呼び出した警備員に連れられポイントと締め出されてしまう始末。

折角意気込んで来たというのに、これでは無駄足もいい所である。尤も、光子力研究所の所長である弓所長とあつた所で会談や話し合いなど全く無経験なブロリーにとても務まるとは思えないのが、シオニーの本音である。

記憶は未だ戻る気配はなく、世話になつているシオニーに何かしらの役に立ちたいと思ひ、遙々この日本へと赴いて来たのだが（とは言つても、片道三分の短い道のりだったが）。

剩りにも役に立たない自分にブロリーは再び溜め息を零すと。

「ねえ、その貴方」

「？」

「貴方つて地元の人？　もし良かったら案内してくれないかしら、近くに旅館があるつて聞いたんだけど迷っちゃつて」

振り返る先にいたのは赤みを帯びた長髪の女性。その外見やスタイルからして相当な美人だと言うのが見て分かる。

しかしブロリーは記憶喪失者、欲情という感情すら忘れてしまつてゐるこの男が目の前の美女に対し、大した感想も抱かず。

「ここを真つ直ぐ行つて左へ曲がり、突き当たりを右に行けば着きます」

それだけを告げるとブロリーは深くため息をこぼし、踵を返すが……。

「……ねえ、そこまで連れてつてくれないかな？」

回り込まれ、行く手を阻まれてしまう。エリアーといい目の前のこの女といい、赤い髪をした女性に何故こうも絡まれるのだろうか？

それとも、自分はそう言う星の下に生まれてきたのか？　記憶のない自分だが、流石にそれはない……と、思いたい。

（……面倒、くさいです）

などと、ブロリーに日本屈指の美女が面倒くさいと思われている一方です。

（な、なんで私こんな事しているの？）

こちらもこちらで、平静を装う一方で、内心かなりの焦りを見せ始めていた。



らしくない、全く以てらしくない。他人に差して興味を持たず、一人を好む彼女にしては今自分が行っている行動に自分自身混乱している。

(というか、何この人、逆ナンされているのにノーリアクションって……)

こう言つては何だが、自分はこの日本に於いて結構名の知れた人間だと思つている。

この熱海に来てからも撮影の合間にサインを強請られる事もしばしばあつたし、何よりレーサーとしての取材を受ける日々が続ぎ、テレビや雑誌にはそこのアイドルよりも映つたり乗つたりしている。うん、ぶつちやけ自慢話である。しかし、だからこそ後には引けないのかも知れない。

見知らぬ男性に逆ナンとかゴシップ誌にデカデカと載せられる内容である。

しかもその記事が「トップレーサー兼モデルの飛鷹葵、逆ナンするも敢え無く撃沈」なんて書かれたりしたら堪つたものじゃない。

世間が自分をどう思うかは知つた事ではないが、それでもここで引いたら負けた気分になりそうだ。

自分は負けず嫌いで欲しいモノは何だろうと自身の力で手に入れる。この男が欲しいとかはさて置き、それを信条としている彼女としてはやはり引くわけにはいかない。

「……………はあ」

「っ！」

目の前で盛大にため息を吐くブロリー。明らかに面倒くさいと言つている彼の態度に流石にカチンときた。

……………上等だ。こうなつたら何が何でもこの男をモノにしてやる。内心で敵対心をメラメラに燃やしながら、葵はブロリーに挑発的に話しかける。

「それとも、貴方は薄暗い街中をたった一人、しかもか弱い女の子を放つて置くつもりなの？」

「……………か弱い？」

か弱いという言葉が当てはまる女性とは出会った事のないブローリーは一体誰の事なのだろうと小首を傾げた。

——その時。

ズガアアアアア……ン

「二つ!?」

突如として起こった爆発と轟音、何かかと思い振り返ると、先程までの街並みが一変し、熱海の街は炎の海に包まれていた。

「何……これ?」

突然の事態に混乱する葵、呆然とする彼女の前に一体の巨人が降り立つ。

その風貌は古代の剣闘士。手に持っている剣が月光に照らされ妖しく煌めく。

一体、二体と、瞬間に増えていく巨人の群れ、熱海が正体不明の巨人に埋め尽くされた時。

『さあ、愚かな人間共よ! Dr. ヘルに恐れおののくがいい!!』

二つに重なった奇妙な怒声が熱海の街に木霊した。

## 第八話 神と悪魔。

「な、何が起きているってのよ、これ……」

つい先程まで平和で静かだった街並みが赤い炎に包まれ、目の前にはその熱海を強襲したとされる数十体の巨人が暴れ回っている。

瓦礫と炎に包まれた熱海を前に呆然とする葵。

「これは、拙い展開ね。ねえアンタ、さっさとここから逃げるわよ！」  
行軍して来る巨人の群れ、兎に角逃げようと葵は愛車の下へと急ぐが……。

「ふへへ、そういう訳にはいかねえなあ」

「っ！」

目の前に現れた仮面を付けた男達が、葵の行く手を阻むようにして囲んでいる。

手に持っている剣やその風貌からしてあの巨人共と関係しているのは明白。武器を持つ相手に……しかもこれだけの人数を相手に流石に下手な行動は出来ないと察した葵は悔しく思いながら下がる。

「アンタ達、一体なんなのよ。こんなに街をメチャクチャにして、どこ  
のテロ組織よ」

「ふひひ、威勢がいいなあ小娘、だが我々をたかがテロと同列にするのは頂けないなあ」

「我等は鉄仮面、偉大なるDr. ヘル様に忠誠を誓い、あしゆら男爵様の手足となる下僕よ」

鉄仮面と名乗る男達から聞かされるDr. ヘルと呼ばれる者、それはあの奇妙な声の主も言っていた名前だ。

「それで、あんた等の親玉であるそのDr. ヘルってのは何のためにこんな事をするの？」

「決まっている。世界の征服よ」

世界征服。それは壮大な野望で壮絶な野心で、それでいて滑稽な妄想。普通ならここで思いつき笑い飛ばすのがこの場のセオリーに

なるのだろうか、そんな気は起きなかった。

街一つを瞬く間に火の海にした此奴等には、それが可能とするまでの力があると、葵は嫌に思いながらも確信しているからだ。

ソレスタルビーイングといい、コイツ等といい、世界をそうまでして変えたいのだろうか？

葵には分からないし、分かりたくもない。ただ、一つだけ言える事はある。

——それは。

「……それで、あんた等は私達を捕まえてどうするつもり？」

「見せしめだ。貴様等を惨たらしく殺せば我々の、強いてはD r . ヘル様の本気と覚悟を世界中に知らしめる事になるだろう」

「あらそう。けどね、悪いけど黙ってやられる程、私は諦め良くないわよ？」

今、戦わなければ生き残れないという事だ。

状況は多勢に無勢、得物を持った輩が十数名でしかも恐らくコイツ等は人間ではない。

オマケに此方にはブーツとしている足手纏いが一名。絶望的な展開この上ない状況だ。

覚悟を決めるべき。そう決意して飛鷹葵が手に力を込めた。

——その時だ。

『パイルダアアオアア！ オオオオオオオオオン!!!』

街中に響き渡る声が聞こえた時、鉄の城が突如として姿を現すのだった。



「こ、これが……おじいちゃんが研究室に籠もって作っていたモノ」  
『そうじゃ甲児！ マジンガーZは無敵のスーパーロボットじゃ！  
その神にも悪魔にもなれる力でお前の思うとおりにマジンガーを、そ  
して世界を動かして見い!!』

通信越しから聞こえてくる祖父、兜十蔵の言葉を聞きながら兜甲児  
は思う。

今自分が乗っているモノ、それは祖父が持つ書物の一冊に記されて  
いたある人物と瓜二つだという事。

ギリシヤ神話、遙か太古の昔に聳え立っていたあの神に……。

神か悪魔か、そんな事自分には分からない。ただ一つ言える事、そ  
れは……。

「ここから、ここから、出ていけえええええっ!!」

目の前の我が物顔で熱海を荒らすコイツ等を、ぶっ飛ばすという  
事。

操作方法は乗ったばかりの甲児には理解出来ない。だが、彼には確  
信があった。

自分にはそれが出来ると、魂の奥底から叫べばコイツは応えてくれ  
ると。

「飛ばせ鉄拳！」

叫ぶ甲児に鉄の城、マジンガーZは拳を掲げて応える。——そし  
て。

「ロケット、パンチ!!」

必殺の拳が、剣闘士に向けて放たれる。巨大な弾丸と化したマジン  
ガーZの拳は同じ体格である剣闘士の体を豆腐の如く打ち砕く。

熱海を言いように蹂躪した巨人の一体を、このマジンガーZが打ち  
砕いて見せたのだ。

「すげえ、すげえよ兄貴!!」

隣に座る弟のシローも、マジンガーZの強さに驚き、そして歓喜し  
ている。

「これが、神にも悪魔にもなれる力……」

握り締めたグリップから伝わる熱くたぎる力の感触。圧倒的なその力に甲児は戸惑い、震えていた。

強すぎる。自分が知るどの力にも勝る絶対的な“力”を前に甲児は確信する。

(コイツの力があればシローを、爺ちゃんを守れる!)

何を思っこんなスーパードットを自分に託すのかは分からないが、今はそれは詮なきこと。この鉄の城の力があればこの化け物達から街を守る。

そう確信した甲児の前に……。

『よもや、そんな代物を作り出していたとはな……のう、十蔵』

突如として熱海の上空に、巨大な影が姿を現し。髑髏と、二つの頭を持った巨人がマジンガーZの前に立ちはだかった。



「まったく、次から次へと！ 何なのよこの超展開は!?!」

「隙ありー!」

「あるわけ無いでしょ!」

「ぶげら!?!」

襲い掛かる鉄仮面を葵は回し蹴りで撃退。彼女の攻撃で撃沈するのはこれで四人目、足下に転がっている仲間に他の鉄仮面達は葵の予想外な戦闘力に驚愕し、その勢いを完全に殺されてしまっている。

だが、葵の方も既に体力が尽きそうだった。あの巨人相手には黒いロボットが大立ち回りしているし、新しく現れた二体の化け物ロボット相手にもきつと何とかしてくれらさう。

何だか立体映像で現れた巨大な爺さんが色々言っって雲行きが怪しいが、きつと何とかしてくれる……と欲しかっ。

コッチは只のレーザー兼モデルの一般人、喧嘩の経験はあっても殺し合いの経験など持ち合わせてはいない。

向こうはモノホンの剣という凶器を携え、こちらの命を確実に狙ってきている。

一度でも気を抜けば、やられるのは此方だ。しかも今寝かせている連中も時が経てば目を覚ます。

命のやり取り。確かに自分は新しい刺激を求めていたが、コレばかりはノーサンキューである。命を懸ける覚悟も度胸も、まだ此方は備わっていないのだ。

(こっちは一人だつてのに、少しは手加減しなさいよね！)

隣にいる放心状態のブロリーに舌打ちしながら、次の相手に神経を集中させる。

火の海となった熱海を目にしてから、全く身動きしなくなったブロリー。目の前の光景にショックを受け無抵抗だった彼には鉄仮面の魔の手が迫る事はなかった。

恐らく、抵抗する気のないブロリーを殺すよりも元気の有り余っている自分を先に始末してからの方が後が楽で良いと判断したのだろう。

世界征服を謳っている割にはセコイ連中である。

だが、何だかんだ思いながら目の前で殺されては目覚めが悪い彼女にとつて、内心ホツとしている部分も確かに在った。

(いい加減、さっさと終わりたいわ。帰ったらシャワー浴びたい)

などと、今の状況とは程遠い現実逃避をしていると。

「貴様等！ 一体何を遊んでいるかあ!?!」

「!?!?!」

背後から聞こえてきた重なった独特の声、それが先程の剣闘士の巨人の登場の際に聞こえてきた人物のモノと同じ。

ザワザワと騒ぎ立つ鉄仮面、彼等と同じ方向へ視線を向けると……。

「その様な小娘一人に、何をグズグズしている！ さっさと叩き斬つてしまえ！」

……異形。振り返った矢先に現れた存在に葵は只そう思った。葵から見て右側の男は浅黒く、その逆の女は寒気を感じる程の白さを兼ね備えている。

「……今日って何かのコスプレイベント？　こんなサプライズ聞いて無いんだけど？」

堪らず、いつもの軽口を吐き出す事で平静を装うが、そんな自分を見通しているのか、目の前の男女はクツクツと嗤う。

「ふっふっふ、どうした？　声が震えているぞ？」

「まあ、アンタみたいな化け物が目の前にいればそりゃ震えてるわよ」

「減らず口も、そこまで叩けば大したモノだな……鉄仮面！」

「はっ！　あしゅら男爵様！」

男女……あしゅら男爵の指示に従い、背後から襲い掛かる鉄仮面。振り下ろされる刃を葵は体を捻る事で紙一重に避ける。

葵の髪の二、三本程がパラパラと舞い散り、黒いアスファルトの上を彩らせていく。

よくもやってくれたな。自慢の髪が斬られた事に怒りを露わにする葵だが。

「ほう、小娘にしては良く動く」

「っ！　しまっ……ぐっ!？」

コイツに背中を見せたのは失敗だった。などと後悔するのも束の間、背後に立たれていたあしゅら男爵に首を掴まれ、その圧迫される痛みに葵は身動きが出来なくなってしまう。

どうにかして逃げ出さなければ、葵はあしゅら男爵の顔に蹴りを入れて脱出を試みるが。

「元気のいい小娘だな。……だが！」

更に強まってくるあしゅら男爵の力。尋常ならざるその腕力に抵抗虚しく、葵は首に掛けられた力に意識が遠退き始めた。

(私……こんな所で、死ぬの?)

FOIレーサーとして名を馳せ、トップモデルとして名を売れた自分だが、なんて呆気なさすぎる幕引きだ。

意識が失い掛け、瞼を閉じようとした——その時。



いつの間にかあしゆら男爵の、葵の首を掴んでいた手に別の人間の  
手が掴んでいた。

「何だ……貴様は？」

(……え?)

それはついさつきまで、足手纏いで……現に何をする事もなく、唯  
呆然と立ち尽くしていただだけの男、ブロリーがそこにいた。

だが……。

「な、何だコイツは？ 気を失っているのか？」

ブロリーの瞳には何も映ってはいなかった。ただ空虚で、何処まで  
も薄暗い濁った黒が、あしゆら男爵の姿を映し出していた。

「ええい、離せ！」

鬱陶しく感じたあしゆら男爵がその手を離そうと躍起になる。し  
かし、ブロリーの手は一向に離そうとせず。

「が、ああああああっ!!」

あしゆら男爵の手を骨ごと砕こうとするブロリーの力に、あしゆら  
男爵は堪らずその手を離す。

「げほっ、げほっ……はあっ、はあっ」

地に倒れ伏し、今までの苦しみから解放された葵は激しく咳き込み  
ながら顔を上げる。

今までは何の反応も示さなかった男が、突然として動き出した。完  
全にノーマークだった故に鉄仮面達はあしゆら男爵を助けようとし  
ても、そのあしゆら男爵と密着しているブロリーに近付けずにいた。

「この、離せええええっ！」

ブロリーの力に膝を地に着かせ、屈し掛けるあしゆら男爵。しか  
し、腐つても自分はDr. ヘルの側近。あしゆら男爵はブロリーごと  
持ち上げると、遠くに向かって投げ飛ばし。

「ダブルスM2！ その男を踏み潰せ!!」

一番近くにいる化け物ロボット、機械獣と称される機械の獣はあ  
しゆら男爵の指示に従いその足を下ろす。

立ち上がらず、倒れたままのブロリーに機械獣の巨大な足が迫り。  
ブロリーは虫けらの如く踏み潰されるのだった。

砂塵が舞い上がり、瓦礫となった家屋が吹き飛んでいく。

別の機械獣と戦っている最中のマジンガーZは今の轟音に何があつたのだと振り返っている。

飛鷹葵も目の前で人が殺された事を衝撃的に受け、顔面蒼白となって目を見開かせている。

対してあしゆら男爵は踏み潰されたその光景に薄ら笑いを浮かべていた。自分に逆らう愚か者を制裁できた事への優越感。そして、強敵を葬った事に体する達成感に満たされていたのだ。

「ふふふ、馬鹿めが、我々を侮るからこういう事になるのだ。さて、後は仇敵、オリンポスの裏切り者であるゼウスを葬れば、Dr. ヘルの大願は成就される！」

「この、悪魔共め」

「ふはははは！ 今更嘆いても遅いわ！ コレより世界は変わる！

我々が、Dr. ヘルが、世界を征服するのだ！」

掠れた声で言い放つ葵に、あしゆら男爵は高々と嗤いながら言い返す。

最早この場にいる意味はない。あしゆら男爵は鉄仮面に命じ、葵を人質としてマジンガーZの前に連れ出そうと模索し、立ち上がらせる。

自分がどんな事に利用されると悟った葵はあしゆら男爵を殺意の籠もった目で睨み返す。しかし、あしゆら男爵はそんな葵の睨みにも嗤い返すだけ。

「しかし、よくよく考えれば惜しいことをしたのかも知れん。機械獣と対等である私の力をいとも簡単にねじ伏せたのだ。Dr. ヘルに仕えれば良き戦士となった筈」

だが、そんな事を考えても仕方のない事。あしゆら男爵は踏み潰した体勢のまま動かない機械獣の足下を一度見ると、踵を返して歩き出す。

—— 待て、今自分は何と言った？

機械獣と互角、D r. ヘルによつて改造された我が身はまさに生身に於いて最強の力を有する存在となった。

だが、そんな自分をいとも簡単に凌駕する馬鹿げた存在がいた。そんな怪物が機械獣にあつさり殺される事なんて……有り得るのだろうか？

嫌な予感の駆り立てられたあしゆら男爵が、冷や汗を大量に流しながら再びダブラスM2の足下へ視線を向ける。

相変わらず身動きしていない下僕である機械獣、いつでも命令を待ち望んでいるその体勢にあしゆら男爵は杞憂だったかと胸をなで下ろした。

——瞬間。

眩いまでの光……いや、黄金の炎がダブラスM2の足下から溢れ出した。

◇

まただ、またこの感覚だ。

真つ赤に染まる空、その下には燃え盛る炎の海が、俺の中にある何かを刺激する。

それは音なのか、はたまた声なのか……俺を呼ぶ何か、俺を刺激してどうしようもなくしてくる。

地獄の底から聞こえてくる怨差の音が、俺にコツチに来いと呼び掛けている。

不快、或いは嫌悪すべきソレ。だが、何故だか俺にはそれが心地良い物に感じる。

俺の中にあるモノが、全てを壊せと囁いている。そして、それに抗えない自分がある。

だけど……。

『良い事、不本意だけど貴方にはこれから私の護衛をして貰います！』『絶対に、私から離れてはなりませんよ！これは命令ですからね！』  
……ああ、分かっている。約束だからな。

約束とは「守る」モノ、お前が俺に教えてくれた大事な事。

お前を「守る」。そして、その約束を「守る」為にも……。

先ずは、この場を終わらせる。

気が付けば、あの不快な感覚は消えていた。

◇

誰もが理解出来なかった。

あしゆら男爵も、鉄仮面も、マジンガーZに乗る兜甲児も、その祖父兜十蔵も。

温泉旅館くろがね屋の面々も空に浮かぶDr. ヘルも、その光景に言葉を失い、啞然、或いは呆然としていた。

突如として起こった黄金の炎は荒れ狂う暴風となってダブルスを吹き飛ばし、熱海に燃え広がっていた炎を消し飛ばしていた。

夜空に浮かぶ星とは別に、眩い金の炎が光を失った薄暗い熱海を照らし出す。

そして、その中心には金髪碧眼の姿へと変わったブロリーが一步步あしゆら男爵に向けて歩き出していた。

一歩進めば放電現象が起こり、辺りの瓦礫を弾けさせる。また一歩進めば、今度は大地に亀裂が入り、風が吹き荒れる。

逆立った金髪、つり上がった碧眼。先程までの優男な印象を受けたブロリーは何処にもいない。

明らかに違う。呆然としていたあしゆら男爵は機械獣を操る杖、

バードスの杖を掲げて命令を下す。

「何をしているダブラスM2！早くその男を叩きのめせ!!」

あしゆら男爵の命令に従い、今まで仰向けに倒れていたダブラスに赤色光が灯る。

立ち上がり、その二頭の首でブロリーを押し潰そうとダブラスが迫り来る。

巨大な機械獣の接近、甲児は助けに向かおうと咄嗟に動き出すが、骸骨の機械獣によって阻まれてしまう。

飛鷹葵もブロリーに逃げろと叫ぶ、しかしブロリーは逃げる素振りも見せずフワリと浮かび。

ただコツン、と、ダブラスの胸元を軽く小突いた。

瞬間。

グボンと胸元が抉れたと同時に、金属の塊の巨人は遙か彼方へ吹き飛んでいく。

瞬く間に吹き飛び、熱海の街が見下ろせる高度にまで達するダブラス。

ふと、背中に壁にでも当たったのか、その勢いは突如として止んだ。

——何だと思いつ後ろを振り返ると。

「死ぬがいい」

自分を吹き飛ばした張本人、ブロリーが足を振り上げてそこにいた。

最早訳が分からない。ダブラスに思考出来るほどの理性があれば恐らくは混乱の渦に叩き込まれていた事だろう。

だが、そんな事も考える間もなく。振り抜かれたブロリーの蹴りがダブラスの背中を捉える。

メキリと入ったブロリーの蹴りはダブラスの体に深くめり込み、遂にはその巨体を左右二つに引き裂かれる。

そして、そのまま吹き飛んでいくダブラスの残骸は熱海の街へと戻り、あしゆら男爵の横を通って海に着水する。

次いで引き起こる爆発、舞い上がる水柱が天高く昇り、水滴の雨が地面へと叩き付けられた所で、漸くその場の時間が動き出す。

(何だ……何なんだコイツは?!?!?)

いつの間にか消え、そして再び目の前に現れたブロリーにあしゅら男爵はただ混乱する。

化け物だ何だと言われてきたが、目の前にいるコイツこそが真の化け物ではないか。

機械獣を赤子同然にあしらい、尚高まつていく力の波動。ゆっくりと歩み寄ってくる男が、本当にあの優男なのか？

何もかも違う。桁が、次元が、全てが違う。

「お、おおおいお前！ それ以上動くんじゃない！」

「それ以上動けば、コイツがどうなっても知らねえぞ！」

そんなブロリーの前に葵を人質にした鉄仮面の集団が遮る。

彼女の前に交差する二本の刃、それらを前にブロリーの動きは停止する。

流星に人質を取られると手も足も出ないのかと、あしゅら男爵は苦笑いを浮かべながら安堵する。

が、しかし。

「……………は？」

次の瞬間には鉄仮面集団の全てが、その命を絶っていた。

ある者は頭部を失い、ある者は上半身ごと吹き飛び、またある者はただの血の海へと消えていた。

そして、ブロリーの腕には傷一つ付いていない飛鷹葵が抱えられていた。

「え？ え？」

葵自身も何が起こったのか理解出来ず、ただ辺りを見渡すだけ。葵を地面に座らせ、ブロリーは今度こそあしゅら男爵に向かって歩き出す。

「た、タロス像よ！」

バードスの杖を掲げ、残りの剣闘士全てに指示を出す。感情のない巨人の人形は命じられたままにブロリーの下へ押し寄せる。

熱海を襲ったとされる全てのタロス像がたった一人の人間を抹殺

する為に動き、押し潰そうとする。

巨人の群による圧殺。群がり、そして跳躍するタロス像の群れに対し……。

「アアアアアアアアッ!!」

気合いの籠もった叫び、其処から発する衝撃波と舞い上がる金色の炎によってタロス像の群れは悉く吹き飛んでいく。

更にブロリーは右手の掌に碧の光を集め。

「フンッ!」

空へと舞い上がるタロス像達に向けて碧色の弾幕をぶつけ、夜の空を爆発と轟音に彩らせるのだった。



漸く骸骨の機械獣を倒したマジンガーZのパイロット、兜甲児は思う。

神、もしくは悪魔の力を兼ね備えているのは寧ろ彼の方ではないのか？

祖父の作り出したマジンガーZを疑うつもりはない。だが、それでも思わずにはいられない。

本物の悪魔とは、神とは、彼の事を言うのではないのかと

気が付けば、空を覆っていた影は消えていた。

熱海を埋め尽くしていた炎も消え去り、金色の男のおかげもあって敵は見事に迎撃できた。

お礼を言った方がいいのかな？ 兜甲児がブロリーに対しそう思ったその時。

『お、おい坊主、大変だ!』

「その声、あの時の不良刑事?」

『じ、爺さんが！ 爺さんが！』

一つの別れが、少年二人を待ち受けていた。

◇

夜が明け、朝日が熱海の街を照らし出す。

瓦礫となった街並み、しかしそれでもこの程度の損害で済んだのはひとえにマジンガーZと一人の青年のお陰と言えよう。

機械獣や鉄仮面集団を従えていたあしゅら男爵の姿は何処にも見当たらない。

恐らくは、あの時タロス像を襲わせた時、隙を突いて逃げ出したのだろう

一方で燃え広がっていた炎は消え、二次災害の可能性は今の所はない。避難していた人々もヒョッコリと顔を覗かせていた。

そんな中、飛鷹葵は目の前の男の背中に釘付けとなっていた。

襲い来る巨大な怪物達をその圧倒的な力でねじ伏せ、世界征服を目論む組織を撃退した男。

今までとは違う、熱く燃える何かが葵の中に広がっていく感覚を彼女は確かに感じた。

「……………ねえ、貴方は一体……………何者なの？」

葵の問いに、ブロリーは視線だけ彼女に向ける。

————ドクン。

碧色の眼光に葵は自分の鼓動が高く脈打つのをが分かった。

そして、ブロリーは葵の質問に答える事なく、フワリと空を飛ぶとリモネシアに向けて飛び立っていく。



瞬く間に……それこそ、瞬きをしている間に去っていくブロリーに、葵は彼がどこに向かったのか分かるはずもなく。

「……………絶対、突き止めてやる。アンタの事」

体の芯が熱くなる事を感じながら葵は立ち昇る朝日に誓うのだった。

一方で海岸沿いで一部始終見ていた機体が二つ、熱海の街を見つめていた。

『どう思うティエリア』

『どうもこうもない、あれが恐らくヴェーダが報告していた“金色の炎”の正体だろう』

『俄には信じられないな、人が空を飛ぶだなんて……………』

『スメラギⅡ李Ⅱノリエガに至急報告を、我々も離脱する』

『向こうはアクションの新型を捕まえたみたいだし、すぐ合流しないとね。彼に対する対応はその後になりそうだけど』

『……………帰投する』

(本音は、彼と敵対したくないけどね。出来ることなら)

その後、太平洋上に通信障害が発生したと同時刻、緑色の光が観測されたという報告が各国に出回る事になった。

しかし、後に世界はある話題で持ちきりとなる。

“生身の人間が巨大なロボ相手に圧倒”と。

そして、これがソレスタルビーイングに次いで世界に衝撃的な事になるとは、この時シオニーは想像すらしていなかった。

「出来るわけないでしょう!!」

ですよねー。

## 第九話 それぞれの考察1

世界は回る。それがどんなに辛く、過酷な日を迎えようとしても、人の意志とは無関係に、或いは無慈悲なまでに廻り巡っていく。

そう、それが喻え――。

「それで、言い残したい遺言は終わりかしら？」

「……………」

――自分が、絶対絶命の危機に瀕していたとしても。

エリア11とは違うもう一つの日本で起きた出来事から一夜開け、リモネシアへ超特急で帰ってきたブロリーを、家で待ち受けていたのはあしゆら……もとい阿修羅となったシオニー||レジスだった。

テロリストも裸足で逃げ出しそうな覇気を纏う彼女の後ろでは、もう一つの日本の熱海で起こった一件の生放送が報じられている。

内容は謎の巨大ロボを操る謎の組織から街を救ったとされる黒い巨人、マジンガーZと呼ばれるスーパーロボットの事についてだ。

その鉄拳を飛ばし、剣闘士を粉碎する映像や胸部から放たれる真紅の閃光によって髑髏のロボットを破壊する映像は衝撃的であり、世界中に報道され結構な話題となっていた。

……だが、問題はそこではない。

『――では、その熱海ではマジンガーZの他にもう一人、しかも生身の人間が巨人ロボを圧倒し破壊したと？』

『目撃者の証言によりますと、その人物は男性で金色の炎を纏っていたと情報があります』

テレビから聞こえてくる言葉に、ブロリーはビクリと肩を震わせる。

空気が重い。記憶が無く、普段は抜けているブロリーも今回ばかりは流石に不味いと悟った。

散々シオニーから禁止だと言われてきた例の金ピカ状態への変身。それを緊急事態とは言え無断で破ってしまったのだ。

約束を違えてしまった事への罪悪感で既にブロリーの精神的ライ

フはゼロ、これ以上はオーバーキルになってしまう。

「?????……三日間、ご飯抜き」

「!?!?!」

訂正、どうやらシオニーは精神的にだけではなく肉体的にもライフをゼロにするつもりらしい。

死刑宣告にも聞こえるシオニーの一言にブロリーは顔面蒼白となり、ガタガタと震えている。

果たして水だけで三日間耐えられるのか……この世界には砂糖と水だけでも一週間は耐えられると豪語する人間もいるらしいが、自分にはとても無理だ。

せめてそこに塩と米が無ければ到底不可能だ。ブロリーはひたすらこの三日を死なずに過ごすかを脳内で検討している。

「……………」と、言いたい所ですが、事態が事態でしたのでこの件は不問とします」

「……………」へ?」

一瞬、耳を疑った。不問という言葉の意味自体は理解していないが、少なくともさつきまで彼女から滲み出ていた怒気は消え失せているのは分かる。

だが分からない。約束を破った自分がどうして簡単に許されるのか、いつもならハリセンや拳骨の二つ位なら出てきてもおかしくはないのに。

混乱するブロリーの一方でシオニーは見えない様に軽く溜め息を零す。

(まあ、お陰でこの国も予想していなかった収入を得たし、世間はあまり信じている様子もないから……大丈夫でしょう)

普段とは違い、やたら樂觀的な思考を持つシオニー。だが、それは幾つかの理由があったからだ。

一つは金色の男、つまりはブロリーの存在が都市伝説の様な存在となっっているから。

というか、生身で十数メートルの巨大ロボを圧倒するという話自体が既に嘘くさい。直接見たわけでもない人間からすれば有り得ない

と鼻で笑う事だろう。

テレビの中に情報を流しているニュースキャスターも苦笑いを浮かべている事から、その信憑性もたかが知れているだろう。

それに、映像に映っているのはどれも鉄の巨人、マジンガーZばかりでブロリーが映っている様な映像は全く見当たらない。

ブロリーはその強大な力を持っているがあくまで人間と変わらない体格。瓦礫に隠れ全く見えていないか若しくはブロリーの動きそのものにカメラがついて来られないか、或いは混乱を抑える為に箝口令が敷かれたか……恐らくは全部だろう。

剩りにも有り得ない話が幸いし、世間は認知しようとしなない。それが喻え直接見た人間の証言であつてもだ。

皮肉にも、今回の件は世間の狭い視野を持つ民衆に助けられたと言つても過言ではない。

だが、それだけではこのリモネシアの利益に繋がる事はない。混乱しているブロリーを視界の端に追いやり、シオニーはテーブルに乗つた新聞へと視線を向ける。

その記事にもやはり熱海で起きた出来事がデカデカと掲載されており、見出しにはどれもマジンガーZの話題で持ちきりとなっている。

その隅つこでは太平洋上に謎の発光現象が観測されたという記事が添えられている。

リモネシアは太平洋上に浮かぶ小さな島国、その付近で観測されたという情報が民衆の興味心を攪り、このリモネシアに観光ついでに金色の男を探そうと訪れて来ているのだ。

既にどのリゾートホテルにも予約で埋め尽くされ、業務員は嬉しい悲鳴を上げているとの事。

リモネシアは元々観光や漁業で営んできた地域、ここでこの国の良さを伝えれば新しい顧客を獲得するチャンスが巡ってくる。

金色の男の正体を伏せたまま、且つこの国の利益に繋がる働きを見せた。偶然の産物で生まれた利益とはいえ、この国の役に立ってくれたブロリーにシオニーは下手に叱る事は出来なかった。

——それに何より。

(熱海が、以前のリモネシアに見えたと言うなら、尚更叱れる訳がない)

以前、リモネシアで起こったテロリストによる襲撃。家が、街が、人が焼かれた光景を目の当たりにしたブロリーが熱海でその光景を重ねた事により感情的になったのだとシオニーは推測する。

この街をあの商店街の二の舞にはさせない。ブロリーの行動にそんな意味があるのなら尚更罵倒する事は出来なかった。

首を傾げて此方の様子を窺っているブロリーの視線に、シオニーは咳払いをして。

「そんな事より、今日私は国連会議に出なければならぬ為、これよりブリタニアⅡユニオン領地に向かいます。準備なさい」

凜とした表情で付いて来いと伝える彼女にブロリーも頷く事で応えるのだった。

金色の男の正体、それに気づき始めた者達がいる事にも気付かず……。



太平洋上、リモネシアからは遠く離れた場所に位置する無人島。鬱蒼とした森に囲まれたその島に数人の男性と一人の少女が佇んでいた。

彼等の近くには巨大なコンテナが敷かれており、噴射口らしき箇所からは緑色の光が放出されている。

「そりゃ本当か？ ティエリア、アレルヤ」

「ああ、間違いない」

「信じられないけどね」

それぞれが同じパイロットスーツを着込んだ男性、ロックオンがティエリアとアレルヤと呼ぶ二人のメンバーからの報告に信じられない、といった様子で驚きを露わにしていた。

「じゃあ、今ニュースで流れている金色の男ってのは……」

「……存在していると確定しているだろう」

「マジかよ」

メガネを直しながらのティエリアの一言に、ロックオンは疲れた様子で目頭を抑える。

「機械獣を破壊して素手で巨大ロボを全滅させ、オマケに空を飛ぶ人間……スパーマンじゃあるまいし」

「実際凄かったよ。まるで特撮映画を見ている気分だった」

「冗談にしては笑えないな」

アレルヤなりの気遣いにロックオンは苦笑いで応える。だが、それでも彼等の表情は暗かった。

「……それでティエリア、ヴェーダやスメラギさんからは何て？」

「現状維持、引き続き我々は我々の任務をこなせ……と」

「現実逃避ね、気持ちには痛いほど分かるが」

宇宙に在るであろう自分達の戦術予報士が頭を抱えている姿を想像し、やはりロックオンは苦笑いを浮かべる。

自分達のように機動兵器に搭乗しているのでもなく、特殊なパワースーツを着ている訳でもなく、生身で圧倒する金色の男。

武力によって戦争を根絶する事を目的としているソレスタルビーイング……つまりは自分達にとってその男はまさに脅威と呼べる存在。

恐らくは、コロニー側のガンダム達も自分達と同じ心境なのかもしれない。

「じゃあ、以前リモネシアで暴れまわったWLFを壊滅させたのも？」

「奴の仕業と見て間違いないだろう」

「おかしいと思ってたんだ。マトモな軍事力もない弱小国が規模の大

きいテロ組織相手に完勝するなんてよ」

「僕達も世間から見れば充分テロリストだけどね」

アレルヤからの指摘にロックオンはそれを言うなどツツコミを入れる。

金色の男、その力は凄まじいの一言で、現存するどの機動兵器をも凌駕する性能を持つとアレルヤは言う。

そう、自分達の乗る『ガンダム』を含めて。

ティエリアもアレルヤと同じ見解なのか苦々しく思うも、反論する事はなかった。

計画実行の際にどんな妥協も許さないティエリアですら、金色の男の前では強気には出れないでいる。そして、その事実がまた彼等の悩みの種をより大きなモノになっていく。

我ながら大変な道を選んだものだど、ロックオンは微笑する。そんな彼の前に今まで黙っていた少女が拳手をする。

「あの、皆様金色の男について思い悩んでいるみたいですけど、そんなに深刻な問題なのでしょうか？」

「——王留美（ワン||リユームイン）」

「どういう事だい？」

「金色の男。確かにその力は侮りがたい代物でしょうが、彼が今の所は余所の国に対して武力行使をしている様子はありません」

ソレスタルビーイングの支援金として、或いは情報通達係として活躍している王留美の見解は自分達の計画にはあまり関係ないと提示する。

一見、金色の男は無差別な暴力を奮っている様に見えるが、実際は違う。

リモネシア、そして熱海、いずれも迫り来る脅威に対してのみその力を奮っている。

それを証拠に、金色の男は機械獣やテロリストたちを相手にしても、市民に対する攻撃は行っていない。

自分からは決して攻撃せず、戦争の拡大に繋がる行動はしない。つまり、ソレスタルビーイングの紛争補助の対象にはならないのだ。

しかし。

「だが、それはあくまで現状での話だ。奴の目的がはつきりしていない現段階では、その様な憶測は返って危険だ」

そう、テイエリアの言うとおりそれはあくまで現状の話。金色の男の目的がはつきりしない今、楽観する事は出来ない。

その彼の考えにはロックオンやアレルヤも同様で、最低でも油断ならない相手と認識する。

「けど、実際どうする？ 彼がもし紛争幫助の対象になった時……正直、僕はまだ敵対したくはないけど」

弱気な発言、しかしそれも当然と言えば当然だ。自分達はまだ世界に戦いを挑んだばかり、不安材料は確かに元からあったが今回ばかりは桁が違う。

生身の人間が、巨大な機動兵器を圧倒したのだ。公にこそ出ていないもののその力は未知数にして強大、前人未到の事態なのだ。

想定していたどのケースとも違う。予想だにしていなかった存在の登場に三人の浮き足が立っていると。

「武力による紛争根絶」

「刹那？」

「その男が紛争を撒き散らすというのなら、それを破壊するのが俺達ソレスタルビーイングのガンダムマイスターだ」

会話に介入してきたのは、一人の少年。まだ幼い印象を持つその少年はロックオンやアレルヤ、テイエリアと同じパイロットスーツを着ている。

少年のその瞳には迷いがなく、確固たる意志が秘められているのが分かる。

そんな彼の姿勢にロックオンは不敵に笑い、アレルヤは苦笑いをそれぞれ浮かべ。

「オーライ、確かにお前の言う通りだ刹那」

「ちよつとナーバスになってたよ」

突然現れたイレギュラー、しかしだからと言って自分達の掲げた理



念を曲げるつもりも毛頭ない。

それを思い出した二人は最年少のガンダムマイスターである刹那に向き直る。

自分達はソレスタルビーイング。喻え相手がどんな存在でも紛争幫助の対象になるのなら討つのみ。

既に自分達は世界に対して喧嘩を売った身、故に逃げる事など有り得ないのだから。

「そんな事、君に言われなくとも承知している」

そんな決意を新たにしたロックオン達とは違い、ティエリアだけは突っぱねた態度で示し、刹那を睨み付けている。

そんな彼苦笑いし、やれやれと肩を竦めていると。

「おおーい、いい加減話し合いは終わりがい？」

「おっと忘れてたぜ。お前さんにも話があつたんだつたな」

両手両足を縄で縛られ、更には目隠しまでと完全に身動きを封じられた男が、その格好とは似合わない明るい口調でマイスター達に話し掛けてきた。

「おいおい、人を捕まえておいてそりやないぜ」

「気に入らないな。我々を前にして……余裕のつもりか？」

「そう怒るなよ。これからコイツにはたんまり話して貰うからさ」

「んじゃ、お話の前にまずは自己紹介としようか。俺はクロウ・ブルースト、借金を返済する為に戦うテストパイロットさ」

自らの命の危機にも省みず、男はあくまで余裕の崩さない態度で秘密組織であるソレスタルビーイングの面々に高らかに名乗るのだった。



龍牙島。二つの日本に挟まれた人の足が踏み入られてない無人の島。

公には無人島と言われている島だが、その裏では恐ろしいまでの技術の結晶が注ぎ込まれており……言えばそれは、まさに秘密の基地である。

地下に建設された巨大なホール。空中には浮かぶ地球儀を模した座標地図が。

至る所にあるモニターからは世界情勢について最新の情報が映し出されている。

間違いなく国家レベル、しかも最高峰の技術を盛り込んだどれも画期的な代物。

そんな科学の結晶に包まれながら一人の男性と四人の男女が睨むように対峙していた。

……いや、実際には目の前の男性に対し一人の女性が、だが。

対峙している男の方は笑みを浮かべ、目の前にいる彼女達の警戒心を削ごうとしているが、それが逆効果となり、青髪の女性からは睨みだけでなく拳銃まで出されて威嚇されている。

「それで、考えて頂けたでしょうか？」

「つつてもなあ、いきなりダンクーガのパイロットをやれって言われても……」

「僕達は戦場に立った事も、機動兵器に乗った事もないのですよ？」

「ああ、それなら大丈夫です。ここにくる途中催眠学習で覚えさせましたから」

「勝手に人の頭を弄くるなんて……随分な事をしてくれるじゃない」「申し訳ありません。しかし私達は何分秘密組織で通っているもので」

「そんなのそっちの勝手じゃない」

平行線。噛み合っているようでそうじゃない会話。どんなに威嚇しても顔色一つ変えずに相変わらずの笑顔を浮かべている男に、青髪の女性がいい加減その指に掛かった引き金を引こうとした時。

「いいわよ。やってやろうじゃん」

その声に、全員が振り返った。

「おお、飛鷹葵さん。やってくれますか！」

「フルネームは止めて。葵で結構よ」

誰もがダンククーガという謎のパイロットをやれと言われ渋っていた矢先、赤い髪の女性、飛鷹葵が自らそれをやると宣言してきた。

これには他の面々は驚き、眼鏡の男に至ってははにかむ様な笑顔を振りまいていた。

「ち、ちよつとアナタ本気なの？」

「本気も本気、大真面目よ」

「ありがとうございます。では、早速此方にサインを……」

面食らっている他の面々を余所に契約書らしき紙を取り出す男。

葵はそんな彼を片手で制止して……。

「その前に、一つお願いしてもいいかしら？」

「契約金の事でしたら、まだ上限がありますけど？」

「いえ、お金の話じゃないわ。貴方達は私達の事を知り尽くしているみたいだけど、それってかなりの情報収集能力があるって事よね？」

「……そう、ですね。例えばそちらの館華くららさんは警視庁の麻薬捜査官。ジヨニーバーネットさんは大手企業のサラリーマン。加門朔哉さんはホームレス。そして貴方ごと飛鷹葵さんはF01のレーサー兼トップモデルと、それなりに情報は集められる自信はありますが？ ……それがなにか？」

「……私の望みは一つ、ある男を探して欲しいの」

「……その男とは？」

「——金色の男」

金色の男。その単語を口にした瞬間、その場の全員が驚愕に目を見開いた。

今まで余裕の笑みを浮かべていた男も、眼鏡を掛け直して僅かながら動揺を顕わにしている。

「金色の男って……あの熱海に現れたって言うあの？」

「ですが、あれは噂で都市伝説扱いされているのでは？」

「……………誰？」

……訂正、一人ホームレスだった朔哉だけは知っている様子はなく、驚きを隠せないでいる他の面々に置いてけぼりを喰らっていた。

「それで、どうなの?」

「いやはや、貴方も中々の難題を出してくれる」

葵の問に男……田中はやれやれと肩を竦める。しかもその口振りからして何か知っているようなその素振りにくらくらとジョニーは更に驚きを募らせる。

「まさか……実在していたの!?!」

「まさか、『男の都市伝説』にも載っていない情報を得られるなんて……」

「なあ、一体誰なんだよ。その金色の男つてのは?」

何やら周りがざわつき、一人取り残された朔哉は自分にも説明して欲しいと訴えるが、それに気付く者は誰もおらず、田中は再び眼鏡を掛け直し。

「分かりました。その願い、聞き入れましょう」

「なら、契約成立ね」

互いに握手を交わす葵と田中、その様子を見ていた三人は互いに顔を見合わせ呆然としている。

(あの男、金色の男は嘗てない衝撃を私に与えてくれた)

思い返すのは、熱海で遭遇したあの出来事。燃え盛る炎の中、機械獣という巨大な敵を相手の圧倒し、粉碎した絶大な力。

傷一つ負わず、全ての敵を駆逐したあの姿。

忘れられない。瞼の裏に張り付いて離れない。

(知りたい。彼を、あの男を!)

あの男に会いたい。嘗ての自分には有り得ない程の興味心に突き動かされ、飛鷹葵はダンクローガのパイロットになることを決意する。

戦いの中で、再びあの男と会える事を信じて。

(本当、名前だけでも聞き出せば良かったわ)

そして、今度こそあの朴念仁を――



「へエアツクション！」

「あら？ 貴方がクシヤミだなんて珍しいわね？」

「な、何だか急に鼻がムズムズして……」

ブリタニア・ユニオン領土内でも神聖帝国ブリタニアの強い影響力の下にあるとある街。次の仕事に向かうシオニーに付き従い、ブローリーもその後ろを歩いていった。

珍しくクシヤミをするブローリー、しかし体調不良という訳ではないと言う彼の言葉を聞き、シオニーは再び仕事場へと足を進める。

今回は会談ではなく、復興に置ける資材の運搬についての外交。

幾らシュナイゼル個人が復興を支援してくれると言ってもそれに甘えるシオニーではない。

国連、引いては三大国家に借りを作らぬよう、シオニーは率先して復興の指揮を取ることにした。

唯でさえ、噂程度であってもブローリーの正体がバレそうな状況にあるのだ。

復興支援に混じって金色の男の正体を探るべくスパイが送られてくる可能性だつてあるのだ。予断は許されない。

(マヌケな手を打たないよう、気を付ける必要があるそうね)

過敏ともいえるシオニーの反応、しかし、だからこそ彼女は一人で世界を相手にビクつきながら戦って来れたのかもしれない。

「いい事ブローリー、今回は……て、あれ？」

振り返れば、いつの間にかブローリーの姿は消えていた。

自分達のいる街は人通りも多く、ブリタニアの他にユニオンの基地

もある大きな都市。

「まさか、あの子は！」

はぐれてしまった相方のシオニーは頭を痛めながら来た道に戻るのだった。

一方、そのブロリーはというと……。

「……誰ですかあ？」

「こんにちは、僕の名前はV・V・（ブイツー）。はじめましてブロリー君。……いや、金色の男と言うべきかな？」

人通りの少ない路地裏で、奇妙な子供に絡まれていた。

## 第十話 無理とゲッターと金色と

世界を支配する三大国家のひとつ、ブリタニア・ユニオン領土内。中でも神聖ブリタニア帝国の影響力が強く出ているとある街。

シオニーの仕事に護衛として付き添ってきたブロリーだが、混雑する人波に呑み込まれシオニーとはぐれてしまう。

人通りの少ない路地裏で漸く人波から解放されるが、初めて訪れた街故に土地勘などありはせず。

以前エリアーの時の様に誰かに聞いてシオニーの仕事場である外交の会場へ向かおうとした時。

「やあ、初めましてブロリー君」

その少年は突然と現れた。なんの前触れもなく、まるで瞬間移動したかのように。

少年は自らをV・V・と名乗り、しかも今影の話題となっている金色の正体も見破っている。

ただ者ではない。ここにシオニーがいれば間違いなく警戒心を露わにする事だろう。——しかし。

「……………ジョイ君ですかあ？」

「V・V・だよ、ブ・イ・ツー！ 意外と失礼だね君」

明らかに不審な人物である少年を、ブロリーは天然で返した。これにV・V・と名乗る少年は出鼻を挫かれ、頬を引きつらせる。

「そのV・V・とやらが、俺に一体何の用だあ？」

普段と変わらない口調ではあるが、視線を細目、目の前の少年を怪しげに見やり、ブロリーは警戒心を顕わにする。

ブロリーは天然で其処に少しのお馬鹿要素が含まれているが、底なしの愚か者という訳ではない。

何の予備動作や前触れもなく、気が付いたら自分の目の前にいるのだ。明らかにこれまでとは違う存在にブロリーも自分なりに警戒しているのだ。

「そう警戒しないでくれよ。僕はただキミと話をしにきただけさ。……ああ、でもキミがその気ならラウンズに推薦してあげてもいいよ」

ラウンズ。それは通常の騎士候とは異なり、神聖ブリタニア帝国の皇帝直属の騎士。その実力はまさに一騎当千、いずれも最強の力を有する者達の総称であり、彼等に命令を与える事が出来るのも皇帝のみである。

だが、そんな事何故今この少年は口にするのだろうか？ よく見れば身なりの方はかなり上質であり、その身に纏う雰囲気は貴族の様な気品さが伺える。

この少年はどこかの格式の高いお坊ちゃんなのだろうか？ 普通の人間ならここで自分失礼な態度に謝罪し、印象良くする為に色々小細工を弄するだろうが。

「……もう一度だけ言う。俺に何の用だ？」

ブロリーはV・V・に対し更に目を細め、警戒ではなく敵意を剥き出しにする。全身から溢れる覇気に周囲の物体は耐えきれなくなり、アスファルトの地面はメコンと凹み、拳からはメキリと鈍い音が聞こえる。

既にブロリーは目の前のV・V・をいつでも殴られるよう戦闘態勢に入っている。しかも、割と本気でだ。

得体の知れない少年、V・V・……その存在にブロリーの中にある感覚の一つが油断するなど騒いでいる。

いずれにしても、金色の男の正体……即ち自分の事を知っている時点で油断はそもそもしていない。

ザワザワと逆立ち始める髪、膨れ上がるブロリーの圧力に流石にまらずと思ったのか、V・V・は両手を上げて降参の意を示す。

「勘弁してくれないかな、死なない体とは言え、流石に君に殴られたりしたら洒落にならないからね」

「……………」

死なない体。V・V・のその一言に僅かながら反応示すブロリーだが変わらず警戒を強めていく。



ブロリーの発する覇気はやがて周囲の建物だけには留まらず、表通りの参道にまで影響を及ぼし始めていく。

碎ける窓硝子、破裂する街灯、参道を歩く人々は突然起こった謎の現象に軽いパニック騒動が起きていた。

騒ぎ立つ人々の声が路地裏にまで聞こえてくる。だが、そんな事などブロリーにはお構いなしだった。

目の前の少年は既に敵として認識している。遂には戦闘態勢を取り、V・V・を何時でも殴れる態勢に入る。

相手に敵意はない。だがそれ以上に不気味だった。此方が相手の降参を聞いているにも関わらず戦う姿勢でいるというのに、ただ笑うだけで何もして来ない。

「——知りたいんでしょ？ 君の、自分自身の記憶を」「っ!」

ブロリーの目が見開く。知っているのか？ この少年は、記憶を失う自分を……知っていると言うのか？

言葉が出ない。今まで警戒していた緊張感が四散していく。

突然に突き付けられた一言は、ブロリーの警戒を削ぐだけではなく、ありとあらゆる警戒網を解いていく。

対するV・V・はしてやったりと三日月に歪む口元を更に深くする。

「知りたいのなら教えて上げるよ。君の事を、君の全てを……」

「なん……だど？」

「さつきも言ったけど、君をナイトオブブラウズに推薦してあげよう。僕の弟はブリタニアの皇帝でね、話せばきつと良い席を用意してくれるよ。君にはそれだけの力があるから」

「……………」

言葉が出なかった。あれだけ思い出そうとしてもただ頭が痛むだけで何も思い出せなかった記憶。それが今知っていると云う人物に会いしてしまった。

ナイトオブブラウズ。その席には何の興味もないし、欲しいとも思わない。

だが、目の前に記憶を知っている人物がいるのだ。どれたけ追い求めても知り得なかった記憶が、手を伸ばせば、すぐそこに！

「さあ、僕と契約して、ブリタニアの騎士になるんだ」

「あ、ああ……………」

前を見れば、微笑む少年が手を伸ばして此方に来いと囁いてくる。

抗えない。自分を知る事が出来る……恐らくは唯一無二のチャンスにブロリーが一步前に出た。

——瞬間。

『お願いね』

「っ!？」

『あの子を、シオニーちゃんを、守ってあげて』

足の動きが——止まった。

頭に浮かんだあの人の、女将との約束がブロリーの足を止めた。

対するV・V・はどうしたんだと訝しげに眉を寄せる。

自分の予想とは違う行動を取るブロリーに苛立ち始め。

「どうしたんだい？ さあ、早くコツチに……………」

思わず声を強めてしまったその時。

「っが!？」

ブロリーの拳が、V・V・の体を貫いた。ボタボタと落ちる大量の血が、ブロリーの腕に伝って落ちていく。

手応えあり。ブロリーはうなだれるV・V・に仕留めたと確信するが…………。

「やれやれ、まさか断られるとはね。流石はリモネシア外務大臣の騎士、中々に意志が固い」

「っ—」

胴体を貫かれた状態でムクリと顔を上げるV・V・にブロリーはギョツと目を剥いた。

確かに急所は突いた。普通なら即死の筈。だが、限にこの少年は平然と生きている。

ブロリーの腕を掴み、体から拳を抜き取ったV・V・は口元の血を拭いふに向き直る。

「流石に一回の誘いで来てくれる訳ないか。けどブロリー君、君は本当にそれでいいのかな？」

「貴様には関係ない。……俺は、自分の力で記憶を取り戻す」

ブロリーの返答にV・V・はただ笑う。

「君との会話は中々スリリングで楽しかったよ。また会おう、ブロリー君」

「逃がすか！」

路地裏の奥、闇へと消え行くV・V・を追おうとするブロリーだが……。

「っ！」

突如、頭上から爆音が鳴り響き、砕かれた瓦礫の山々がブロリーに降り注いできた。

瓦礫の群れを迴潜り、時には足場にして建物の屋上へと登り詰める。

一体何が？ そう思ったブロリーの目の前には全身を黒に染め上げた巨大な怪物達が街の空を埋め尽くしていた。



「ええい！ 一体何なのだコイツ等は!？」

街の近くにあるユニオン基地からフラッグを駆るグラハムIIエーカーは、突如現れた謎の怪物を相手に激闘を繰り広げていた。

既に組んでいた編隊の三割が怪物の放つ溶液にやられ墜とされている。

至る所から此方を覗く不気味な目、吐き出される溶液を避けながら

グラハムはフラッグのプラズマソードを取り出し。

「せえい！」

擦れ違い様に横に一閃、怪物を見事に両断してみせた。

だが、立ち止まる余裕などない。すぐさまフラッグを飛行形態へと変形させ群がってくる怪物の攻撃を回避し、一撃離脱を図る。

「くそ、何なのだコイツ等は！ 数が多すぎる！」

『グラハム。まだ民間人の避難が終わりそうにない、もう少し粘ってくれ！』

「そうしたいのは山々だが……くっ！」

通信越しの親友の言葉に何とか応えたいと思うグラハムだが、如何せん数が多すぎる。

たった数機のフラッグで何万の住民を守りながら数百の怪物と戦うのは、幾ら自分達でも不可能だと誰もが思う。

「何を弱気になっているのだ私は！ 自らこの場へ来る事を志願し、戦う事を決めたのだぞ！」

だが、グラハムは思う。自ら決死の覚悟で、やってやると決めて、この戦場に出てきたのだ。

「ならばこの状況、私の無理でこじ開ける！」

飛行形態から戦闘形態への空中変形。多大な負荷をその身に受けながらリニアライフルを怪物に向ける。

しかし。

「なにっ!？」

グラハムの高機動を物量で以て先回りを果たす怪物達。背後から迫る顎にグラハムも覚悟を決めた——その時。

「っ！」

割って入ってきた弾幕が怪物の横つ面を蜂の巣にしていき、怪物は四散しながら地上へと墜ちておく。

味方の増援だろうか？ 放たれた弾幕の方角へフラッグの光学カメラを向けると。

「三機の……戦闘機？」

それは、見たことのない機体だった。赤、白、黄色、三色カラーの

戦闘機が此方に向かって突っ込んでくる。

一体どこからの機体なのだろうか？ グラムの頭が僅かに混乱すると。

『チエエエエンジンゲッターアアアワァン!!』

三機の戦闘機が共に上昇し、一体のスーパーロボットへと相成った。



「何なのよ、何なのよこれはーっ！」

突如として襲いかかってきた黒い怪物は街を襲い、シオニーのいる大使館は怪物の無差別な攻撃によって崩壊していた。

既に外交相手であるブリタニアの大使は避難し、残るは自分だけとなった。

「シオニー外務大臣、こちらです！」

ブリタニアのSPの指示に従い、車へと乗り込もうとするシオニーだが。

「シエギヤアアアッ!!」

怪物の一体が目の前に降り立ち、車諸共SPを踏み潰してしまう。「ぎやあああっ!!」

爆散する車の爆発に煽られ、地面に叩きつけられるシオニー。衝撃が全身を襲い、激しい痛みが身体中に襲い掛かる。

痛みで身動きが取れない……そんな彼女を格好の獲物と思ったのか、黒い怪物の六つの目が怪しく光る。

「ひっ！」

逃げなければ。必死に逃げようと足を動かすシオニーだが、腰を抜かしてしまい立つことすらままならない。

黒い怪物がその顎を開き、シオニーに迫る。

「シオニーー！」

そんな時、ビルの屋上から飛び立ったブロリーが勢いを付けて怪物の頭を踏み潰す。

アスファルトを砕き、地中深くめり込んだ怪物の頭は腐臭を放つ肉塊となって辺りに散らばる。

「シオニー、大丈夫か?!」

「ブロリー?」

茫然自失になっているシオニーの肩を掴み、軽く揺さぶる。擦り傷や打撲らしき傷痕は目立つものの、それ以外の怪我は見当たらない事にブロリーは安堵の溜め息を漏らす。

プルプルと肩を震わせるシオニー。よほど怖かったのだろう。

もう大丈夫だと、ブロリーがシオニーの頭に手を伸ばす……が。

「この、バカアアアアッ!!」

「アダチン!!」

キレの利いたシオニーの右コークスクリューがブロリーの顔面に綺麗に入る。

「なんで側にいなかったのよ! あなたがいない間、私がどれだけ怖い思いをしたか分かってる!」

「……ごめん、です。……道に迷って」

ポタポタと鼻から流れる血を抑えながら釈明するブロリー。……機械獣やテロリストの攻撃にも掠り傷すら負わせられなかった。そんなブロリーを鼻血を吹き出す程に殴り飛ばしたシオニーは、色々人間やめているのかもしれない。

「と、兎に角ここを離れるわよ! もうすぐブリタニアの本軍がああ化け物を駆逐する為に動くはず。ここは戦場になるわ」

「……戦場?」

戦場。それはいったいどういう意味だ?

家が壊れるのか? 人が燃えるのか? 食べ物が無くなるのか?

家族がいなくなるのか？

「……シオニー」

「ど、どうしたの？」

「頼みがある」

胸の中に感じるざわついた感覚。

ブロリーは真剣な面持ちで主であるシオニーを向かい合い。

「俺を、戦わせてくれ」

自ら、戦いに出ることを求めた。



「つたく、うじやうじや湧いてきやがって、鬱陶しいんだよインベーダー共が！」

「なんだ竜馬、泣き言か？」

「だったら俺が代わりにコイツ等を始末してやるぜ？」

「ほざいてろ。隼人、武蔵、コイツ等は俺が皆殺しにしてやるって決めたんだ！ ソレスタルビーイングに合流する前の丁度いい肩慣らしになるー！」

「そういう割りには手こずってないか？」

「うるせえ！」

通信越しから聞こえてくる仲間の声に竜馬は更に苛立ちを募らせる。

ソレスタルビーイングと合流する為、自分達の愛機である『ゲッター』を駆っていた最中、ブリタニア領土で謎の侵略者『インベーダー』と遭遇。

街を襲っているコイツ等を全て倒す為に戦うのはいいが、如何せん数が多い。

ただ戦うだけならまだしも、街を、人を守りながら戦うというのは中々骨が折れる。

ユニオンの機体らしきフラッグも善戦してはいるが、やはり数の力にはどうしようもできないようだ。

……癪にさわるが、ここは同じゲッターパイロットである二人にも手伝って貰うしかない。

「ちっ、仕方ねえ！ 隼人、武蔵、お前等も手伝……」

そこまで言いかけた時、竜馬の目が大きく見開いた。

今、人間を襲おうとしたインベーターが、金色の閃光に貫かれ、跡形もなく砕かれたのだ。

街を蹂躪するインベーターを次々と駆逐していく一筋の閃光。

通信からは隼人、武蔵のそれぞれ困惑の声が聞こえてくる。

地上に降り立ったインベーターを瞬く間に駆逐した閃光は、今度は空から狙うインベーター達目掛けて飛び立つ。

「……なんだ。ありやあ」

竜馬は言葉を失う。人が、自分とさして変わらない人間の男が、金色の炎を纏って空を飛んでいるのだから。

「まさか……奴は」

「隼人、アイツを知ってやがるのか!？」

「……金色の男。まさか実在したのか!？」

驚きの声を上げる隼人。

驚愕に打ちのめされている彼等を前に、金色の男——ブローリーがゲッターの前に降り立つ。

此方を見向きもせず、ただインベーターのみを破壊していくブローリー。

その圧倒的な強さにユニオンのエース、グラハムⅡエーカーはその力に心奪われていた。



## 第十一話

「こんなものか」

襲ってきたインベーターをあらかた片づけたブロリーは上空から街を見下ろし、眩く。

未だに街のあちこちからは火の手が上がり、建物の多くは倒壊し、半壊している。しかし全てのインベーターを消滅させた事により人々の混乱は徐々に静まり返っていた。

もうここには用はない。インベーターを駆逐した事によりシオニーの安全も確立され、混乱が収まりきれない今が姿を消すチャンス。

ブロリーは街を背に飛び立とうとする……が。

『待ちやがれ！』

突如鼓膜を刺激する大音量の声に、一瞬驚いてしまう。何事かと思いつき振り返ると、そこには赤いマントを羽織ったこれまた赤い角付きの巨人が此方を見ていた。

『テメエが噂の金色の男か、ジジイや隼人の戯言かと思っていたが……まさか実在していたとはな』

「……………」

『テメエの目的は何だ!? インベーターを、俺の獲物を横取りしておいてタダで済むと……』

赤いロボット——ゲッターのパイロットである流竜馬は目の前の金色の男に向かって吼える。

しかし、そんな彼のイチャモンにブロリーが応える筈もなく、ブロリーは明後日の方へ向くと全身に炎を宿し、一瞬にして遙か彼方へと消えていった。

瞬きもする間もなく消えたブロリーに、竜馬は……ゲッターのパイロット達は戦慄する。

『おいおいマジかよ、消えちまったぞ』

『いや、恐らくは“消えた”んじゃない。俺達の脳が奴の去っていく

姿を認識できなかっただけだ。……所謂、超スピードってヤツだな』  
ゲッターはゲッター線を研究する早乙女博士が作り出したスーパーロボット。未知なエネルギー源であるゲッター線で動くゲッターロボは並の人間では操縦できず、乗り手を選ぶ怪物である。

それを乗りこなす彼ら三人の身体能力は、正しく超人と呼ぶに相応しいだろう。だが、そんな彼等でもブロリーの動きを捉える事は適わなかった。

間違いない奴は人間ではない。かといって人間に敵対する存在でもなさそうだ。

襲われた街の人々を守りつつ、インベーターを殲滅していく彼の姿には弱い者を守る「正義の味方」にも見えた。

(ふ、我ながらバカバカしい事を考えるものだ)

自嘲の笑みを浮かべ、らしくないことを考えた隼人は頭を振り、別の事に思考を移し替える。

『そろそろブリタニアの連中が此方に来る頃だ。竜馬、さっさと合流地点へ向かうぞ』

『……………』

『竜馬?』

此方の声が聞こえていないのか、それともワザと無視しているのか、一向に返事のない竜馬を訝しげに思うと。

『あの、野郎……………』

『おい、竜馬?』

『あの男、俺を、俺達を無視しやがった。ゲッターチームの、ゲッターロボに乗る俺達を……………!』

通信越しから聞こえてくる竜馬の声。その声色からは並々ならぬ怒りが画面越しに伝わってきそうさ。

竜馬はその外見同様に凶暴かつ乱暴な男、早乙女博士と出会う前はその力を己の欲のままに奮い、気に入らないものがあれば手当たり次第に潰してきた。

故に彼の周囲はいつも敵ばかり、血で血を洗う修羅のような生き様をし、それは彼にとって一種の誇りとさえいえた。

そして、それは竜馬同様他の二人にも言えており、だからこそゲッターに選ばれたのかもしれない。

だが、その誇りが、プライドが、一瞬にしてボロボロにされてしまった。それも、たった一人の男に、だ。

『名前は知らねえが、面は覚えた。次に出会った時は……覚えておけよ』

理不尽とも呼べる竜馬のイチャモンに隼人と弁慶は呆れたように肩を竦め、三人はゲッターを三機の戦闘機へと分離させ、街を後にした。



「それで、ちゃんと気付かれなかったでしょうね？」

「大丈夫だ。問題ない」

ブリタニア・ユニオン政府が用意した避難所で合流を果たしたシオニーとブローリー。ブローリーの不安になりそうな返事にやや呆れながらも、シオニーはなら大丈夫だなど確信していた。

ブローリーの身体能力に於ける速さは桁外れなパワーと同様に規格外である。

人間の視力、より深く言えば脳が認識する瞬間すら捉えられず、ブローリーと対峙した者はまるで瞬間移動をしたように消えたと感じる

だろう。

そんなブロリーの速さを仮に遠巻きで認識しようにも光学カメラでもその姿を捉える事は適わない。

どこぞの光の巨人のように、どこかへ消えた時には既に自分の後ろにいる。つくづくこういう事に関しては便利な奴だなと思いつつ、シオニーはブロリーに向き直った。

「本来なら厳罰に処す……と、言いたい所だけど、事態が事態なだけに今回は大目に見ます。現に、私も貴方のお陰で助かったとも言えますからね」

実際。ブロリーが来なければ自分はインベーターに喰われ、この世にはいなかっただろう。街を覆う程の大群で襲われておきながらたった被害が少ないのは間違いなくブロリーのお手柄だ。

まあ、間違いなく今後金色の男（ブロリー）について世間がまた騒がしくなることは間違いないが……。

疲れた様子でシオニーのため息混じりに吐き出される台詞にブロリーは少し嬉しくなった。これで少しはシオニーに恩が返せたと、そう思えたから。

だが、すぐにその考えは払拭される。何故ならブロリーにはシオニーに対して報告しなければならぬ事があるからだ。

「シオニー、これからの事なんだが……やっぱり、会談はするの？」

「どうかしらね。予定していた会場はインベーターに壊されたし、先方からの連絡もないし、流石に今すぐ行うか事はないと思うけど」

「そうか」

「どうしたの？ 貴方が何かを急かすなんて珍しいじゃない」

「……………実は」

それからブロリーは出来るだけ人に聞こえないよう声を抑えてシオニーに話をした。その内容は全て、あの路地裏で現れた少年の事。

自分をナイトオブラウンズに推薦させると言ったり、自分の事を知っているかのような口振りで惑わしたり、なにより……金色の男の、正体を知っていた。

「っ!!」

全てを、特に最後のブロリーの事について訊くとシオニーは目を見開く事で驚愕を顕わにしていた。

「……………心当たりは？」

「ない」

即答で返す辺り、本当にブロリーにも心当たりはないのだろう。唯でさえブロリーは嘘を付けないし、悪いことをしたら自分から謝り、疑問に思ったことは空気を読まずに口にするのが、この男の美点でもある。

そんなブロリーが断言したからにはシオニーは頭の中で他の要因を探る。

(ナイトオブブラウンズに推薦できると言うからには間違い無くその少年はブリタニア皇帝に関する者、もしくは権力のある皇族。……可能性としてはシュナイゼルが一番高いけど)

シュナイゼルの親族にブロリーが言うような少年はいない。ならば別の皇族か？ 訊いた報告の中で一番歳が近そうなのが第五皇女カリーンと、今はエリアーの極東事変で亡くなったとされるナナリー皇女。

二人の皇女がシオニーの脳内に浮かぶが、それはあり得ないと断ずる。

カリーンは皇女という立場を悪い意味で奮うお嬢様で、とてもナイトオブブラウンズに推薦できるような発言力を持っているとは思えない。

シュナイゼルだってカリーンを“駒”として扱うならもつと確実な方法を取るはず。ナナリー皇女は先の極東事変で亡くなっているとされている為詳しい情報は無いが、これもないだろうと判断する。

そもそもブロリーが言ったのは少女でなく少年だ。しかも、ブロリーの拳を受けて平然としているという化け物。

結局、ブロリーの話だけではその少年の正体を探り当てる事は不可能。自分に出来ることはブリタニアという巨大な帝国をより用心する事を心構えるだけ。

「分かったわブロリー。その少年に付いては私の方で調べるから、貴

方も日頃の自分の行動に注意なさい」

「ああ、分かった」

自分の言葉に頷き、理解するブロリーにシオニーはちよつとだけ遅く思えた。出会った当初に比べ、少しずつ自分出来る事を考え、行動し、時には反省しながら変わっていくブロリーに、シオニーは何か拙い弟の成長を見ている気分になった。

「ああ、此方にいましたかシオニー」レジス外務大臣」

「あなたは、確かシュナイゼル殿下の……」

「カノン」マルディーニと申します。レジス外務大臣が此方にいるとお聞きしましたので、此方に伺わせていただきました」

ブリタニア軍の制服を身に纏う美男性。カノンと名乗る人物は文官としてブリタニアに名を連ね、シュナイゼルの側近として活躍する実力者だ。

そんな人物が、ワザワザこんな所にまで来て自分に一体何用なのだろうか？

すると、カノンは辺りを見渡し、此方に視線が向いていない事を確認すると、シオニーに顔を近づける。

一瞬、綺麗な顔立ちをしているカノンにドキリとしてしまう。男でこれだけの美貌を持つのだ。ブリタニアという国は美男美女が多い国なのかもしれない。

などと、どうでも良いことを考えていると。

「クロヴィス殿下が何者かに暗殺されました」

「?!?!」

とんでもない爆弾発言が耳元で囁かれた。

暗殺された？ あのクロヴィス殿下が？

ほんの数日前までは会談で同じ席に座っていた人物の悲報にシオニーは目を見開いて驚愕している。

ブロリーの方は良く聞こえなかったがシオニーの様子ではただ事ではないのだと察し、カノンの方へと見る。

そしてシオニーから離れるとカノンはその美貌を真剣な表情へと変化させると。

「そして、シュナイゼル殿下からあなた方……いえ、そのブローリー様に（ご）依頼があると」

「俺？」

「はい。貴方には再びエリアーに赴き、犯人の逮捕に協力をお願いしたいのです」

その言葉はブローリーに対し、なんとも断りづらい内容だった。

「お兄様、本当にスザクさんが……」

「そんな筈はないさ。アイツがそんな事する奴じゃないって、ナナリーだってよく知ってるだろ？」

「は、はい。そうですよね。きつと、何かの間違いなんですよね」

「当たり前だろう。きつと、皆も分かってくれるさ」

「はい……」

（とはいえ、やはりアイツを助け出すには正攻法では不可能だ。ならばやはり使うしかないだろうなこの、〃力〃を）

とある日、少年は〃力〃を得た。何者も平伏す絶対的な力を。

それは『王の力』。それを得た少年は魔王となり、やがて世界を巻き込む戦いを引き起こす。

ならば相対させよう。『王の力』と『純粋な力』性質は違えど正しく力であるそれらを……。

果たして打ち勝つのは——どちらだ？

そして。

「皆、訊いてくれ！ 先日俺達に通信を入れてきた男から連絡が入った！」

「ホントかよ扇！」

「ああ、指定する場所はこの後報せるみたいだから他のメンバーにも報せてくれって」

「ケツ、どうせブリキ野郎共の罨なんじゃねえのか？ 正体現さずに声だけなんて信用出来るかっての」

「勿論それも検討したさ、だが声の主はそれだけじゃなくその内容を提示してきた」

「内容？」

「ああ、内容は——『奇跡を起こす』だそうだ」

「奇跡だと？ 日本解放戦線の？」

「いや、違うでしょ」

「やれやれ、どうやら声の主様は救世主らしいな。死神の俺とは相性悪そうだな。お前もそう思わねえか」

「知らん。俺は俺の任務を果たすだけだ」

「ありやま。そっちのバトリングの兄ちゃんは……………て、訊くまでもなさそうだな」

「……………」

機械の巨人を駆る少年達と、地獄を見てきた男、彼等との激突の瞬間は……………近い。



## 第十二話 純血派

「はあ、……鬱だ」

最近、こんな台詞ばかり吐いている気がする。

先日のブリタニア・ユニオン領内で起こったインベーターの襲撃事件。世間ではブリタニア軍とユニオン軍の共同戦線により事態が鎮圧されたと報じられており、金色の男——ブロリーに付いては一切触れられてはいなかった。

まあ、それも当然だろう。どこからともなく現れたヒーローが悪い怪獣をやっつけた。これだけ聞けば聞こえは良いがブリタニア・ユニオンからすれば面白くない事態になるだろう。

唯でさえインベーターという未だその生態が明らかになっていない生命体が襲ってきたというのに、更にそれ以上に謎に包まれている金色の男が介入されたと民衆に知られれば、ブリタニア・ユニオン軍の面目に泥を塗ることになるだろう。

そうなれば次なる国連議会に於いて不安材料になりかねない。大國同士のやりとりでは些細な出来事も致命傷になり得るのだ。

……自分としては互いに牽制し、最終的には共倒れになってくれれば御の字なのだけれども。

尤も、そうなってしまうえば深く探りを入れられて此方も入らぬ損害を受けてしまいそうなのであまり良いとは言えないが。

(まあ、此方の情報を隠蔽してくれるなら別に構わないけどね)  
ただ、問題があるとすれば。

「真実は、いつも一つ!」

「ママ、あの人コロン君の真似してるー」

「ホントね、きつと見た目は大人で中身は子供なのね」

「おい、何をしている?」

隣で赤い蝶ネクタイに丸い眼鏡を掛けたどこぞの子供探偵気取りのブロリー(バカ)の頭に愛用のハリセンで思い切り叩きつけた自分を、一体誰が責められようか?

「犯人捜すときはこの格好だつて聞いたんだが？」

「よし、まずはその情報は今すぐに捨てなさい。そしてその腹の立つ探偵グッズも外しなさい」

そう言われて渋々とネクタイを眼鏡をしまおうブローリーに、私は再び大きな溜息をこぼす。

インベーターに襲われ、一時は危機的状況に陥るが、そんな時ブローリーの力が発揮された事により事態も鎮静され、安心に思った矢先に奴は現れた。

カノン＝マルディーニ。シュナイゼルの側近にして文官。ブリタニア軍屈指の遣り手の一人。

彼が寄越してきた依頼内容は皇族の一人、クロヴィス殿下暗殺の首謀者を捕まえる事。既にこの情報自体は世界中に公開されている為公に口にしても誰も咎められないが……問題はそこではない。

最初は断るつもりだったが、その後に関かされる条件にその依頼はより断り辛くなった。

条件は二つ。片方は受けてくれた場合、復興支援だけではなく、その後の国同士による正式な貿易関係。此方の特産品やリモネシアで栽培、或いは造られる物品を輸出する代わりにブリタニア側からはナイトメアフレーム（通称NMF）の兵器開発を始めとした高度な技術力を寄越してくれる——といったものだ。

破格過ぎる。とても釣り合うとは思えないその条件に、私は承諾する処か更に警戒してしまう。

そして、シュナイゼルが用意したもう一つの条件。それはこの依頼を断った場合。

断った場合、此方の所持しているある情報を世界に公開する——  
——といったものだ。

情報。この場合に使われるその情報の内容はほぼ間違い無くブローリーの事だろう。

他にも知られてはまずい案件は幾つもあるが、現時点で一番厄介になる情報はそれしかない。

そもそも「あの計画」についてはその全てが「彼」が握っている。

漏らすようにも漏らせる程の情報はない。

(そもそも、何でこのタイムミング？ やはりシュナイゼルはブロリーの正体を……)

そこまで連想して、ゾクリと背筋に冷たいモノが流れる。

ブロリーの話す謎の少年の事といい。剩りにもタイムミングが合い過ぎる。やはり金色の男の正体が向こうにはバレているのか？

だとしたら不味い。下手をしたらブリタニア・ユニオンと本格的な対立へ発展する可能性だつて出てくる。

かと言つて断りでもすればその瞬間ブロリーの……金色の男の存在は全世界に知られてしまう事態になる。

そうなればブリタニアだけではない。世界中が敵になる事だつて有り得る。

しかし、このまま黙っていたら弱気な姿勢に漬け込まれそれこそ良いように利用されてしまい、リモネシアはブリタニア・ユニオンの隷属になってしまうだろう。

(どうする？ どうすればいい!? 戦争か？ それともブロリーの武力を楯に無理矢理にでも交渉に持ち込むか!?)

いや、どちらもハズレだ。戦争した所で勝てる見込みは薄いし、交渉した所でシュナイゼルやその文官に舌で勝てる自信はない。

たとすれば道は一つ。この依頼を受けている間に何としても奴らの弱みを握るしかない。もしくは本当に金色の男の正体を彼等が握っているのか確かめる必要がある。

分の悪い賭けだが、“あの計画”が開始される間、何としても大国の魔の手からリモネシアを守らなければならない。

「ブロリー」

「ん？」

「これからはコレまで以上に気を引き締めて掛かりなさい。不用意に力を見せればそれだけ私達の敵を増やすことになる」

だから、少し自重しろと言外に告げるつもりだったのだが。

「安心しろ。シオニーの敵は俺が全部叩き潰す」

「だから、そうじゃないっての」

拳を握りしめ、やる気を示すブロリーだが、私はそれに溜息をこぼさずにはいられなかった。なんで呆れられたのか分かっていないブルリーは首を傾げると。

「お待たせしました。シオニーレジス外務大臣様とその護衛、ブルリー様でいらつしやいますね」

「はい。貴方が今回の……」

「ヴィレッタ・ヌウと申します。政庁までの案内と警備は私に任せて頂きます」

宜しくと、互いに軽く挨拶を済ませて私達は用意されたリムジンへと乗り込む。

そう、既に私達はこのエリアーに足を踏み入れたのだ。

「犯人は必ず捕まえる。じつちゃんの名に……」

「お黙り」

あんだ爺さんいるの覚えてないでしょーが。

相変わらずアホな言動をするブルリー。……こんな奴が先日ではインベーターを駆逐する活躍を見せるのだから世の中は分からない。

だから、なのだろうか。

(本当に……勝ち目は薄いのかな?)

次元獣を殲滅した。テロリスト達を全滅した。インベーターを全て排除した。

だからどうした? どんなに優れた力を持っていようと世界と戦うにはまだ足りない。世界という壁は、たった一人の人間に壊される程柔くはない。

それが普通、それが常識、それこそが世界を世界たらしめる真理。その常識は喻えブルリーの力を間近で見た今でも簡単に覆る事はない。

そう——その筈だ。



ヴィレッタという女性騎士に連れられ、シオニーとブロリーは再び政庁の執務室へと通された。

ほんの数日前まではここでまだ生きていたクロヴィスと会談をしていたのに……少ししか関わりを持たない間柄とはいえ、やはりどこか心苦しく感じる。

そんな事を考えている内に、執務室にある机に書類らしき紙束を纏めた男性が此方に気付き立ち上がった。

「これはこれはシオニー＝レジス外務大臣殿。この度は遠いところからご足労下さり、誠にありがとうございます」

「礼には及びませんジェレミア卿。クロヴィス殿下には既に多くの恩恵を受けておりましたから」

此方の意図を探らせないようシオニーは言葉を選び、且つ相手の機嫌を損ねないよう勤める。

ブリタニア・ユニオンは大国。優れた技術力を持ち巨大で強大な軍事力を有しており、世界の三分の一を担う超大国である。

中でもブリタニア軍の多くの兵士はエリート意識が強く、他者を見下す傾向がある。国の敗北を知らない彼等常に自分達がこの世界の支配者だと信じて疑わない。

故に、少しでも盛り上げればその気になり付け入る隙も出来るというもの。

——尤も、シユナイゼルや帝国最強の騎士、ナイトオブブラウズはその類には入らない人種だが。

「そうですか。そう言っただされば亡きクロヴィス殿下も喜ばれる事でしょう。レジス外務大臣は先日インベーターに襲われたばかりだと言うのに……律儀な方だ」

そう言っつてハハハと笑う男。ジェレミア・ゴットバルトにシオニーは笑顔という仮面の向こうで殺意を抱く。

(律儀だと？ 従わなければ国諸共滅ぼす連中が良く言う)

大国。ただ国の面積が広いだけで世界の支配者の顔をするその存在をシオニーは許さない。

特に力で己の従う者には隷属を、そうでない者には死を与えるブリタニアにシオニーは殺意すら抱いている。

ブリタニアに蹂躪されたエリアー1、もう一つの日本には同情の念が感じ得ないが、それは他人事ではないのだ。

ここで感情的になっても此方が不利になるだけ、ならばこの場面は感情を仮面で覆い隠し相手の機嫌を伺うしかない。

影で臆病者だと、国連の腰巾着と蔑まされようとコレが彼女の選んだ生き方なのだ。

祖国の為に感情を殺す。その生き方がどれだけ彼女に深い闇を落とそうとも、彼女自身は変わらない、変えられない。

「所で、今日はどう言っただご用で？ レジス外務大臣は今自国の復興で忙しいと聞き及んでいましたか」

当然の疑問。予測していた質問にシオニーは予め用意してきた台詞を口にしようとする。

ジェレミア・ゴットバルトと後ろに控えているヴィレッタ・ヌウはブリタニアの中でも種族意識の強い純血派と呼ばれる一員達。ここで迂闊な事を言えば警戒心を抱かれここでの活動を監視付きに制限されてしまう。

だから最善の、それでいて最良の選択を言葉にして告げる。

「私達は「犯人を捕まえに来た」……………は？」

沈黙。口を開き、いざ言葉を紡ごうとした瞬間、突然として割って入られた声にシオニーは一瞬にして固まる。

ギギギと横に振り返るとそこには腹ただしい程のドヤ顔でサムズ

アップをしているブロリーがいた。

(な、何を余計な事をしてくれとるんじやあああつ???)

絶叫。阿鼻叫喚。内なるシオニーは余計な口出しをしてくれたブロリーにムンクの叫びの如く叫びを上げた。

未だブリタニア側に犯人逮捕という情報は流れていない。そんな時にそんな事を言えばブリタニア側は自分達の事を小馬鹿にするのだと……少なくとも良い印象は持たないだろう。

今この瞬間自分達の立場が急激に危うくなり、警戒心も跳ね上がり、即刻対立なんて事も……!

内心でブロリーの発言に対する言い訳を考えながらシオニーは冷静さを装い、最悪の事態を回避する為に脳内で今後の展開をシミュレートしていると。

「ふふふ、フハーツハツハツハ！」

突然笑い出すジェレミア。ゴットバルトにシオニーは目を丸くさせる。後ろに控えているヴィレッタも少々呆れた様子で苦笑いを浮かべている。

「いや、失礼。まさかそんな事を言い出すなんて……レジス外務大臣の騎士殿は中々ユーモアな方だ」

「どうやら今のブロリーの発言を冗談だと受け取ってくれたようだ。」

(セー……ッフ!!)

これにはシオニーも内心で深く安堵する。そしてこれ以上ブロリーが余計な口出しをしない内に話を切り替えようとするが。

「とはいえ、此方の説明不足でワザワザこのエリアーにに来て下さったのだ。私の方からも一つ情報を提示しましょう」

「情報?」

「ええ、クロヴィス殿下を暗殺した首謀者についてです」

「っ!!」

ジェレミアから突きつけられた一言にシオニーは驚愕する。

「まさか、既に犯人が?」

「現在はごこの政庁の地下にある独房で拘束しております。名は枢木スザク、旧日本の最後の首相枢木ゲンブの息子です」

「っ！ まさか、このエリアを奪還せしめようか？」

「事の真意はまだ尋問中の為に定かではありませんが……名誉ブリタニア人になる事で軍内部を把握し、殿下暗殺に踏み切ったのだと」「そう、ですか」

「誠に遺憾であります。クロヴィス殿下のお側に我々さえいればその御身を楯となってお守りしたものを……！」

表情を暗くさせ、拳を強く握って悔しさを現しているのを見て、シオニーは目の前の男がただのブリタニアの力に頼る者ではないとその印象を僅かに変える。

「しかし、宜しいのですか？ 幾らクロヴィス殿下と交流があつたとは言え、我々にそこまで情報を流して……」

「構いませんよ。これは後ほどこのエリアーに流す情報です。それに彼には明日公開処刑を行いますので」「っ！」

平然と処刑を口にするジェレミアにやはりコイツもブリタニアの人間かとシオニーは断ずる。

反抗する者には徹底した罰を。名誉ブリタニア人とは言え嘗ての首相の息子が祖国の為に仇敵の一人を討った。

その事實は植民地となったエリアーに住む元日本人だった人々から見れば英雄視されている事だろう。

だが、そんな彼の死を彼等に見せつける形として絶望をより強く与え、反抗する気概を根本から断つつもりだ。

なんて悪趣味で残酷で効果的な方法をこうも簡単に思い付くのだろうか。

「しかし、それでは彼を奪還しようと躍起になる組織も増えるのでは？ ここエリアーには日本解放戦線を始めとした多くのゲリラ組織があると聞きます。そんな彼等がアストラギウスの傭兵を雇ったりすれば結構な戦力になるかと……」

「無論、その点に付いては既に手を打っております。犯人を護送し警護するのは我々純血派を始めとしたブリタニア軍。そしてユニオン軍からも要請を出しておきましたので警備は厳重にしております」



「成る程、つまりあわよくば彼を餌に食い付いた輩を纏めて狩るおつもりですか」

「その通りです。レジス外務大臣は政治だけではなく兵法にも詳しいのですね」

「そんな、ただ素人なりに考えたのが偶々当たりを引いただけですよ」

ジェレミアのお世辞に社交辞令で返す。その後少しばかりの談笑を楽しんだ後、シオニーはある提案を切り出した。

「ジェレミア卿、クロヴィス殿下暗殺犯の護送警護に一人追加しても宜しいですか？」

「なんですと？」

「此方に控えているプロリーはナイトメアや機動兵器には乗りませんが生身での戦闘力は中々です。あなたの方の方に一つもない戦略布陣には余計な人材かと思われませんが……一つ、考えてみては如何ですか？」

「レジス大臣。幾らなんでもそれは……」

シオニーの提案にヴィレッツタが意義を唱えようと前が出るが横にいたジェレミアが手で遮る事でコレを制する。

シオニーの提案はブリタニアの……更に言えば純血派の人間にとつて余計なお世話とも言える内容だ。

何故なら彼等の真の目的はクロヴィスを暗殺した卑劣な犯人と日反抗を企む本人への牽制だけではない。純血派というブリタニア軍内部の派閥がより一層の存在力とその力を示す為のデモンストレーションなのだ。

純血派が犯人逮捕、純血派が混乱するエリアーを纏め上げた。純血派がテロリスト達を殲滅した。

そうすれば純血派こそがブリタニアに必要な存在だと認識され、軍内部での発言権も大きくなる。

いずれは名誉ブリタニア人の廃止という純血派の最終的な目的も可能となるだろう。

だからこそ、ここで余計な異分子を紛れ込ませる訳にはいかない。この行事は“純血派”が指揮するからこそ意味と意義があるのだから

ら。

だが。

「……お恥ずかしながら、我が国は弱小だけではなく警備体制もザルなのです。WLFなるテロリストに好き放題され、疲弊した我が国ではブリタニアや他の大国の方々に迷惑を掛けるばかり。今後同じ過ちを繰り返さぬよう私としても何らかの手段を講じねばならないのです」

ポツリポツリと語り出すシオニー。今までの彼女らしからぬ弱々しい言動にジェレミアやヴィレッツタだけでなく隣で控えているブローリーすら驚きに見開いている。

「世界を代表する『ブリタニア』、ひいては純血派を率いるジェレミア卿なら今後のリモネシアの警備体制に良き影響を及ぼしてくれる筈と恥を忍んでお願いしたいのです」

テーブルに手を起き、深々と頭を下げるシオニーに流石のジェレミアも戸惑いを見せる。

そして。

「……分かりました。そこまで仰るのでしたらブローリー卿の分の警備体制を新たに組み上げて起きましょう」

「ありがとうございます」

了承してくれたジェレミアにシオニーは頭を下げながら礼を述べる。……その一方で。

(フツ、チョロいわね)

頭を下げている状態で、それはそれは良い笑顔を晒していた。

その横でシオニーが目の前の二人に見えないように不敵な笑みを浮かべているのを何となく分かったブローリーは。

(シオニー……怖い)

また一つ、シオニーに逆らえない理由が増えた。

番外編 集え、はじまりのもとに――

それはいつもと変わらず。シオニーと共に多忙な毎日を過ごしていたとある日。

「いい？ 今回は国連議会というとても重要な会議があるの。余程の事態でもない限り勝手な事しては駄目よ」

「分かりました」

混沌とする世界。その中を嵐の如く突き進む二人に、世界中が注目し、また危険視していた。

そして今日も、ブロリーという凶悪にして強大な武力を持ったシオニーに国連という組織から尋問めいた質問責めを尽く捌く為にシオニーは歩む。

既に「彼」とは袂を分けた。今後どんな事態に陥ったとしても自分達だけで乗り越えるしかない。

だが、そんな彼女に迷いはなかった。何故ならこの世で最も強い男が自分を守ると誓って決して離れる事はないからだ。

勇み足で国連議会の会場へ赴く二人。もはや怖いものなど何もなかった。

そんな時。

『集え、はじまりのもとに――』

「なっ!?! これは!?!」

「シオニー!」

遙か遠く、けれど限りなく近い「世界」に新たな可能性として二人はこの世界から姿を消した。

そして、辿り着いた世界で新たな伝説という嵐が巻き起こる！

「あなたは……そこにいますか？」

「……………」

「ふえ、フェストウムを無視してる？」

「いや、多分自分に聞かれているのが分かっているだけかと……」

「お願いブロリーさん！ 一騎君の帰る場所を守って！」

「？ これを潰せばいいのか？」

漂流し、流れ着いたたとある島。そこで世話になった人々に恩を返す為、ブロリーは翔子という少女の願いを聞き入れ突如として現れた脅威に一人立ち向かう。

そして、異世界から帰館したアンノウン・エクストライカーズ……通称U Xと合流し、はぐれたシオニーを探す為に共に戦う事を決意する。

「俺は、正義の味方になる！」

「本物の暴力を教えてやろう」

「お互い、戦う事でしか存在を証明出来ない者同士」

「仲良く殺し合うのも悪かねえええっ!!」

「やってみせる、僕だって！」

「さあ、死を想像してみるがいい」

「魂イイイイイイイイイツ!!!」

巻き起こる波乱、荒れ狂う力達。正義の為と、己の信念の為と、己の信じるモノの為に戦う人達を前に。

「このカブト虫、美味いかな？」

「バジユラを喰うなああああつ!!」

ブロリーはやはり平常運転だった。

「さあて、この僕、桐山が正義の味方になるために君たちは死んでもらぎやーっ!!」

「五月蠅いです」

時にはワンパンで正義の味方気取りを粉碎したり。

「我が輩の力、見せつけるのであくるばああああつ!!」

「台詞の途中で割り込むのはエルザの特権ロボなのにく！」

「おお、飛ぶなあ」

「……なあアル」

「……………なんだ？」

「アイツ、マスターテリオンともやり合えるんじゃないか？」

「……………言うな」

敵からだけでなく、味方からすら呆れられ、けれど憎みきれないブルリーの素性に最初は警戒していた他のUXメンバーも徐々に打ち解けていく。

フェストウムを、バジユラを、宇宙からの侵略者達を、悪の秘密結社を、その剛腕でねじ伏せるブルリーに悪しき者達は狙い始める。

「グフフ、大人しく言うこと聞かんとお前のお姫様がどうなっても知らんぞ？」

「彼女の命を救いたいのなら、我々の指示に従ってもらおうぞ」

火星帰りの男、卑劣な手段を用いて権力を掌握しようも画策する男ハザードⅡパシヤの魔の手が迫…………

「シオニー、待たせたな」

「遅い！ と、言いたい所ですが貴方も色々大変だったみたいですね。今回は不問とします」

「な、何故貴様がここに!? お前はワシの別荘で拘束した筈じゃ…………」

「しかもあそこはここから数百キロ離れた場所であり且つ機動兵器を用いた完全な警備体制の筈！ 一体どうやって!?!」

「シオニーの気配を辿ったら見つけた。今の俺なら地球の裏側にも見つけられる」

「それに、彼ならものの数秒で地球を何周も廻る事ができます…………さて、ハザードさんでしたか？ 覚悟は宜しいですね？」

「あ、あわわわわ…………」

「貴様等には最も醜く、哀れな死をくれてやろう」

「ひ、ひいいいゝつ！」

火星帰りが木星帰りに喧嘩を売ったのがいけなかった。

こうして、時には誰も知らない所で一人活躍をしていき、このまま争いは収まるかと思われた。

しかし。

「オッス、オラ悟空！」

それは、禁忌(タブー)。出会ってはいけない二人。あつてはならない事態だった。

己の原点であり始まり。それを前にしたとき。

「カカロットオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ブロリーの「命の目覚め」が始まる。

そして。

「さあ、貴方も眠りなさい。新たなユガの為に、全てを始める為に」  
終焉の女神が、終わりを告げる悪魔が、舞い降りる。

「孤独の悪魔よ。もういいのです。貴方の命はここで終わるのです」  
本物の神。正しく神と呼ばれる存在に誰もがその姿に膝が折れた。  
しかし、彼は眠らない。立ち上がる。元よりその身は眠るには些か興奮し過ぎているからだ。

「宇宙の運命とて、輪廻の終焉とて、この俺を超えることは出来ぬううう!!」

さあ、見せつけてやれ、本物の悪魔を、化け物の力を、神と呼ばれる存在を打ち消すために。

そして……その果てに。

「まさか、そんな！」

「これは、この神気は?!」

目覚めろ。

超サイヤ人………ゴツド!